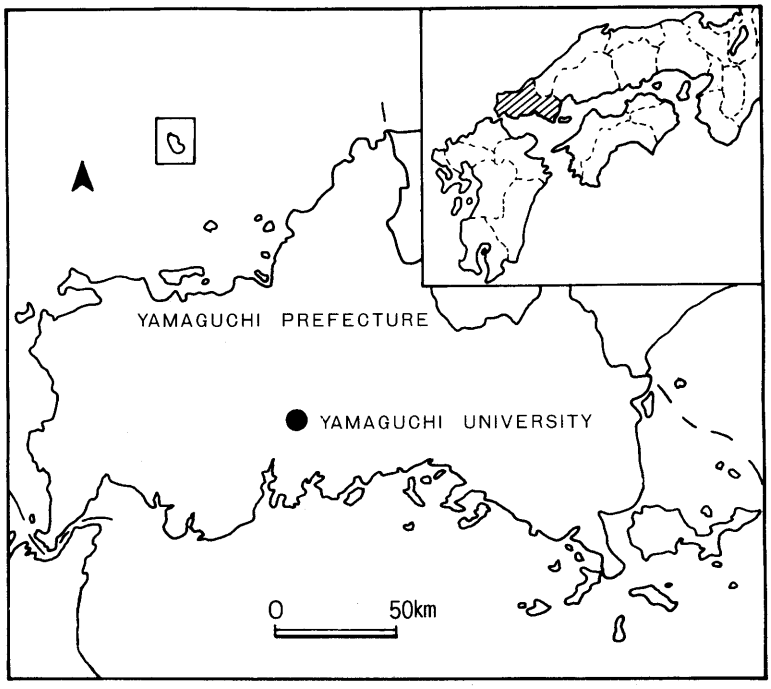
山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅱ

1 9 8 5

山口大学埋蔵文化財資料館

山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅱ



1 9 8 5

山口大学埋蔵文化財資料館

発刊にあたって

このたび、本学が昭和57年度に大学構内で実施した発掘調査の記録を『山口大学構内遺跡調査研究年報　Ⅱ』として刊行するはこびとなりました。

吉田地区では古くから遺跡の存在が知られていましたが、昭和41年本学の当地への統合移転の際、多量の遺物が出土したことが契機となって学内に吉田遺跡調査団が組織され、数次にわたる発掘調査が実施されました。その結果、吉田地区は古くは縄文時代から弥生、古墳時代を経て近世に至る有数の複合遺跡であることが明らかとなりました。

さらに、昭和53年には埋蔵文化財資料館が設立され、吉田遺跡調査団の業務は着実に継承、発展されることになった。資料館では生産跡、埋葬跡の把握を含めて大学構内に分布する各時代の集落の生活実態および変遷過程の解明に向けて調査・研究が進められており、その成果として、地域の歴史をはじめとする集落遺跡研究に寄与する知見には豊かなものがあります。

その意味からも研究・教育を通じ社会への貢献を使命とする本学において、施設・環境整備と共に進む構内遺跡の調査・研究および遺跡保護は、周知の遺跡上に立地する課題のひとつといえます。

本学においても施設・環境整備は国民共有の財産としての文化財の保護と本質的には決して競合するものではなく、将来を展望した両者の協調によって円滑に進めることができるものと確信しております。

最後に、発掘調査および報告書刊行にあたり、御理解・御協力をいただいた関係部局・各位に対し深甚なる感謝の意を表したい。

昭和 60 年 12 月

山口大学
学長　粟屋和彦

序　　文

山口大学は、キャンパス内に埋蔵文化財をかかえている。埋蔵文化財という、普段は地中に埋もれているものの重要性を認識するのはなかなかむつかしい。大学の建物を建てる際には、事前になんらかの形で調査をしなければならない。調査の結果、重要と判断される遺構が検出された時には、設計変更をよぎなくされる場合もあり得る。予算を使い、手間ひまをかけて、あげくの果には設計変更もあるとなると、それこそなんのためにそのようなことをしなければならないのかという思いをもつ人も、なかにはでてくるかも知れない。日本のような狭いところでは、どこを掘ってもなにかがでてくる筈で、それほど熱心に埋蔵文化財の調査を、キャンパス内で行う必要はないのではないかという考え方もあるかも知れない。しかし、教育・研究の場である大学内で、現在の利害だけを第一にして、自身で発言しない埋蔵文化財に対しては、ほどほどに扱えば良いといった態度で良いものであろうか。

幸い山口大学は、統合移転いらい埋蔵文化財の調査と積極的にとり組んできた。小野忠凞、八木充、中山清次各氏をはじめとする山口大学吉田遺跡調査団や山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会の活動は、困難ななかにも埋蔵文化財の重要性を学内・外にうったえ、その理解に支えられて今日あることを得ていると私は思う。予算の伸びの少い昨今ではあるが、私達の先祖の歴史の跡を、少しでも明らかにするために資料館は力をつくしている。学内・外の方々の御理解と御支援をいただきたいと念じている。

昭和　60　年　12　月

山口大学埋蔵文化財資料館
館長　　近　藤　喬　一

例　　言

1. 本書は山口大学埋蔵文化財資料館が埋蔵文化財資料館運営委員会の指示を受けて昭和57年度に山口大学構内で実施した発掘調査の報告書である。
2. 「山口大学構内遺跡調査研究年報－昭和56年度－」は「山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅰ」と読みかえる。
3. 調査研究費は文部省施設整備費を充当し活用させて頂いた。
4. 調査研究における事務一般は事務局庶務課庶務係が統括し、実施面においては関係部局の事務部があたった。
5. 出土遺物の整理、復元は竹内真弓（現姓河村）が行った。
6. 遺構・遺物の実測および製図は河村吉行、竹内が分担して行い、本文の執筆・編集は河村があたった。
7. 中央図書館増築予定地M－16区におけるプラント・オパール分析については宮崎大学農学部藤原宏志先生に玉稿を賜った。
8. 調査においてはカラースライドを作成しており、資料館が保管している。広く活用されることを希望したい。
9. 調査組織は次のとおりである。（昭和57年次）

調査主体	埋蔵文化財資料館	館　長	中山　清次（農学部教授）
		館　員	河村　吉行
		〃	竹内　真弓
事 務 局	本部庶務部庶務課	部　長	小林　靖之
		課　長	田崎　智
		係　長	吉岡　隆夫
		庶務係	廣政　登
		〃	岩佐　厚子
		〃	杉山美由紀

10. 調査研究に際しては下記の方々の多大な御協力と援助を受けた。（官職は昭和57年度）

山口大学

庶務部　人事課長　山崎繁行　人事課長補佐　西澤喜昭　人事係長　西野雅博
人事係　石井繁雄　宮田満茂　給与係長　有吉　明

給与係　金子孝志　　吉村泰治

経理部　　経理部長　重吉雅裕　　主計課長　永井克知　　主計課長補佐　原田政明
経理課長　幸　文雄　　給与係長　中村文穂　　給与係　藪　達己
俵　雅宏　　庄野栄二　　用度係長　宮本茂雄　　用度主任　河本　進
用度係　宮本　秀

施設部　　施設部長　山本豊治　　企画課長　藤村　全　　総務係長　河野繁之
総務係　中光博輝　　企画係長　川西智信　　建築課長　栗尾晋祐
建築課長補佐　佐伯　敦　　第一工営係長　藤井　幸　　第一工営係
稲垣実造　　河田徹也　　第二工営係長　平田　治　　第二工営係
小川賀津夫　　第三工営係　三浦幸一　　設備課長　嘉松忠臣
電気係長　亦野高志　　電気係　松田清司　　鴻池啓次　　機械係長
鈴木輝美　　機械係　岡田吉彦　　園田　廣

学生部　　部長　佐藤昭夫　　次長　友瀧二郎　　学生課長　瀬口博己
学生課長補佐　大谷壽美人　　学生係長　林　季生　　学生係　末永保夫
山根　猛

附属図書館　館長　岩城秀夫　　事務部長　松川　衛　　整理課長　　辻　武夫
総務係長　木村賢治　　総務主任　端野輝昭　　総務係　熊丸アキ子
吉光紀行　　田中俊二　　高橋　章

教育学部　　事務長　新山健二　　事務長補佐　金重　保
附属養護学校校長　真田元祐　　附属養護学校副校長　上田文男
附属養護学校係長　平川和孝　　附属養護学校係　中谷雪生　　細田厚子

理学部　　事務長　佐々木實　　事務長補佐　梅原儀助　　林　貞夫
会計係長　石川恒夫

教養部　　事務長　佐々木友若　　会計係長　永久敏彦　　会計主任　伊藤敏穂
会計係　磯部孝至　　重本隆之　　溝端登紀男

人文学部考古学研究室

山口県埋蔵文化財センター　　山口市教育委員会

作業員　　今住ゆきえ　　浦山　芳子　　大隅恵美子　　末岡　琴美　　中野　満子
花村　正枝　　原　　芳子　　原口　順子　　藤田千代子　　三川　郁子
宮家　静代　　吉村　幸子　　米倉　喜子　　横山　尚幸

凡　　例

1. 調査地区および層位、遺構の位置は国土座標を基準として北から南へ１～24、西から東へＡ～Ｚの番号を付して50ｍ方眼に区画した構内地区割のＡ－24区南西隅を起点（構内座標 $x=0$，$y=0$）とする構内座標値で表示する。なお、平面直角座標系第Ⅲ系における座標値（Ｘ，Ｙ）と構内座標値（x，y）とは下記の計算式で変換される。

$$\begin{cases} x = X + 206,000 \\ y = Y + 64,750 \end{cases}$$

2. 本書に使用した方位は国土座標を基準とした真北を示す。
3. 遺構の表示は下記の記号で表記した。

　土壙……ＳＫ　　溝……ＳＤ　　柱穴……ＰＨ　　旧河川跡……ＮＲ

4. 遺構実測図の縮尺は必要に応じて１／30，１／40，１／60，１／200 とした。
5. 遺物実測図の縮尺は原則として弥生土器１／４、須恵器・土師器・輸入陶磁器・瓦質土器１／３，石器・土製品１／２に統一した。
6. 挿図の遺物番号は同一包含層および遺構出土のものについてそれぞれ通し番号を付し、本文、図版と一致させた。
7. 注は各章ごとにまとめて章末に記載した。
8. 土器の実測図は下記のように分類した。

　断面黒ぬり……須恵器　　断面白ぬり……弥生土器・土師器・瓦質土器

　断面網目……輸入陶磁器　　器面網目……黒色土器

本　文　目　次

第１章　昭和57年度山口大学構内遺跡調査の概要 …… 1

第２章　中央図書館増築予定地M−16区の発掘調査 …… 2

1　調査の経過 …… 2

2　層位 …… 3

3　遺構 …… 3

(1)　土壙 …… 3

(2)　溝 …… 8

(3)　旧河川跡 …… 11

4　遺物 …… 12

(1)　遺構出土の遺物 …… 12

(2)　包含層出土の遺物 …… 26

5　小結 …… 55

第３章　大学会館新営予定地M−14・15区の試掘調査 …… 60

第４章　昭和57年度山口大学構内の立会調査 …… 62

1　教育学部附属養護学校プール新営に伴う立会調査 …… 62

2　理学部放射性同位元素総合実験室排水桝新営に伴う立会調査 …… 63

3　教養部環境整備に伴う立会調査 …… 64

第５章　付篇 …… 65

1　中央図書館増築予定地M−16区におけるplant opal分析…藤原宏志 …… 65

2　防長における古代〜中世の土師器 …… 67

第６章　山口大学構内遺跡調査要項 …… 81

1　山口大学埋蔵文化財資料館規則 …… 81

2　山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会規則 …… 82

3　山口大学構内における主な調査 …… 84〜86

English Summary …… 87

図　版　目　次

本文対照頁

PL. 1　山口大学構内地区割および調査区位置図…… 1
PL. 2　山口大学吉田地区構内航空写真…… 1
〈中央図書館増築予定地M－16区の発掘調査〉
PL. 3 (1)　調査前発掘区全景（東から）…… 2
(2)　発掘区全景 …… 2～13
PL. 4 (1)　土壙ＳＫ１（南東から）…… 7
(2)　土壙ＳＫ２（南から）…… 8
(3)　土壙ＳＫ３（東から）…… 8
PL. 5 (1)　土壙ＳＫ４（南から）…… 8～9
(2)　溝および旧河川跡（西から）…… 9～13
PL. 6 (1)　溝ＳＤ４・５・６（東から）…… 12
(2)　旧河川跡ＮＲ土層断面（南から）…… 12～13
PL. 7 (1)　土壙ＳＫ２・３出土遺物 …… 13～15
(2)　溝ＳＤ３出土遺物 …… 15～16
PL. 8 (1)　溝ＳＤ３出土遺物 …… 15～16
(2)　溝ＳＤ４・５出土遺物 …… 15～17
(3)　旧河川跡ＮＲ出土遺物（弥生土器）…… 17
PL. 9 (1)　旧河川跡ＮＲ出土遺物（弥生土器）…… 17
(2)　旧河川跡ＮＲ出土遺物（土師器・須恵器）…… 18～27
PL.10 (1)　旧河川跡ＮＲ出土遺物（土師器）…… 18～20
(2)　旧河川跡ＮＲ出土遺物（土師器・黒色土器）…… 18～20
PL.11 (1)　旧河川跡ＮＲ出土遺物（須恵器）…… 19・21～27
(2)　旧河川跡ＮＲ出土遺物（須恵器）…… 19・21～27
PL.12 (1)　旧河川跡ＮＲ出土遺物（須恵器）…… 19・21～27
(2)　旧河川跡ＮＲ出土遺物（須恵器）…… 19・21～27
PL.13 (1)　旧河川跡ＮＲ出土遺物（輸入陶磁器・瓦質土器）…… 19・27
(2)　旧河川跡ＮＲ出土遺物（石器）…… 19・27・28
(3)　第３層灰褐色粘質土出土遺物（弥生土器）…… 27～29

PL.14 (1) 第３層灰褐色粘質土出土遺物（土師器）……29・30
(2) 第３層灰褐色粘質土出土遺物（須恵器）……30～32
PL.15 (1) 第３層灰褐色粘質土出土遺物（輸入陶磁器・瓦質土器）……30～34
(2) 第３層灰褐色粘質土出土遺物（石器・土製品・製塩土器）……33・34
(3) 第４層黒褐色粘質土出土遺物（弥生土器）……34～36
PL.16 (1) 第４層黒褐色粘質土出土遺物（弥生土器）……34～36
(2) 第４層黒褐色粘質土出土遺物（土師器）……36～43
PL.17 (1) 第４層黒褐色粘質土出土遺物（土師器）……36～43
(2) 第４層黒褐色粘質土出土遺物（土師器）……36～43
PL.18 (1) 第４層黒褐色粘質土出土遺物（土師器・黒色土器・須恵器模倣土師器）…36～43
(2) 第４層黒褐色粘質土出土遺物（須恵器）……36・44～50
PL.19 (1) 第４層黒褐色粘質土出土遺物（須恵器）……36・44～50
(2) 第４層黒褐色粘質土出土遺物（須恵器）……36・44～50
PL.20 (1) 第４層黒褐色粘質土出土遺物（須恵器）……36・44～50
(2) 第４層黒褐色粘質土出土遺物（土師器・須恵器）……36～50
(3) 第４層黒褐色粘質土出土遺物（輸入陶磁器・瓦質土器）……36・50・51
PL.21 (1) 第４層黒褐色粘質土出土遺物（石器・石製品・土製品）……51～54
(2) 第４層黒褐色粘質土出土遺物（須恵器窯跡側壁付着資料）……57
(3) 第４層黒褐色粘質土出土遺物（スラグ）……34
(4) 第５層明灰色砂質土出土遺物（弥生土器・土師器・須恵器）……54・55

挿　図　目　次

〈中央図書館増築予定地Ｍ－16区の発掘調査〉

Fig. 1　調査区位置図 …… 2
Fig. 2　土層断面図（その１）……（折込み）…… 3～4
Fig. 3　土層断面図（その２）……（折込み）…… 5～6
Fig. 4　遺構配置図 …… 8
Fig. 5　土壙ＳＫ１実測図 …… 9
Fig. 6　土壙ＳＫ２実測図 …… 9

Fig. 7　土壙ＳＫ３実測図 …… 10
Fig. 8　土壙ＳＫ４実測図 …… 10
Fig. 9　溝ＳＤ３・旧河川跡ＮＲ実測図 …… 11
Fig. 10　溝ＳＤ４・５・６実測図 …… 12
Fig. 11　土壙ＳＫ２出土遺物実測図 …… 14
Fig. 12　土壙ＳＫ３出土遺物実測図 …… 14
Fig. 13　溝ＳＤ３・４・５出土遺物実測図 …… 15
Fig. 14　旧河川跡ＮＲ出土遺物実測図（弥生土器） …… 17
Fig. 15　旧河川跡ＮＲ出土遺物実測図（土師器・黒色土器） …… 18
Fig. 16　旧河川跡ＮＲ出土遺物実測図（須恵器）１ …… 21
Fig. 17　旧河川跡ＮＲ出土遺物実測図（須恵器）２ …… 22
Fig. 18　旧河川跡ＮＲ出土遺物実測図（須恵器）３ …… 23
Fig. 19　旧河川跡ＮＲ出土遺物実測図（輸入陶磁器・瓦質土器） …… 27
Fig. 20　旧河川跡ＮＲ出土遺物実測図（石器） …… 28
Fig. 21　第３層灰褐色粘質土出土遺物実測図（弥生土器） …… 29
Fig. 22　第３層灰褐色粘質土出土遺物実測図（土師器） …… 29
Fig. 23　第３層灰褐色粘質土出土遺物実測図（須恵器） …… 31
Fig. 24　第３層灰褐色粘質土出土遺物実測図（輸入陶磁器・瓦質土器） …… 33
Fig. 25　第３層灰褐色粘質土出土遺物実測図（石器・土製品） …… 33
Fig. 26　第４層黒褐色粘質土出土遺物実測図（弥生土器） …… 35
Fig. 27　第４層黒褐色粘質土出土遺物実測図（土師器）１ …… 37
Fig. 28　第４層黒褐色粘質土出土遺物実測図（土師器）２ …… 38
Fig. 29　第４層黒褐色粘質土出土遺物実測図（土師器）３ …… 39
Fig. 30　第４層黒褐色粘質土出土遺物実測図（須恵器）１ …… 44
Fig. 31　第４層黒褐色粘質土出土遺物実測図（須恵器）２ …… 45
Fig. 32　第４層黒褐色粘質土出土遺物実測図（須恵器）３ …… 46
Fig. 33　第４層黒褐色粘質土出土遺物実測図（輸入陶磁器・瓦質土器） …… 51
Fig. 34　第４層黒褐色粘質土出土遺物実測図（石器） …… 52
Fig. 35　第４層黒褐色粘質土出土遺物実測図（石器・石製品・土製品） …… 53
Fig. 36　第５層明灰色砂質土出土遺物実測図（弥生土器・土師器・須恵器） …… 55

〈 大学会館新営予定地Ｍ－14・15区の試掘調査 〉
Fig. 37　調査区位置図 …… 60
Fig. 38　遺構配置図 …… 61
〈 教育学部附属養護学校プール新営に伴う立会調査 〉
Fig. 39　調査区位置図 …… 62
〈 理学部放射性同位元素総合実験室排水桝新営に伴う立会調査 〉
Fig. 40　調査区位置図 …… 63
〈 教養部環境整備に伴う立会調査 〉
Fig. 41　調査区位置図 …… 64
〈 付篇 〉
Fig 42　ガラスビーズ法によるプラント・オパール定量分析ダイアグラム …… 66
Fig. 43　南壁東隅におけるプラント・オパール分析試料採取柱状図 …… 66
Fig. 44　南壁東隅におけるイネ科植物生産量の推定 …… 66
Fig. 45－(1)　防長における土師器編年（試案）…… 75～76
Fig. 45－(2)　防長における土師器編年（試案）…… 77～78

表　目　次

Tab. 1　昭和57年度山口大学構内遺跡調査一覧 …… 1
〈 中央図書館増築予定地Ｍ－16区の発掘調査 〉
Tab. 2　旧河川跡ＮＲ出土遺物観察表（土師器）1 …… 19
Tab. 3　旧河川跡ＮＲ出土遺物観察表（土師器）2 …… 20
Tab. 4　旧河川跡ＮＲ出土遺物観察表（須恵器）1 …… 23
Tab. 5　旧河川跡ＮＲ出土遺物観察表（須恵器）2 …… 24
Tab. 6　旧河川跡ＮＲ出土遺物観察表（須恵器）3 …… 25
Tab. 7　旧河川跡ＮＲ出土遺物観察表（須恵器）4 …… 26
Tab. 8　旧河川跡ＮＲ出土遺物観察表（須恵器）5 …… 27
Tab. 9　第３層灰褐色粘質土出土遺物観察表（土師器）…… 30
Tab. 10　第３層灰褐色粘質土出土遺物観察表（須恵器）1 …… 32
Tab. 11　第３層灰褐色粘質土出土遺物観察表（須恵器）2 …… 32

Tab.12　第４層黒褐色粘質土出土遺物観察表（土師器）1…… 39
Tab.13　第４層黒褐色粘質土出土遺物観察表（土師器）2…… 40
Tab.14　第４層黒褐色粘質土出土遺物観察表（土師器）3…… 41
Tab.15　第４層黒褐色粘質土出土遺物観察表（土師器）4…… 42
Tab.16　第４層黒褐色粘質土出土遺物観察表（土師器）5…… 43
Tab.17　第４層黒褐色粘質土出土遺物観察表（須恵器）1…… 46
Tab.18　第４層黒褐色粘質土出土遺物観察表（須恵器）2…… 47
Tab.19　第４層黒褐色粘質土出土遺物観察表（須恵器）3…… 48
Tab.20　第４層黒褐色粘質土出土遺物観察表（須恵器）4…… 49
Tab.21　第４層黒褐色粘質土出土遺物観察表（須恵器）5…… 50
〈第６章〉
Tab.22　山口大学埋蔵文化財資料館運営委員（昭和57年度）…… 83
Tab.23　山口大学埋蔵文化財資料館特別調査員（昭和57年度）…… 83
Tab.24　山口大学構内における主な調査……84～86

第１章　昭和57年度山口大学構内遺跡調査の概要

山口大学構内は縄文時代晩期から近世にかけて生産・消費レベルにおいて日常生活の基盤を形成し、その地域の文化の複合体を拝出する集落の具体相解明に帰与する好個のフィールドを内包しており、山口大学埋蔵文化財資料館は各時期における集落の具体相把握のひとつの手段として、大学構内において関連部局をはじめとした学内・学外の全面的な協力を得て発掘調査を実施している。新営工事における調査は埋設管、環境整備等に伴う請工事の際には必要に応じて立会調査を実施し、施設整備等に伴う建物新営予定地においては周辺地域での既往調査結果を踏まえ、試掘調査等によって本格的な調査が必要であると認められた地域について事前調査を実施している。

昭和 57 年度は下記の５件について調査を実施した。

中央図書館増築に伴う発掘調査では土壙５基、弥生時代後期のものから近～現代のものまでの溝７条、弥生時代前期から鎌倉時代の遺物を含む旧河川跡、柱穴および３層にわたる遺物包含層を検出した。遺物包含層はいずれも二次堆積によるもので、弥生時代から鎌倉時代にかけての各時期の遺物が混在する。このなかには美濃ケ浜式土器、分銅形土製品および須恵器の窯の存在を示唆する資料も含まれており、キャンパス内に展開する集落の多様な一面を示している。

また、試掘調査は大学会館新営予定地で実施し、弥生時代後期の竪穴住居跡を検出した。

Tab. 1　昭和57年度山口大学構内遺跡調査一覧

調査区分	調　査　地　区	調査期間	構内地区割	挿図番号 図版番号
事　前	中央図書館増築予定地	５月31日 ～ ９月11日	M－16区	PL.１－43
試　掘	大学会館新営予定地	12月13日 ～ 12月28日	M－14区 M－15区	PL.１－44
立　会	教育学部附属養護学校プール新営予定地	２月７日 ２月14日	M－22区	PL.１－45
	放射性同位元素総合実験室排水桝新営予定地	３月12日	O－18区	PL.１－46
	教養部環境整備予定地	２月21日 ３月７日 ３月18日	J･K－16区 K･L－17区	PL.１－47

第２章　中央図書館増築予定地M－16区の発掘調査

１　調査の経過

調査地区は吉田地区キャンパスのほぼ中央部にあたり、本部管理棟新営に伴い昭和54年度に発掘調査を行った本部構内Ｌ－14区[1]とは最短距離にして約90ｍ南東に位置する（Fig. 1)。

吉田遺跡調査団旧調査区でいう第１地区の南端部に該当し、昭和41年度に本調査区北側に近接して東西に平走する構内循環道路拡幅および排水溝掘削に伴い調査が実施されている。それによると、調査された地域は北から南へ向って緩やかに延びる低丘陵の南縁辺部付近にあたるとされ、弥生時代から古墳時代後期の遺物包含層をはじめとして弥生時代中期後半の竪穴住居跡１基が検出されている[2]。

本地区に中央図書館が増築されることになり、昭和57年５月31日から試掘調査を実施した。その結果、予定地内全域にわたって弥生時代から鎌倉時代の遺物包含層が検出されたため、同年９月11日まで増築予定地約600 ㎡について発掘調査を実施した。

調査区北部および南部西半分は幅３～４ｍ、長さそれぞれ44ｍ、19ｍにわたる後世の削平が遺構面にまで及んでいたが、その他の地域について弥生時代から鎌倉時代の３層の遺物包含層、土壙５基、溝７条、旧河川跡、柱穴を検出した。３枚の遺物包含層は相互に整合状態で堆積しているが、各時期の遺物が混在しており、弥生時代以降の二次堆積に起因するものと思われる。

なお、調査進行の過程で調査区東部において水田跡の検出が予想されたため、自然科学分野の調査としてプラント・オパール分析を宮崎大学農学部藤原宏志氏に依頼した。

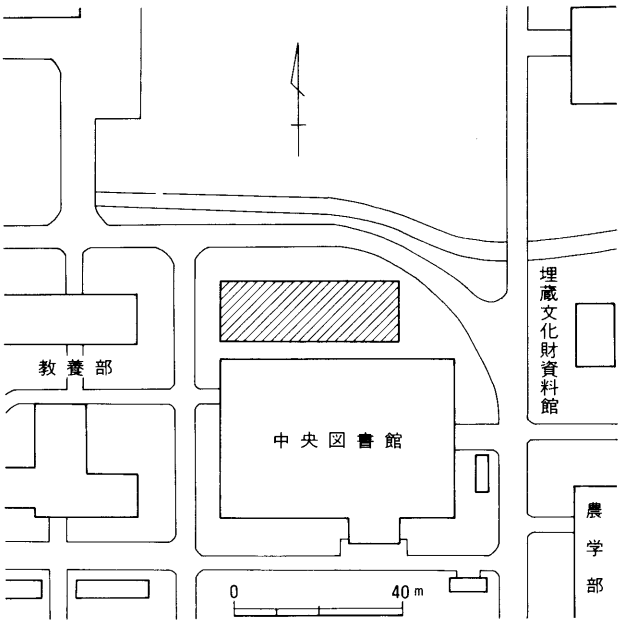


Fig. 1　調査区位置図（1800分の１）

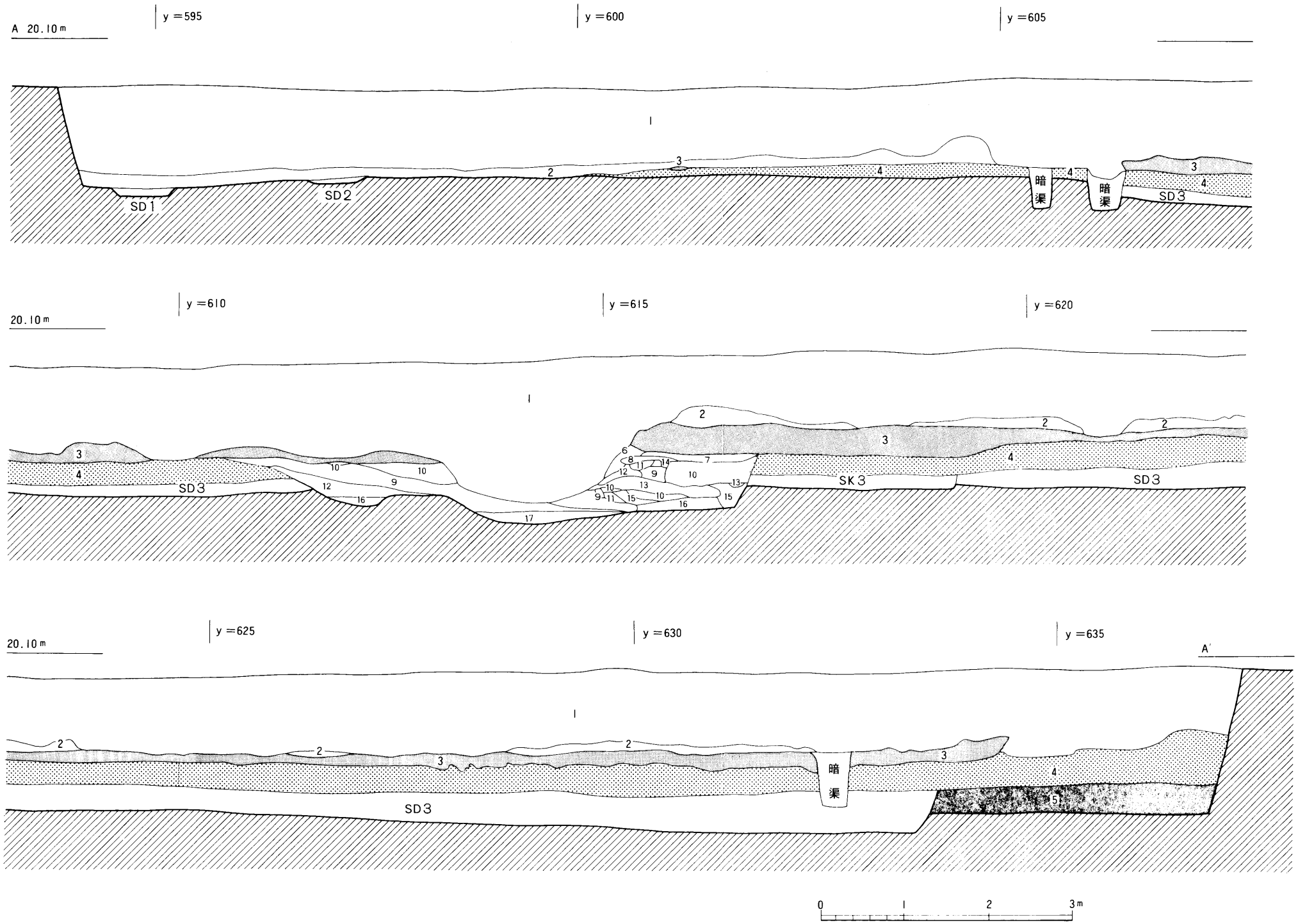
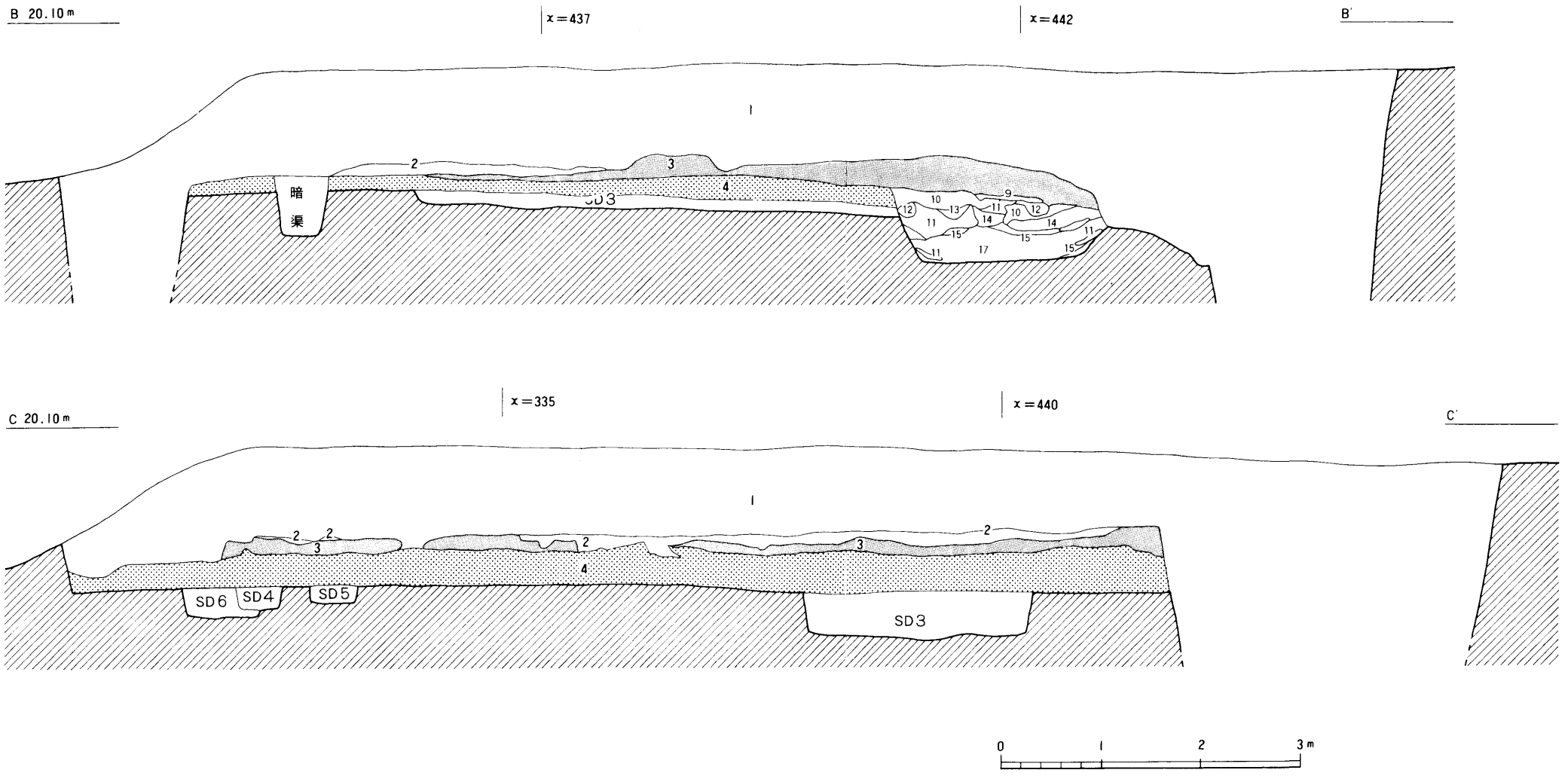


Fig. 2　A－A′土層断面図（60分の１）



凡 例

1 表土（腐蝕土、校内造成時等の置位）
2 暗灰色色土（旧水田耕作土）褐
3 灰褐色粘質土
4 黒褐色粘質土
5 明灰色砂質土
6 明黄灰色砂質土
7 黄灰褐色土
8 暗灰褐色土
9 暗灰色砂質土
10 黒灰色粘質土
11 暗灰色砂質土（径２～３cmの小礫含む）
12 明灰色微砂土
13 礫（径１cm以上）
14 礫（径１～２cm）
15 砂
16 暗灰色粘質土
17 礫（径２cm以上）

Fig.3 B－B′ C－C′土層断面図（60分の１）

2　層　位

調査区内は北から南へ延びる低丘陵が北側に近接して東西に貫通する構内循環道路拡幅および排水溝掘削等の諸工事によって階段状に削平され、現地表面は調査区北方の牧草地に比べ2ｍ弱低くなっている。調査区内の現地表面は東から西に緩やかに下降しており、東端部で標高19.90ｍ、西端部で19.50ｍである。

遺構が検出される地山面までの基本層序は4層に区分され、上位より第1層：表土、第2層：暗灰褐色砂質土、第3層：灰褐色粘質土、第4層：黒褐色粘質土の堆積がみられる（Fig. 2・3）。第1層は腐蝕土および構内造成時の置土を包括するもので厚さ平均80～100㎝、調査区北端部では東西方向に走る共同溝埋設に伴う掘削によって200㎝以上の厚さをもつ。第2層は旧水田耕作土で構内造成に伴う削平によって部分的に消失している。調査区西端部では直下が地山となっている。旧耕作土基底面の標高は東半部で約19.00ｍ、西半部$y=605$以西は18.40～18.60ｍで40～60㎝の比高差が認められる。第3・4層は弥生時代前期から鎌倉時代にわたる各時期の遺物を包含し、特に第4層の出土量は多い。また、調査区東端部では第4層の下位に弥生時代後期から鎌倉時代の遺物を包含する第5層：明灰色砂質土が堆積する。地山は$y=605$付近以西は黄褐色粘質土、以東は暗青灰色砂質土で調査区西端部は上述した低丘陵の西縁辺部にあたり、多量の遺物を包含する第3～5層はこの低丘陵上から調査区東半部に拡がる小規模な谷への流れ込みによる二次堆積層と思われる。

また、調査区中央部では、第4層堆積後に丘陵縁辺部に沿って小河川が形成されている。

3　遺　構

検出した遺構には土壙、溝、旧河川跡、柱穴がある（Fig. 4　ＰＬ3－(2)～6）

(1)　土　壙

5基検出した。不整形で浅いものが多い。

土壙SK 1（Fig. 5　ＰＬ4－(1)）

調査区東部$x=438$、$y=601$付近で検出された平面形態不整楕円形の土壙である。長軸106㎝、短軸71㎝の規模をもち、深さは検出面より16～18㎝と浅い。壙底標高は18.90ｍである。南半部は2段に掘削されており、壙底より11㎝上位に馬蹄形状の平坦面を有する。

内部よりの出土遺物は皆無であった。

土壙SK 2　(Fig. 6　P L 4 －(2))

1号土壙の約30 m北東x = 442、y = 603付近で検出された不定形の土壙である。北部を共同溝埋設に伴う掘削により削平されており長軸161 cm以上、短軸123 cmの規模をもち、深さは検出面より9 cmである。壙底は北西から南西にわずかに下降しており壙底標高は約19.80 m。

出土遺物には弥生土器、土師器椀、須恵器椀(Fig.11　P L 7 －(1))がある。

土壙SK 3(Fig. 7　P L 4 －(3))

調査区中央部x = 440 、y = 618 付近で検出された不整形の土壙である。西部は旧河川により切られ、北部は共同溝埋設に伴う掘削により消失している。長軸270 cm以上、短軸107 cm以上の規模をもち、東から西にわずかに下降する壙底は最深部で検出面より深さ14cmである。壙底標高約18.45 m。

出土遺物には弥生土器壷、瓦質土器火鉢、土錘(Fig. 12　P L 7 －(1))があるがいずれも流れ込みによるものである。

土壙SK 4(Fig. 8　P L 5 －(1))

3号土壙の東に近接して営まれた土壙でx = 445 、y = 620付近に位置する。西部を柱穴に切られ、東部を共同溝埋設に伴う掘削によって消失する。平面

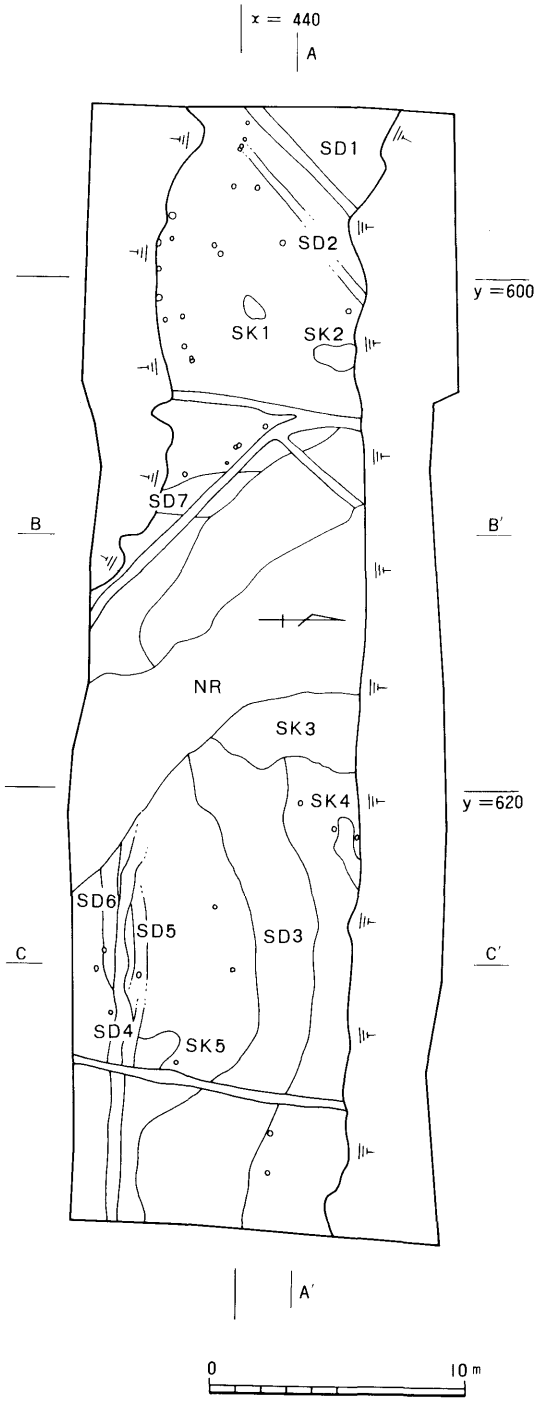


Fig.4　遺構配置図(300分の1)

形態は不整長方形状で東西に主軸をもち長軸205㎝以上、短軸94㎝規模をもつ。西隅は二段掘りになっており、壙底より5㎝上位に三角形状の平坦面を有する。壙底はほぼ平坦で最深部の深さは検出面より19㎝である。壙底標高18.95m。

内部からの出土遺物はみられなかった。

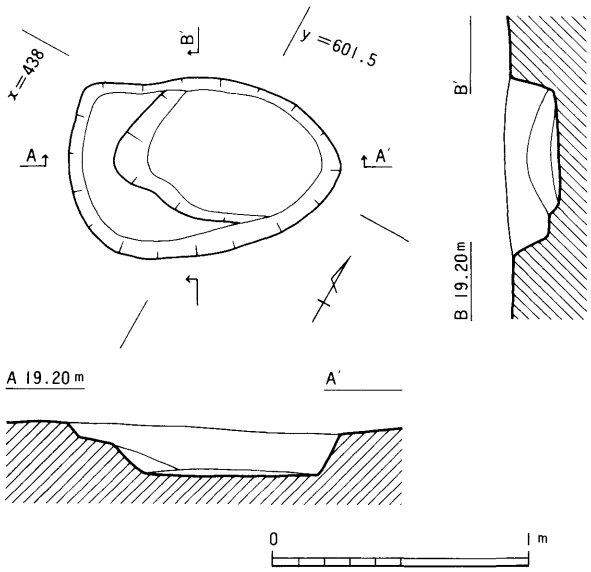


Fig. 5　土壙SK1実測図（1／30）

(2)　溝

調査区東半部を中心に7条検出した。溝SD1・2を除いて東西方向に流路をもつが、いずれも浅い。

溝SD 1・2

溝SD1は幅50～70㎝、深さ8～10㎝、溝SD2は幅60～70㎝、深さ5～8㎝の規模をもつ。いずれも近～現代の所産。

溝SD 3（Fig. 9　PL 5 －(2)）

調査区中央部を「S」字状に東西に貫流する溝で調査区外に連続する。断面形は逆台形状をなす。溝幅は一定しておらず最狭部$y=629$付近で2.6m、最広部$y=635$付近で4.4mである。溝底は西から東へ緩やかに下降し、$y=620$付近で検出面より深さ22㎝、$y=632$付近で深さ50㎝である。

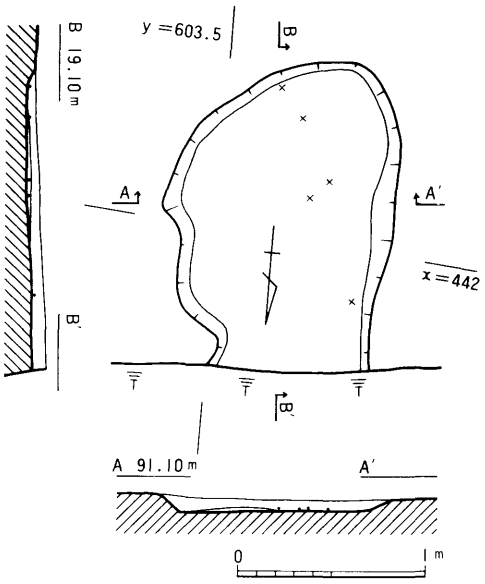


Fig. 6　土壙SK2 実測図（1／40）

旧河川に切られた状態で検出されたが河川の機能していた期間に時期幅があり、また、旧河川堆積土中に溝SD3覆土と同一層が認められることなどから旧河川および溝SD3は一時期併存して機能していた可

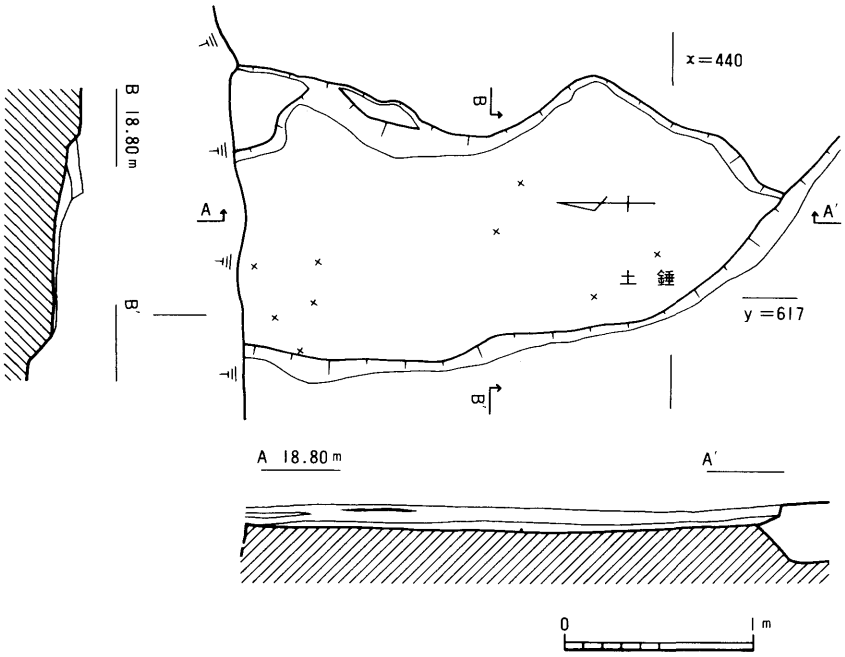


Fig. 7　土壙SK3 実測図（1／40）

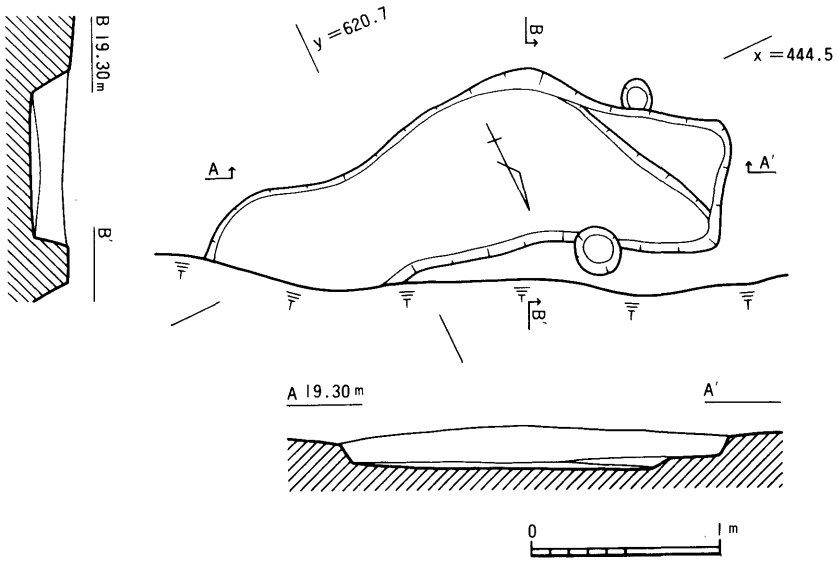


Fig. 8　土壙SK4実測図（1／40）

能性が指摘できる。しかし、溝SD3水口付近にしがらみ状あるいは堰状の構造物は検出されなかった。

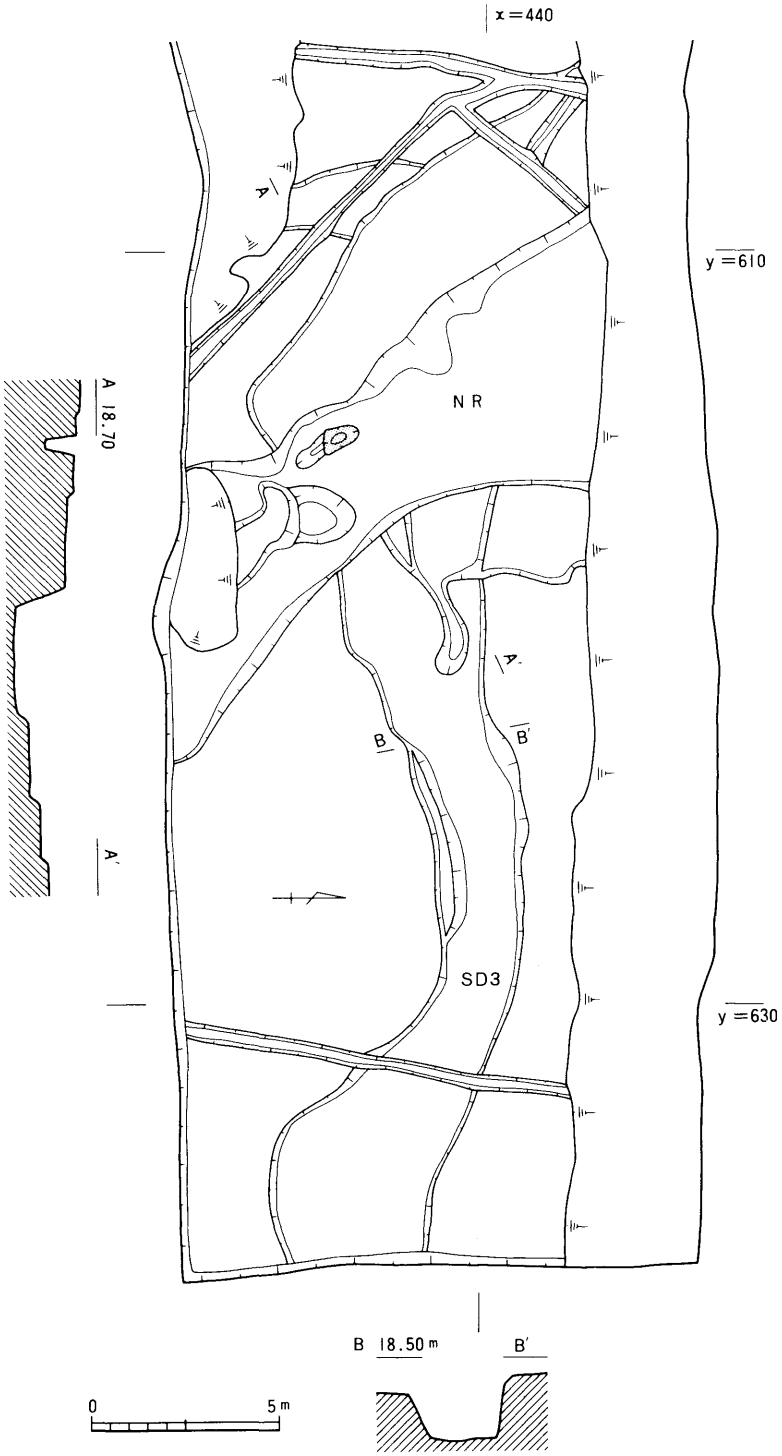


Fig.9　溝SD3．旧河川跡NR実測図（1／200）

覆土中より弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器が出土した（Fig.13　PL7－(2)，8－(1)）。

溝SD 4（Fig.10　PL 6 －(1)）

調査区南東隅において検出された小規模な溝で調査区外東方へ連続する。溝SD 5・6 を切っている。溝幅は約20cm、溝底は西から東へわずかに下降しており、溝深はA－A′付近で12cm、B－B′付近で18cmと浅く、溝底標高はそれぞれ18.40 m、18.50 mである。

出土遺物には須恵器坏がある（Fig.13　PL8－(2)）。

溝SD 5（Fig.10　PL 6 －(1)）

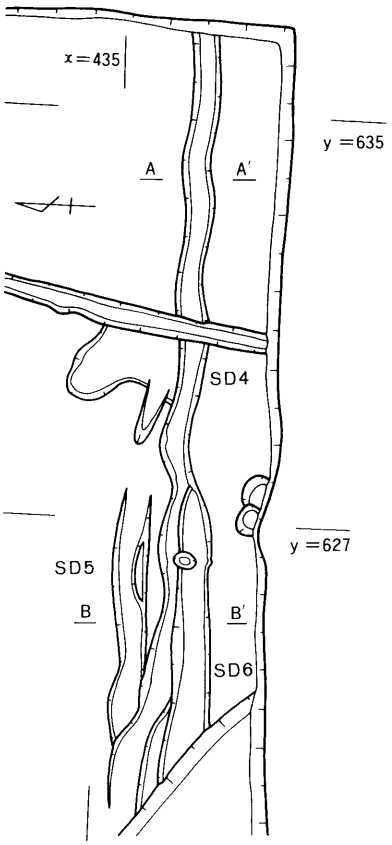
溝SD 4 に平行して走る小規模な溝でy＝626 付近で溝SD 4 に切られている。溝幅約30cm、溝底は平坦で溝深14cm、溝底標高 18.55 m前後である。

内部より弥生土器が出土した（Fig.13　PL 8 －(2)）。

溝SD 6（Fig.10　PL 6 －(1)）

溝SD 4 に切られながら溝SD 4 と東西に平行して営まれた小規模な溝である。検出時には旧河川に切られた状況が観察された。溝幅は22～26cmで西に向うにつれて規模を増す。溝深は14cmで溝底標高は約 18.30 m。なお、南壁に沿った溝底に径 2 ～ 3 cmの杭列が認められた。

出土遺物は皆無であった。



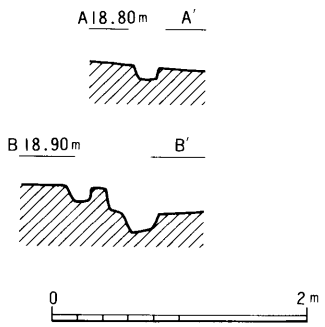


Fig.10　溝SD 4・5・6 実測図（1／60）

(3) 旧河川跡

調査区中央部を南東から北西に向って貫流する（Fig.9　PL 5 －(2)）。北部は共同溝埋設に伴う掘削によって大きく削平されている。幅はx＝437 付近が約 3.5 mで最も狭く、この付近を境にして南北に規模を増し北端部で約 6.5 m、南端部で約 5 mとなる。深さは北部で80～85cm、南部で50～65cmと川床は南から北へ下降するが中央部が幾分

深くなる。なお川床には砂礫層が厚く堆積し、第3層の堆積をもって河川の機能は停止する。

流路内には少くとも2時期の杭列が検出された。すなわち、$x=443$、$y=611$付近と$x=432$、$y=622$付近とを結ぶライン上に70～80cmの距離をおいて北西－南東方向に平行して打ち込まれた時期不明の一群（A杭列）と$x=441$、$y=612$付近および$x=438$、$y=613$付近と$x=434$、$y=616$付近とを結ぶライン上に110～130cmの距離をおいて北西－南東方向に平行して打ち込まれた一群（B杭列）である。

A杭列は径4～8cmの丸太材が10～13cm間隔で2列に規則的に打ち込まれており、南半部の杭列が河川東縁辺に沿うことから$x=432$、$y=612$付近と$x=432$、$y=624$付近とを結ぶラインがこの杭列に伴う河川の東河畔にあたっていたと推察される。

また、B杭列は径3～5cmの小ぶりの丸太材を使用しており、同様に少くとも$x=438$、$y=612$付近と$x=434$、$y=616$付近間の河畔ラインが杭列に伴う河川の西河畔であったことを示唆する。なお、河畔に近い西側の杭列付近にはその他の構造物はなく、河岸補強に依拠すると思われる杭の打ち替え、増強が認められる。

旧河川跡からは弥生時代前期から鎌倉時代前期にかけての各時期の遺物が混在しているが、B杭列は$x=436$、$y=615$付近に位置する不整楕円形の落ち込みからの出土遺物から古墳時代前期前葉にその上限をおくことができる。

3　遺　物

(1)　遺構出土の遺物

土壙SK2出土遺物（Fig.11　PL 7－(1)）

弥生土器（1・2）

1は平底の甕の底部で外面は縦刷毛目仕上げ。外面橙褐色、内面黄褐色を呈する。2は安定感のある平底の壷の底部。器面荒れのため調整不明。1・2とも胎土に砂粒を多く含むが、焼成は良好。

土師器（3）

底部と体部の境に貧弱な低い高台を貼付する糸切り底の椀。外面横ナデ、内面不明。濁黄褐色を呈し、胎土やや不良、焼成良好。復原底径6.2cm、高台高0.3cm。

須恵器（4・5）

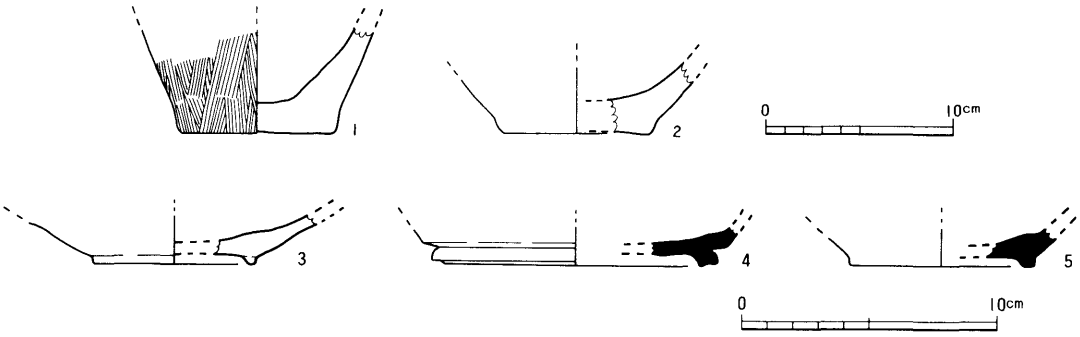


Fig.11　土壙ＳＫ２出土遺物実測図

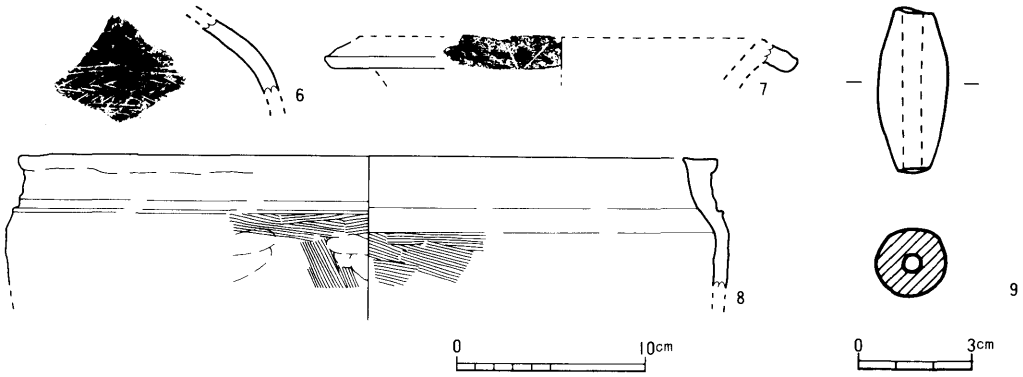


Fig.12　土壙ＳＫ３出土遺物実測図

坏の底部。４は明瞭な底部と体部の境より内側に外方へ開くやや幅広の高台を貼付する。高台端部は窪み、接地面は高台内側端。底部内面ナデ、他は横ナデ仕上げ。復原底径１０.０cm 高台高０.７cm。５は断面長方形状の小さな高台を有するもの。底部内外面ナデ、他は横ナデ仕上げ。復原底径７.１cm、高台高０.４cm。４は青灰色、５は暗青灰色を呈し、胎土、焼成は良好。

土壙SK3 出土遺物　(Fig.12　ＰＬ７－(1))

弥生土器（６・７）

６は壷の胴上半部で沈線間に篦による羽状文を少くとも２段施文する。外面ヘラ磨き、内面調整不明。７は下垂する口縁部外面に鋸歯文を刻む壷。内外面とも横ナデ仕上げ。６は橙褐色で胎土、焼成とも良好。７は灰褐色で胎土やや不良、焼成良好。

瓦質土器（８）

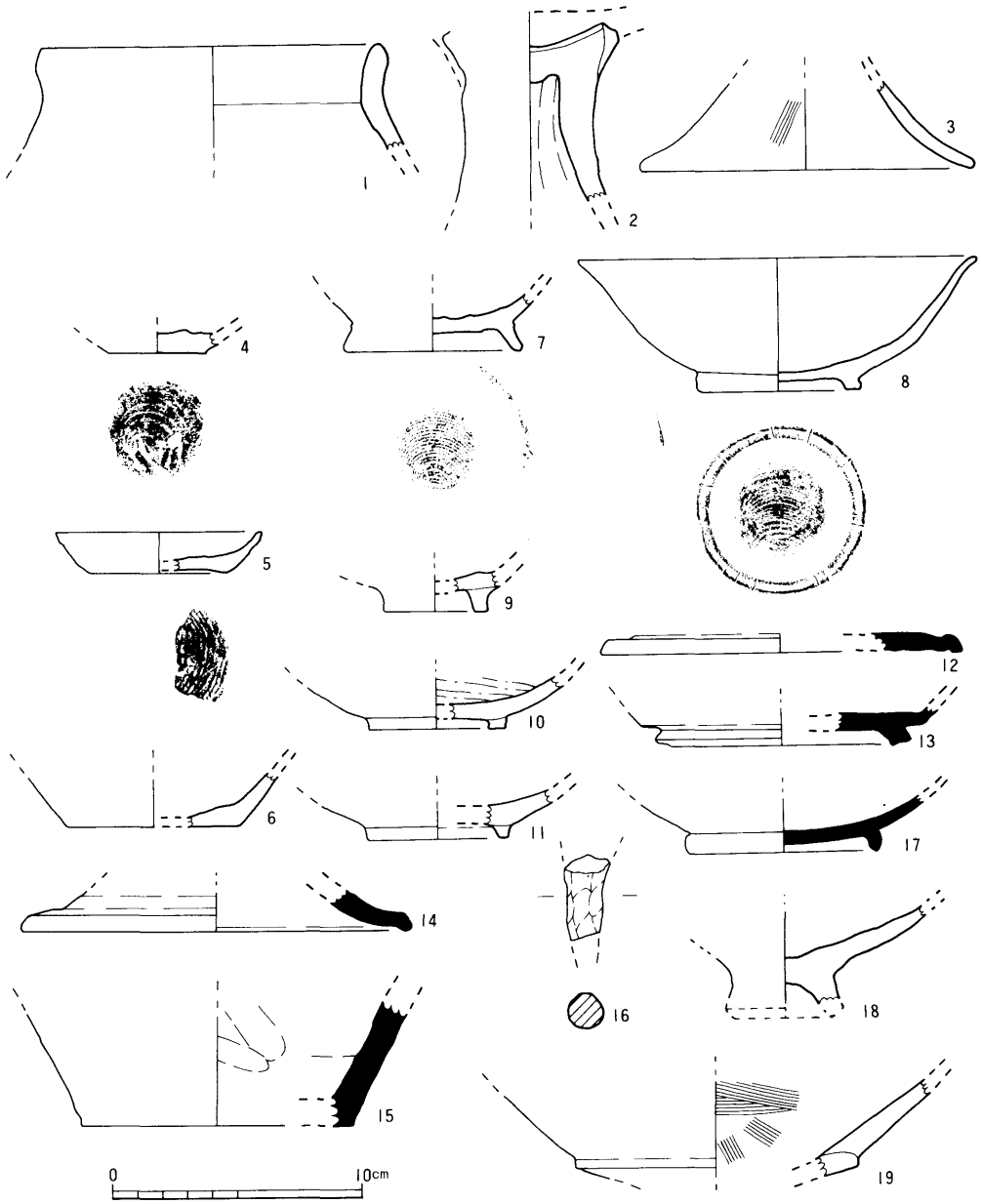


Fig.13　溝SD3（1～16）・SD 4（17）・SD5（18・19）出土遺物実測図

火鉢の口縁部。口縁端部は肥厚し平坦面をもつ。口縁部横ナデ、体部刷毛目調整。黒灰色を呈し、胎土、焼成とも良好。

土錘（9）

紡錘形をなす。乳白色を呈し、焼成は良好であるが、胎土に粗砂を多く含む。全長4.3㎝、最大幅1.9㎝、孔径0.6㎝。

溝3出土遺物（Fig.13　1～16　ＰＬ７－(2)，８－(1)）

弥生土器（１～３）

１は短く直立する口縁部をもつ壷で調整不明。２は高坏の脚上半部で器面の荒れが著しい。３は蓋で端部は丸くおさめる。体部外面刷毛目、端部内外面横ナデ仕上げ。１は赤褐色で胎土良好、焼成やや不良。２・３は濁黄褐色を呈し、胎土不良、焼成良好。

土師器（４～11）

４・５は小皿で糸切り底。４は体部が内彎ぎみに開き口縁端部は尖る。復原口径8.2㎝、底径5.4㎝、器高1.7㎝。鎌倉時代前期の所産。４・５とも底部内面ナデ、他は横ナデ仕上げ。４は淡黄褐色、５は赤橙色で、胎土、焼成とも良好。６は糸切り底の坏で体部内外面横ナデ調整。淡黄褐色で、胎土、焼成不良。７～11は椀の底～体部片、７は底部と体部の境に外方へ開くやや高めの高台を貼付する。糸切り底で横ナデ仕上げ。濁黄褐色。底径7.0㎝、高台高1.2㎝。８はほぼ完形で体部は内彎して立ち上がり口縁端部は外反する。底部内面ナデ、他は横ナデ仕上げで糸切り底。口径15.9㎝、底径6.1㎝、器高5.3㎝。平安時代後期の所産。９は灰褐色、10は橙褐色、11は乳白色を呈する。10は内面ヘラ磨き。胎土は９がやや不良、他は良好。８・９は金雲母を含む。焼成は７・11がやや不良、他は良好。

須恵器（12～15）

12は坏蓋。扁平で鳥嘴状口縁は丸く屈曲する。天井部はナデつける。復原口径14.4㎝。13は坏身。明瞭な底部と体部の境より内側に外方へ開く幅広の高台を貼付する。接地面は高台内側端。底部内面ナデ、他は横ナデ。底径8.8㎝、高台高0.6㎝。14は高坏の脚部。端部は屈曲し丸くおさめる。内面ナデ仕上げ。15は壷の底部。底部側面横ナデ、他はナデ仕上げ。12・15は暗青灰色、13・14は青灰色、胎土は15がやや不良、焼成はいずれも良好。

瓦質土器（16）

鼎の脚部で指圧による整形を施す。灰黒色で胎土に、粗砂を含み、焼成は良好。

溝4出土遺物（Fig.13　17　ＰＬ８－(2)）

17は須恵器坏身で外方へ開く高台を折り曲げ直立させる。内面には自然釉が厚くかかる。内外面とも横ナデ仕上げ。青灰色を呈し、胎土良好、焼成堅緻。

溝5出土遺物（Fig.13　18・19　ＰＬ８－(2)）

いずれも土師器。18は低脚付の坏。外方へ開く脚部内面は指圧による整形を施す。内面ナデ、外面横ナデ仕上げ。19は坏部に段を有する高坏。外面横ナデ、内面刷毛目仕上げ。18は乳白色、19は濁黄褐色を呈する。18は胎土やや不良で焼成はいずれも良好。

旧河川跡出土遺物（Fig. 14～20　ＰＬ８－(3)～13－(2)）

弥生土器、土師器、須恵器、磁器、瓦質土器、石器が出土した。

弥生土器（Fig. 14　ＰＬ８－(3)　９－(1)）

前期から後期の遺物がある。

１～４は壷。１は胴部上半をめぐる沈線間に有軸羽状文を施文する。２は口縁端部を上方にわずかにつまみ上げて肥厚させ、外面に３条の凹線風の沈線を刻み、２条単位のヘラ描き鋸歯文を施文する。３は下垂する口縁部外面にヘラ描きの鋸歯文を刻む。４は短く外反する口縁部で端部は尖る。１は器面荒れのため調整不明。２～４は内外面とも横ナデ。１は黄褐色、２・４は茶褐色、３は黒褐色を呈し、胎土、焼成はいずれも良好。２は特に焼成堅緻。５・６は「く」の字に外反する甕の口縁部。５は黒褐色で胎土、焼成良好。６は黄褐色で胎土精良、焼成堅緻。７・８は壷、９～17は甕の底部であるがいずれも器面の荒れが著しく調整不明。18・19は高坏の脚部。19は裾部の開きが小さく内外面横ナデ仕上げ。18は黄褐色、19は乳白色でいずれも胎土、焼成良好。

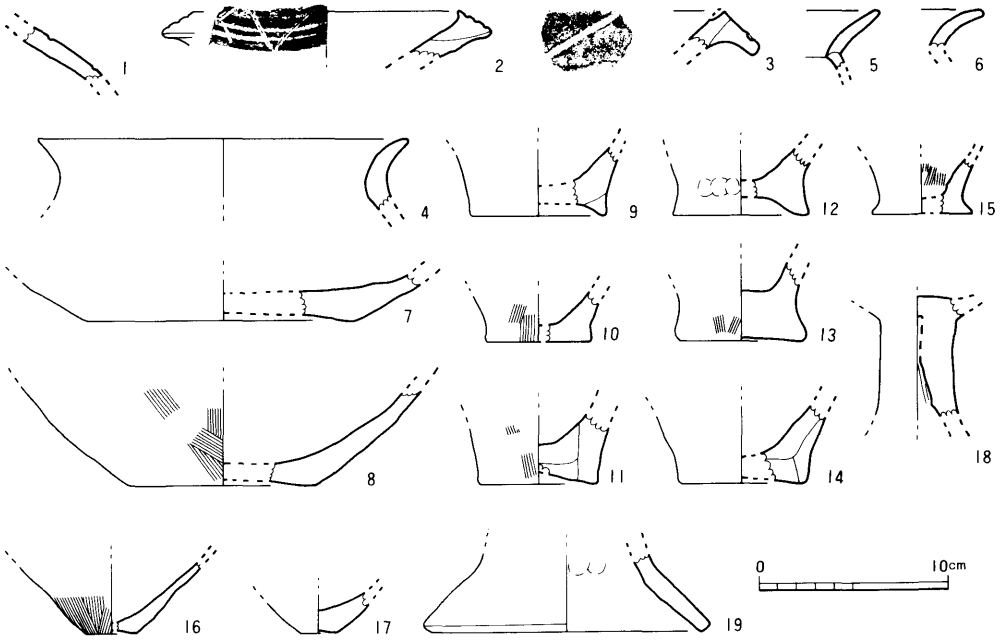


Fig. 14　旧河川跡NR出土遺物実測図（弥生土器）

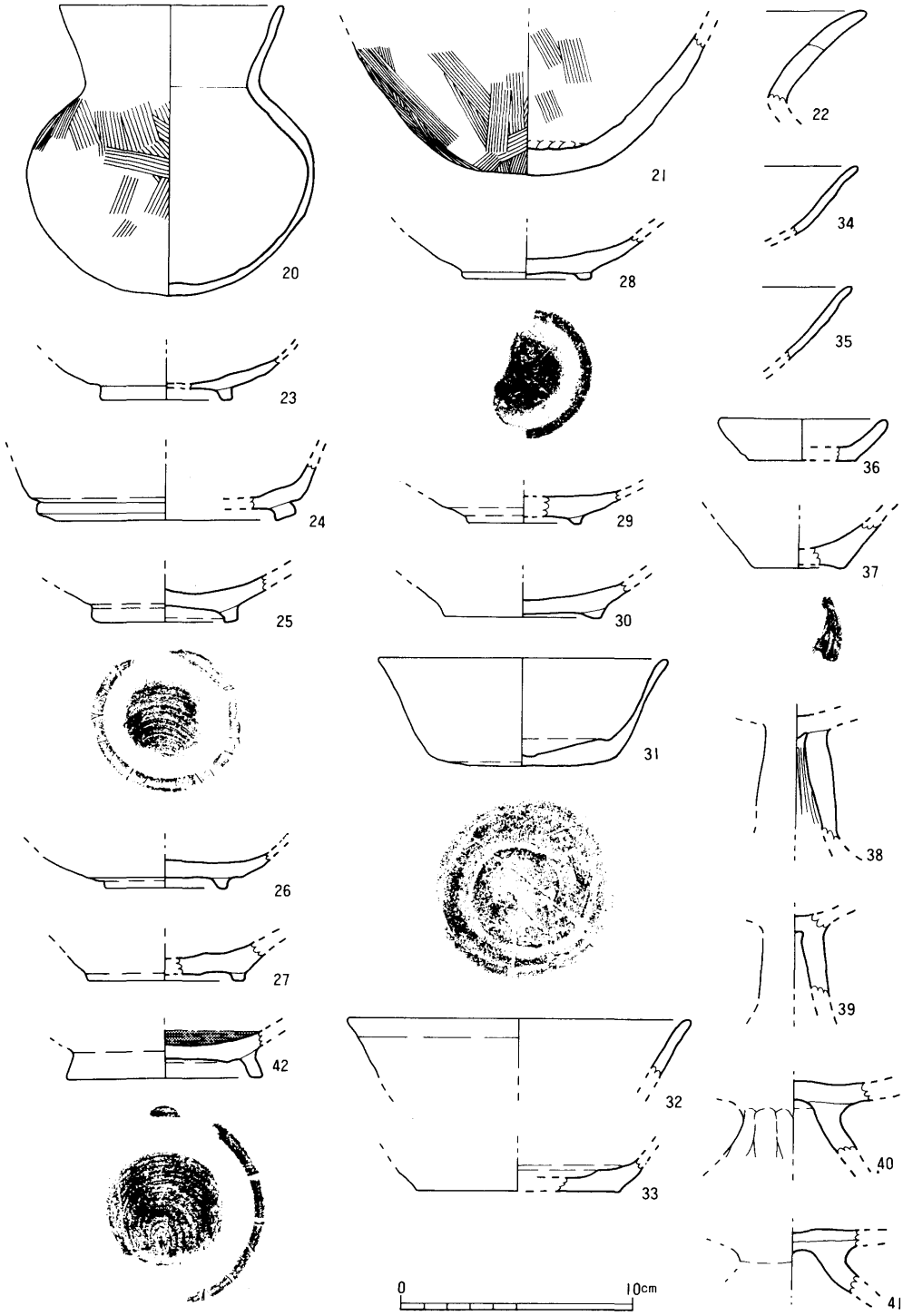


Fig. 15　旧河川跡NR出土遺物実測図（土師器・黒色土器）

遺　　物

土師器（Fig.15　1～41　PL 9－(2)　10）

20～22、39・40は古墳時代の土師器、20は布留式併行の小型丸底壷。歴史時代の土師器には坏、椀、小皿、高坏があり、主体は平安時代後半～鎌倉時代前半。

黒色土器（Fig.15　42　PL10－(2)）

外方へ開く断面長方形の高台を貼付する黒色土器A類。内面ヘラ磨き、外面横ナデ仕上げ。糸切り底で底径8.2㎝、高台高1.2㎝。胎土良好、焼成堅緻。

須恵器（Fig.16～18　PL 9－(2)　11　12）

坏、甕、壷、高坏、盤があり、6世紀後半～9世紀代のものが混在する。

青磁（Fig.19　104・105　PL 13－(1)）

104は同安窯系の青磁椀の口縁部。外面に櫛目、内面にヘラによる草花文の一部が認められる。胎土は灰白色、釉は青緑色。105も同安窯系の椀の底部で削り出しのやや高い高台を有する。施釉は内面のみで青緑色、胎土は淡灰白色。

瓦質土器（Fig.19　106　PL 13－(1)）

内彎ぎみに内傾する鉢の口縁部。端部は肥厚し平坦。内外面とも横ナデ調整。暗灰色を呈し、胎土、焼成とも良好。

石器（Fig.20　PL 13－(2)）

107は頭部の一部および刃部を欠損する太型蛤刃石斧で周縁の研磨は丁寧。108は扁平な円

Tab.2　旧河川跡NR出土遺物観察表（土師器）1

法量（　　）は復原値

番号	器種	法量（cm） 口径	底径	器高	高台高	形態	技法	色調	胎土	焼成
Fig.15 20	壷	9.6		12.3		小型丸底壷。球形の胴部に直線的に開く口縁部をもつ。	外面頸部以下刷毛目、底部内面ナデ、他は横ナデ。外面煤付着。	濁黄褐色	精良	良好
21	甕					厚手の丸底の底部。	底部内面ナデ、他は刷毛目仕上げ。	茶褐色	良好	良好
22	甕					口縁部は「く」の字に外彎ぎみに外反。端部は尖る。	内外面とも横ナデ調整。	茶褐色	やや不良	やや不良
23	椀		(5.6)		0.6	やや外方へ開く断面方形の低い高台を貼付する。	外面横ナデ。内面器面荒れのため不明。糸切り底。	乳白色	精良	堅緻
24	椀		(9.4)		0.8	明瞭な底部と体部の境より内側に外方へ開く高台を貼付する。	内外面とも横ナデ。	灰褐色	良好	良好

Tab. 3　旧河川跡NR出土遺物観察表（土師器）2

法量（　　）は復原値

番号	器種	法量（cm） 口径	底径	器高	高台高	形態	技法	色調	胎土	焼成
Fig.15 25	椀		5.2		0.4	明瞭な底部と体部の境より内側に断面長方形の高台を付す。	外面横ナデ、内面ナデ。糸切り底。	乳白色	良好	良好
26	椀		(6.5)		0.4	外側端で接地する高台を底部と体部の境に貼付する。	器面荒れのため調整不明。糸切り底。	黄灰褐色	やや不良	良好
27	椀		5.4		0.3	底部と体部の境に扁平な低い高台を貼付する。	外面横ナデ、内面ヘラ磨き、底部外面にヘラ記号。	乳白色	良好	良好
28	椀		6.0		0.6	底部と体部の境に直立する高台を貼付する。	外面横ナデ。他は不明。糸切り底。	黄灰色	良好	堅緻
29	椀		4.8		0.3	底部と体部の境に断面台形の低い高台を貼付する。	器面荒れのため調整不明。糸切り底。	黄灰褐色	良好	良好
30	椀		6.7		0.4	底部と体部の境に断面台形の扁平な低い高台を貼付する。	器面荒れのため調整不明。	黄白色	良好	良好
31	坏	12.3	8.0	4.7		体部は内彎ぎみに立ち上がり、口縁端部は外反ぎみに肥厚。	底部内外面ナデ、他は横ナデ。底部外面ヘラ切り後ナデツケ。	黄灰色	良好	良好
32	坏	(14.6)				口縁端部はやや外反し、丸く終る。	内外面とも横ナデ。	灰白色	やや不良	やや不良
33	坏（皿）		(8.7)			底部と体部の境は明瞭。	器面荒れのため調整不明。糸切り底。	濁黄褐色	やや不良	良好
34	坏（椀）					体部は内彎ぎみに開き、口縁端部はわずかに外反する。	内外面とも横ナデ。	橙褐色	良好	良好
35	坏（椀）					体部は内彎ぎみに開き、口縁端部は外反する。	内外面とも横ナデ。	橙褐色	良好	堅緻
36	小皿	(7.0)	(4.6)	1.8		厚手の体部は内彎ぎみに開き、端部は丸くおさめる。	内外面とも横ナデ。糸切り底。	濁黄褐色	やや不良	良好
37	小皿		(4.0)			厚手の底部はやや上げ底。小型の坏に近い。	器面荒れのため調整不明。糸切り底。	橙褐色	やや不良	不良
38	高坏					短脚の脚部を坏部外面に貼りつける。	内面ナデ、外面器面荒れのため調整不明。内面シボリ痕。	赤褐色	良好	堅緻
39	高坏					脚部はやや外方へ開く。	内面ナデ、外面器面荒れのため調整不明。	赤橙色	良好	良好
40	高坏					脚部は大きく「ハ」の字状に開く。	脚部外面指圧による整形。他は横ナデ。	黄灰色	良好	堅緻
41	高坏					脚部は大きく「ハ」の字状に開く。	脚部内外面横ナデ。坏部内面ナデ。接合部はヘラによる押圧。	黄灰色	やや不良	堅緻

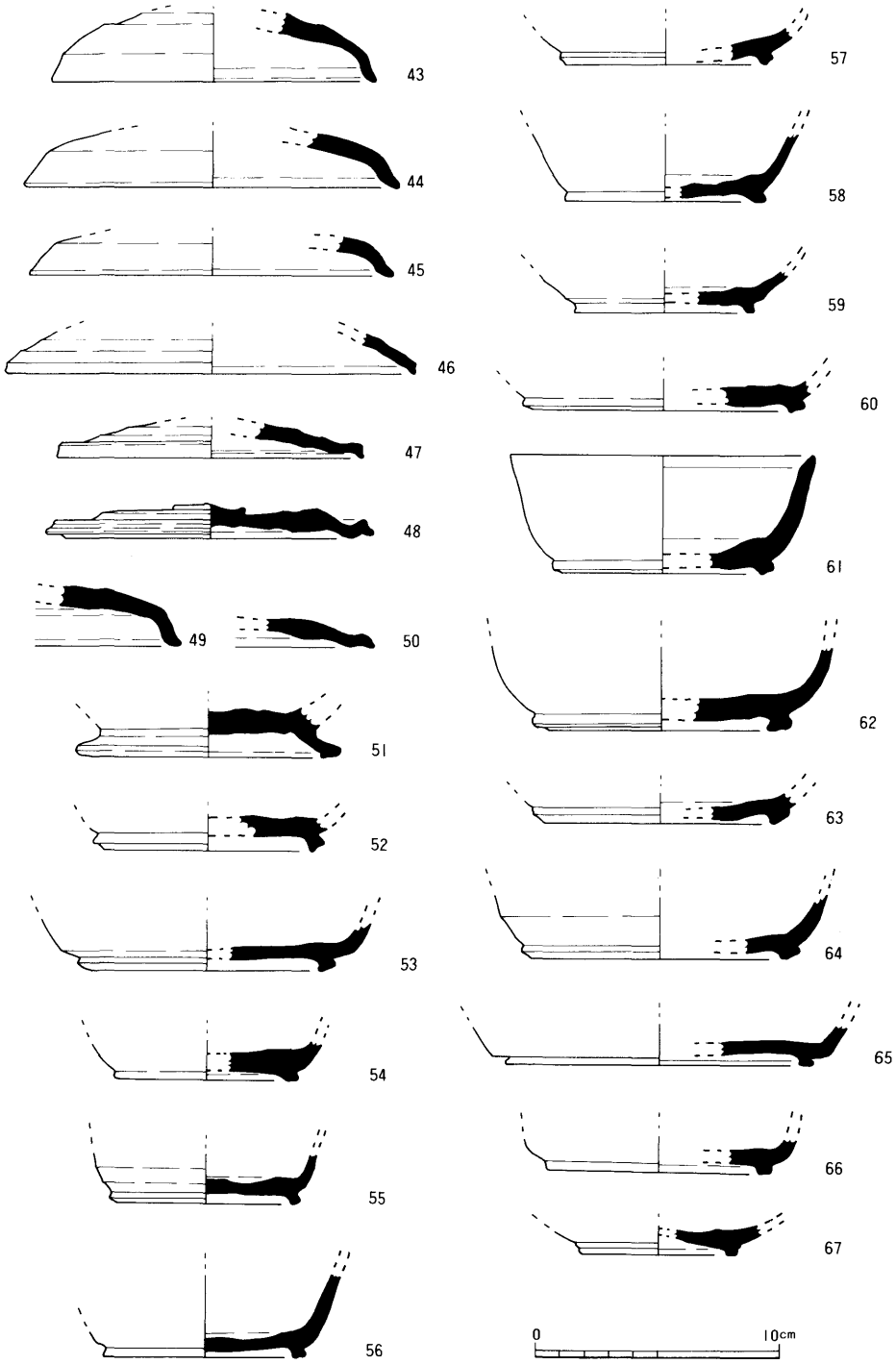


Fig.16　旧河川跡NR出土遺物実測図（須恵器）1

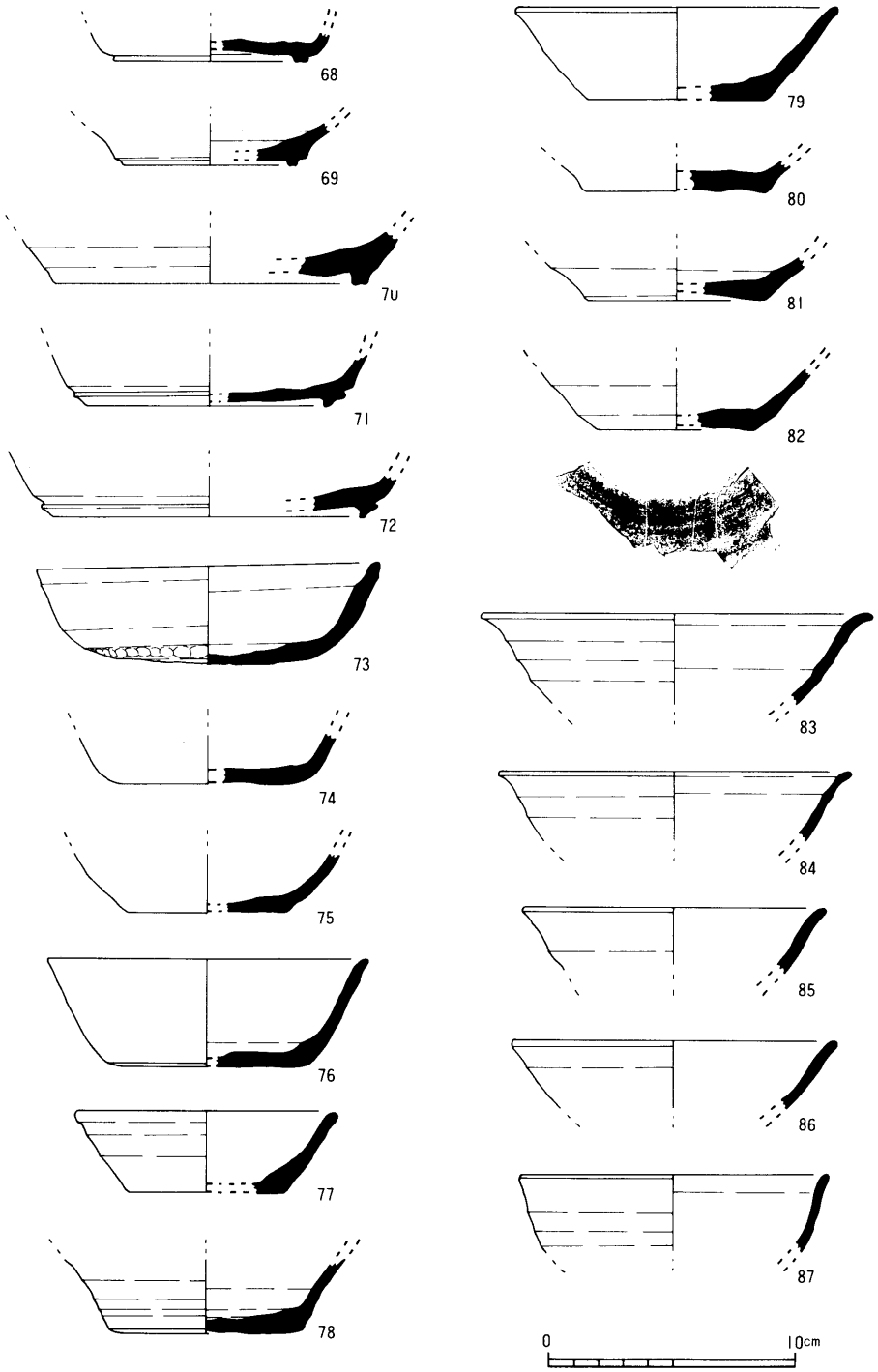


Fig.17　旧河川跡NR出土遺物実測図（須恵器）2

遺　　物

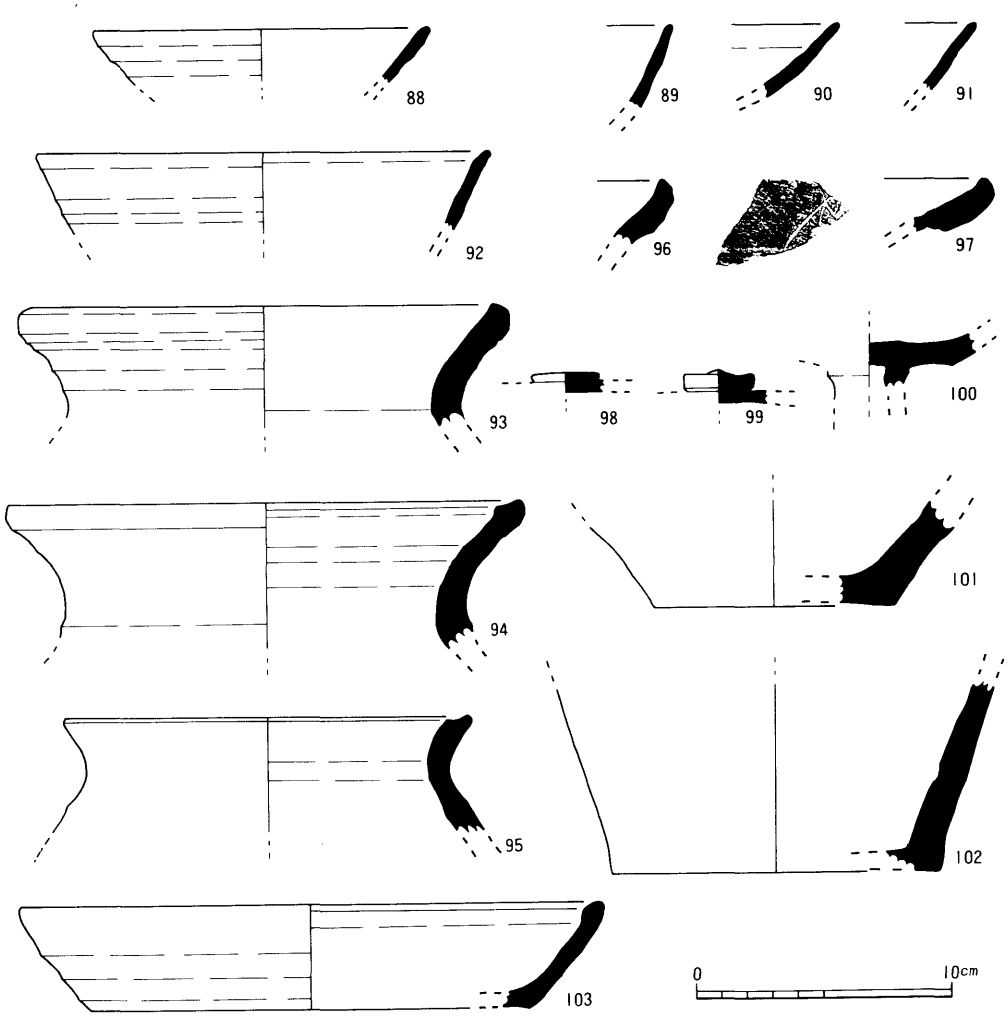


Fig. 18　旧河川跡NR出土遺物実測図（須恵器）3

Tab. 4　旧河川跡NR出土遺物観察表（須恵器）1

法量（　　）は復原値

番号	器種	法量（cm） 口径	底径	器高	高/口高	形態	技法	色調	胎土	焼成
Fig. 16 43	坏蓋	(13.0)				天井部から体部へはゆるやかに移行。口縁部は外彎ぎみ。	天井部内面ナデ、他は横ナデ。	灰白色	良好	不良
44	坏蓋	(15.0)				口縁部は外彎ぎみに下降。端部内面に不明瞭な段。	内外面とも横ナデ。	灰白色	良好	不良
45	坏蓋	(14.7)				やや扁平で、口縁端部内面に不明瞭な段をもつ。	内外面とも横ナデ。	乳白色	やや不良	不良

Tab.5　旧河川跡NR出土遺物観察表（須恵器）2

法量（　　）は復原値

番号	器種	法量（cm） 口径	底径	器高	高台高	形態	技法	色調	胎土	焼成
Fig. 16 46	坏蓋	(16.4)				体部から口縁部へ直線的に移行。鳥嘴状口縁端部外面窪む。	内外面とも横ナデ、体部外面の一部はナデ。	青灰色	良好	堅緻
47	坏蓋	(12.4)				鳥嘴状の口縁端部は下方へ突出して尖る。端部外面は窪む。	体部は粗いナデ、口縁部は横ナデ。調整は粗い。	暗青灰色	良好	良好
48	坏蓋	13.3		1.5		完形。扁平な擬を有し、体部は屈曲して鳥嘴状口縁に至る。	天井部・体部内外面は粗いナデ、口縁部は横ナデ。	青灰色	良好	堅緻
49	坏蓋					口縁端部内面に不明瞭な段を有し、端部は尖りぎみに終る。	口縁部内外面横ナデ　他は器面荒れのため調整不明。	濁黄褐色	良好	不良
50	坏蓋					体部から屈曲して鳥嘴状の口縁部に至り、口縁端部は尖る。	体部の一部・口縁部内外面は横ナデ、他はナデ。	青灰色	良好	良好
51	坏身		9.1			外方へ踏んばる特異な高台を有し、内側端を接地面とする。	底部内外面ナデ、他は横ナデ。	青灰色	精良	良好
52	坏身		(8.4)			外方へ開く断面方形の高台を付す。接地面は高台内側端。	底部外面ナデ、他は横ナデ。	青灰色	やや不良	良好
53	坏身		(9.1)			底部と体部の境より内側に外方へ開く高台を付す。	底部内外面ナデ、他は横ナデ。	淡青灰色	良好	良好
54	坏身		(6.8)			外方へ開く断面長方形の扁平な高台の内側端が接地面。	底部内外面ナデ、他は横ナデ。	暗青灰色	やや不良	良好
55	坏身		7.0			外方へ開く断面方形の高台を付す。端部は窪む。	底部内外面ナデで外面は粗雑。他の部分は横ナデ。	灰青色	良好	良好
56	坏身		6.2			外方へ開く断面方形状の高台を付す。接地面は高台内側端。	底部内外面ナデ、他は横ナデ。	青灰色	良好	良好
57	坏身		(8.1)			外方へ開く断面方形状の高台を付す。接地面は高台内側端。	内面は体部の一部を除いてナデ、外面は横ナデ。	青灰色	良好	良好
58	坏身		(8.1)			底部と体部の境に外方へ開く断面台形の高台を貼付する。	底部内外面ナデで内面のナデは粗い。他の部分は横ナデ。	暗青灰色	良好	やや不良
59	坏身		(7.2)			底部と体部の境より内側に断面台形状の高台を貼付する。	底部外面ナデ、他は横ナデ。	青灰色	良好	良好
60	坏身		(10.6)			外方へ開く断面長方形の扁平な高台を付す。接地面は高台内側端。	底部内外面粗いナデ、他は横ナデ。	暗灰色	良好	やや不良
61	坏身	(12.4)	(8.0)	(4.5)	0.5	一様な厚さで移行する底部から体部の境にわずかに外方へ開く断面長方形の扁平な高台を付す。	底部内外面ナデ、他は横ナデ。口縁部内面箆削りの後横ナデ。	暗青灰色	良好	良好
62	坏身		(9.2)		0.7	底部と体部の境に下ぶくらみの高台を付す。端部は窪む。	底部内外面・体部内面の一部はナデ。他は横ナデ。	灰白色	不良	やや不良
63	坏身		(9.4)		0.6	底部と体部の境に断面台形状の扁平な高台を貼付する。	底部内外面ナデ、他は横ナデ。	淡青灰色	不良	良好

Tab.6　旧河川跡NR出土遺物観察表（須恵器）3

法量（　　）は復原値

番号	器種	法量（cm） 口径	底径	器高	高台高	形態	技法	色調	胎土	焼成
Fig.16 64	坏身		(10.4)		0.5	外方へ開く高台を貼付し、高台内側端を接地面とする。	底部内面ナデ、他は横ナデ。	青灰色	やや不良	良好
65	坏身		(12.4)		0.3	大型の坏。底部と体部の境より内側に外方へ開く高台付す。	底部内外面ナデ、他は横ナデ。	暗青灰色	良好	堅緻
66	坏身		(8.9)		0.4	直線的に下降する断面長方形の高台の接地面は窪む。	底部内面ナデ、他は横ナデ。	青灰色	精良	良好
67	坏身		(10.3)		0.5	底部と体部の境に直線的に下降する断面長方形の高台付す。	底部外面粗いナデ、体部・高台外面ナデ、他は横ナデ。	青灰色	良好	堅緻
Fig.17 68	坏身		(7.8)		0.2	わずかに外方へ開く断面長方形の扁平な高台を貼付する。	底部内外面ナデ、他は横ナデ。	青灰色	精良	良好
69	坏身		(7.0)		0.2	底部と体部の境より内側に直線的に下降する低い高台を付す。	底部内外面ナデ、他は横ナデ。	淡青灰色	精良	良好
70	坏身		(12.6)		0.5	厚手大型の坏。やや内傾する断面台形状の高台を貼付する。	底部内外面ナデ、他は横ナデ。	暗青灰色	良好	堅緻
71	坏身		(9.7)		0.6	底部と体部の境より内側に内側端を接地面とする高台付す。	底部内外面ナデ、他は横ナデ。	青灰色	良好	良好
72	坏身		(12.6)		0.6	大型の坏。接地面は高台内側端で端部は尖る。	底部内外面ナデ、他は横ナデ。高台両端部をツマミ出す。	灰白色	精良	不良
73	坏身	15.8	7.8	4.0		完形。体部は内彎ぎみに立ち上がり、端部付近で屈曲する。	底部・体部内外面下半はナデ、他は横ナデ。底部外面指圧痕。	淡灰色	良好	やや不良
74	坏身		(7.1)			底部と体部の境はやや不明瞭。	底部外面ナデ、他は横ナデ。	灰白色	精良	やや不良
75	坏身		(6.0)			薄手の底部から体部は内彎ぎみに立ち上がる。	底部内外面ナデ、他は横ナデ。	淡青灰色	良好	やや不良
76	坏身	(12.8)	(6.2)	(4.4)		体部は直線的に立ち上がり、端部は外反ぎみに尖る。	底部内外面ナデ、他は丁寧な横ナデ。	青灰白色	良好	やや不良
77	坏身	(10.3)	(6.2)	(3.3)		皿ないしは小型の坏。口縁端部付近は外反し肥厚する。	底部内外面ナデ、他は横ナデ。	青灰色	良好	良好
78	坏身		9.8			平底に近く、体部は直線的に外方へ立ち上がる。	底部外面やや粗いナデ、他は粗い横ナデ。	乳白色	良好	不良
79	坏身	(12.8)	(7.1)	(3.8)		直線的に立ち上がる体部は口縁端部付近で外反する。	底部内面ナデ、外面器面荒れのため不明。他は横ナデ。	乳白色	精良	不良
80	坏身		(7.2)			体部は下半部で外彎ぎみに立ち上がる。	底部外面および内面の一部ナデ、他は横ナデ。	青灰色	良好	良好
81	坏身		(7.0)			体部は底部からやや屈曲ぎみに直線的に立ち上がる。	底部内外面ナデ、他は横ナデ。	青灰色	やや不良	堅緻

Tab.7　旧河川跡NR出土遺物観察表（須恵器）4

法量（　　）は復原値

番号	器種	法量（cm） 口径	底径	器高	高台高	形態	技法	色調	胎土	焼成
Fig.16 82	坏身		(6.2)			体部は厚手の底部から直線的に立ち上がる。体部器壁薄い。	底部内外面ナデ、他は横ナデ。	青灰色	良好	堅緻
83	坏身	(15.4)				体部は内彎ぎみに立ち上がり、端部は大きく外反する。	体部内面下半ナデ、他は横ナデ。	青灰色	良好	良好
84	坏身	(14.0)				口縁部の破片。端部は外反し丸くおさめる。	内外面とも横ナデ。	青灰色	やや不良	良好
85	坏身	(11.9)				やや厚手の口縁部で、端部はわずかに外反する。	内外面とも横ナデ。	青灰色	良好	良好
86	坏身	(12.8)				口縁部の破片。体部は直線的に開き、端部は丸くおさめる。	内外面とも横ナデ。	暗青灰色	やや不良	良好
87	坏身	(12.2)				口縁部の破片。体部は内彎ぎみに開き、端部はやや外反。	内外面とも横ナデ。	青灰色	良好	やや不良
Fig.18 88	坏身	(12.8)				口縁部の破片。厚手に仕上げられ端部はやや尖りぎみ。	内外面とも横ナデ。	淡灰色	良好	堅緻
89	坏身					口縁部の破片。体部は内彎ぎみに開き、端部は丸く終る。	内外面とも横ナデ。	青灰色	良好	良好
90	坏身					口縁部の破片。体部は内彎ぎみに開き、端部は尖りぎみ。	内外面とも横ナデ。	淡灰色	やや不良	やや不良
91	坏身					口縁部の破片。体部は直線的に開き、端部はやや尖りぎみ。	内外面とも横ナデ。	青灰色	精良	良好
92	坏身	(19.4)				口縁部の破片。体部は直線的に開き、端部はやや尖りぎみ。	内外面とも横ナデ。	灰青色	良好	良好
93	甕	(17.8)				口縁部は強く直線的に開き、端部は丸くおさめる。	内外面とも横ナデ。頸部内面はヘラによる整形圧痕。	暗青灰色	良好	堅緻
94	甕	(19.8)				口縁端部外面は平担に近い面をなし、内面に段をもつ。	口縁部内外面横ナデ、頸部以下内面ナデ。	青灰色	精良	良好
95	甕	(15.6)				短く外反する口縁部は肥厚。端部外面は窪む。	口縁部内外面横ナデ、頸部以下内外面ナデ。	暗青灰色	不良	堅緻
96	甕					口縁部は内彎ぎみに開き、肥厚する。	内外面とも横ナデ。内面にヘラ記号。	淡青灰色	良好	良好
97	甕					外面への粘土帯貼付により口縁部は肥厚する。	須恵質。内外面とも横ナデ。	淡灰白色	精良	良好
98	坏蓋					撮。ボタン状に近く、著しく扁平。	撮外面はナデ、他は横ナデ。	青灰色	精良	良好
99	坏蓋					撮。扁平な擬宝珠状。	外面横ナデ、内面ナデ。	青灰色	不良	良好

Tab.8　旧河川跡NR出土遺物観察表（須恵器）5　　法量（　　）は復原値

番号	器種	法量（cm） 口径	底径	器高	高台高	形態	技法	色調	胎土	焼成
Fig.18 100	高坏					坏部は強く屈曲し外方へ開く。	内外面とも横ナデ。	青灰色	良好	堅緻
101	壷		(9.3)			安定した平底。窯床面の砂床付着。	底部外面ナデ、他は横ナデ。断面に二次焼成痕。	小豆色	良好	堅緻
102	壷		(12.8)			短く外反する口縁部をもつと思われる壷の底部。	底部内外面ナデ、他は横ナデ。	淡青灰色	良好	良好
103	皿	(22.6)	(17.1)	(4.1)		体部は内彎ぎみに立ち上がり、口縁端部は肥厚する。	底部外面ナデ。他は粗い横ナデ。	乳白色	やや不良	良好

礫素材の敲石で片面のみが浅く窪む。109は円礫素材の磨石で径8.5cm前後のほぼ球形を呈する。重量837.5g。110は打製石斧の頭部と思われるもので周縁からの調整剥離は粗い。111は紡錘車。研磨は丁寧で上下両面とも平坦。径4.7cm、厚さ0.7cm、孔径0.7cm。

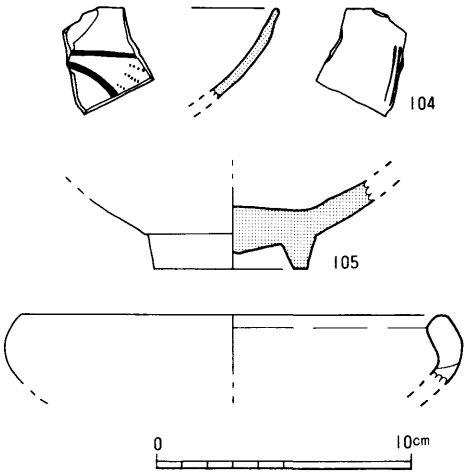


Fig.19　旧河川跡NR出土遺物実測図
（輸入陶磁器104・105　瓦質土器　106）

(2)　包含層出土の遺物

第3～5層の各堆積層に遺物を包含する。各包含層とも低丘陵上からの流れ込みによる二次堆積層で、弥生時代前期から鎌倉時代前半の各時期の遺物が混在するが、第4層からの出土量が最も多い。

第3層灰褐色粘質土出土遺物（Fig.21～25　PL13－(3)～15－(2)）

弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、石器、土製品が出土した。

弥生土器（Fig.21　PL13－(3)）

甕、壷、高坏がある。

1～3は甕。1は口縁部がわずかに外反する如意形口縁で、端部は稜をもたず尖りぎみに終り刻目をもたない。外面頸部以下は刷毛目、他の部分は横ナデ仕上げ。2は逆「L」

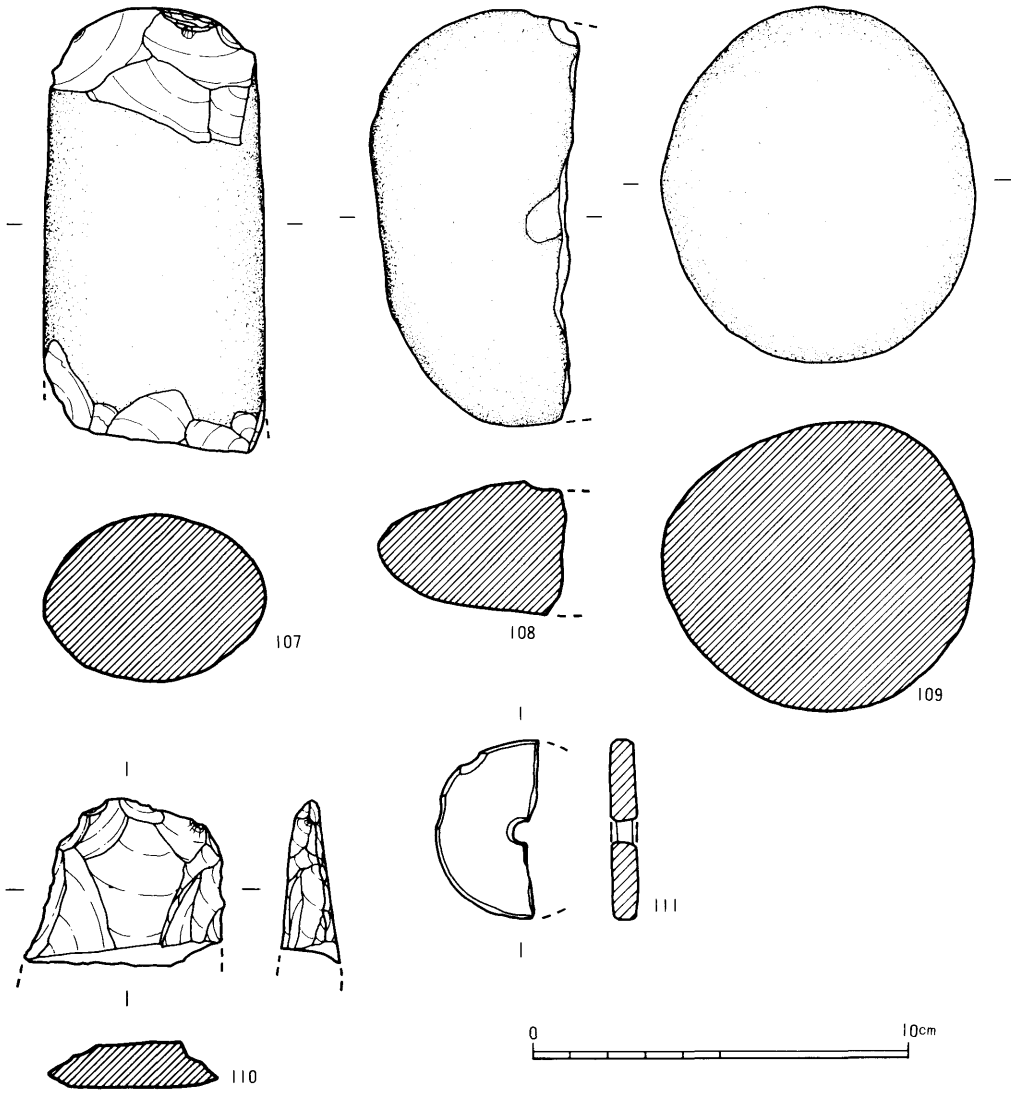


Fig.20　旧河川跡NR出土遺物実測図（石器）

字状に屈曲する口縁の端部を跳ね上げ、端部外面は凹線上に窪む。口縁部外面には煤が付着する。内外面とも丁寧な横ナデ調整。3は「く」の字に外彎しながら開く口縁部をもつ。1・2は赤褐色、3は濁黄褐色を呈し、1～3とも胎土、焼成良好。4は壷。小さく下垂する口縁部外面にヘラ描きの鋸歯文を刻む。乳白色を呈し、胎土精良、焼成堅緻。5は壷、6～9は甕の底部。5は円盤状の平底で外面ナデ、底部側面横ナデ仕上げ。赤褐色を呈し、

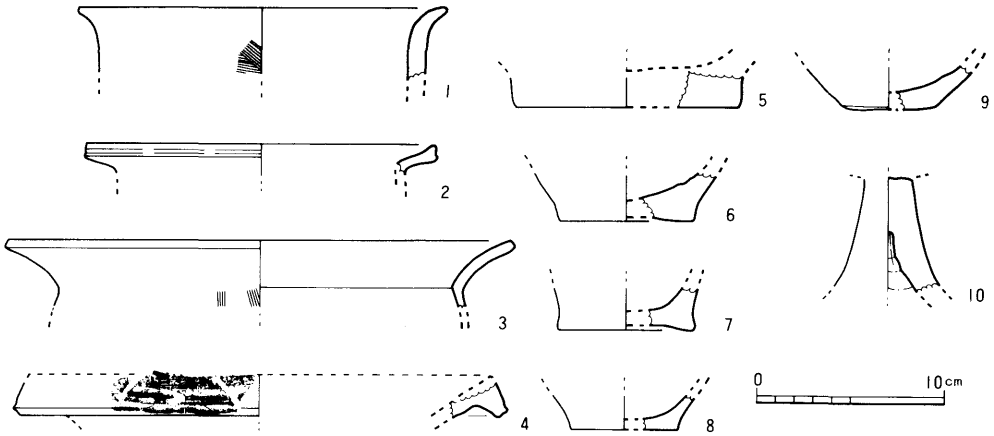


Fig.21　第3層灰褐色粘質土出土遺物実測図（弥生土器）

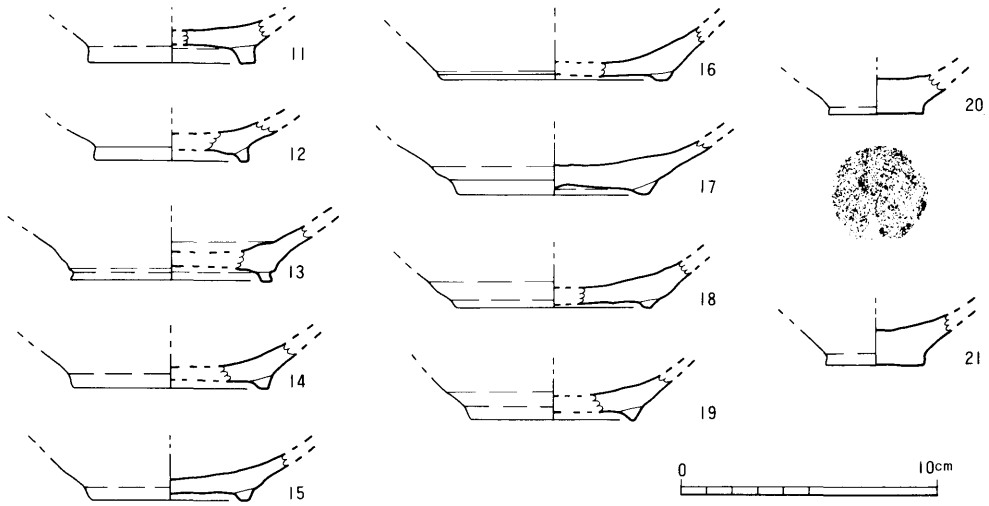


Fig.22　第3層灰褐色粘質土出土遺物実測図（土師器）

胎土、焼成とも良好。6・7はやや上げ底ぎみで内外面ナデ、側面横ナデ調整。6は暗灰色で胎土やや不良、焼成良好。7は赤褐色で胎土精良、焼成良好。8は薄手づくりの平底で内外面ナデ、側面荒れのため調整不明。赤褐色で胎土やや不良、焼成良好。9は不安定な平底で内外面ナデ、側面横ナデ仕上げ。灰褐色で胎土、焼成とも良好。10は高坏脚部。内面は指圧による整形を施し、シボリ痕が残る。外面荒れのため調整不明。赤褐色を呈し、胎土、焼成とも良好。

土師器（Fig.22　ＰＬ14－(1)）

埦と台付皿があるがいずれも底部の破片である。

須恵器（Fig.23　ＰＬ14－(2)）

坏、高坏、壷、甕、器台があり、坏は高台を有するものが多い。時期的には８世紀～９世紀前半頃におさまるものと考えられる。

白磁（Fig.24　41・42　ＰＬ15－(1)）

41・42とも口縁部外面に玉縁がめぐる埦。41は貫入がみられ釉の発色はよくない。胎土は淡灰白色、釉は暗灰白色。42はやや扁平な玉縁をもち、体部下半外面は無施釉。胎土は

Tab.9　第３層灰褐色粘質土出土遺物観察表（土師器）

法量（　　）は復原値

番号	器種	法量（cm） 口径	底径	器高	高台高	形態	技法	色調	胎土	焼成
Fig.22 11	埦		(6.5)		0.7	底部と体部の境に断面長方形の安定した高台を貼付する。	内面・底部外面ナデ、他は横ナデ。糸切り底。	濁黄褐色	良好	良好
12	埦		(6.0)		0.5	底部と体部の境に断面長方形の貧弱な高台を貼付する。	内面ナデ、外面横ナデ。	濁黄褐色	良好	良好
13	埦		(7.8)		0.4	底部と体部の境より内側に外方へ開く貧弱な高台を付す。	内外面とも横ナデ。	乳白色	良好	やや不良
14	埦		(7.6)		0.5	底部と体部の境に断面台形の低い高台を貼付する。	内面ナデ、外面横ナデ。	乳白色	やや不良	やや不良
15	埦		(6.0)		0.5	底部と体部の境に断面台形の低い高台を貼付する。	内面丁寧なヘラ磨き、底部外面ナデ、他は横ナデ。糸切り底。	乳白色	良好	やや不良
16	埦		(8.6)		0.3	底部と体部の境に断面台形状の極めて扁平な高台を付す。	内面、底部外面ナデ、他は横ナデ。	濁黄褐色	良好	良好
17	埦		(7.2)		0.6	底部と体部の境に断面台形の扁平な高台を貼付する。	内面丁寧なナデ、底部外面粗いナデ、他は横ナデ。糸切り底。	濁黄褐色	良好	良好
18	埦		(7.4)		0.3	底部と体部の境に断面三角形状の扁平な低い高台を付す。	内面ナデ、外面横ナデ。	黄褐色	やや不良	良好
19	埦		(6.4)		0.5	底部と体部の境に断面三角形の高台を貼付する。	内面ナデ、外面横ナデ。	乳白色	良好	堅緻
20	台付皿		3.7			円盤状の厚手の底部を有する。	底部側面・体部外面横ナデ、内面ナデ。糸切り底。	乳白色	不良	不良
21	台付皿		3.8			円盤状の厚手の底部を有する。	底部側面・体部外面横ナデ、内面ナデ。糸切り底。	乳白色	やや不良	不良

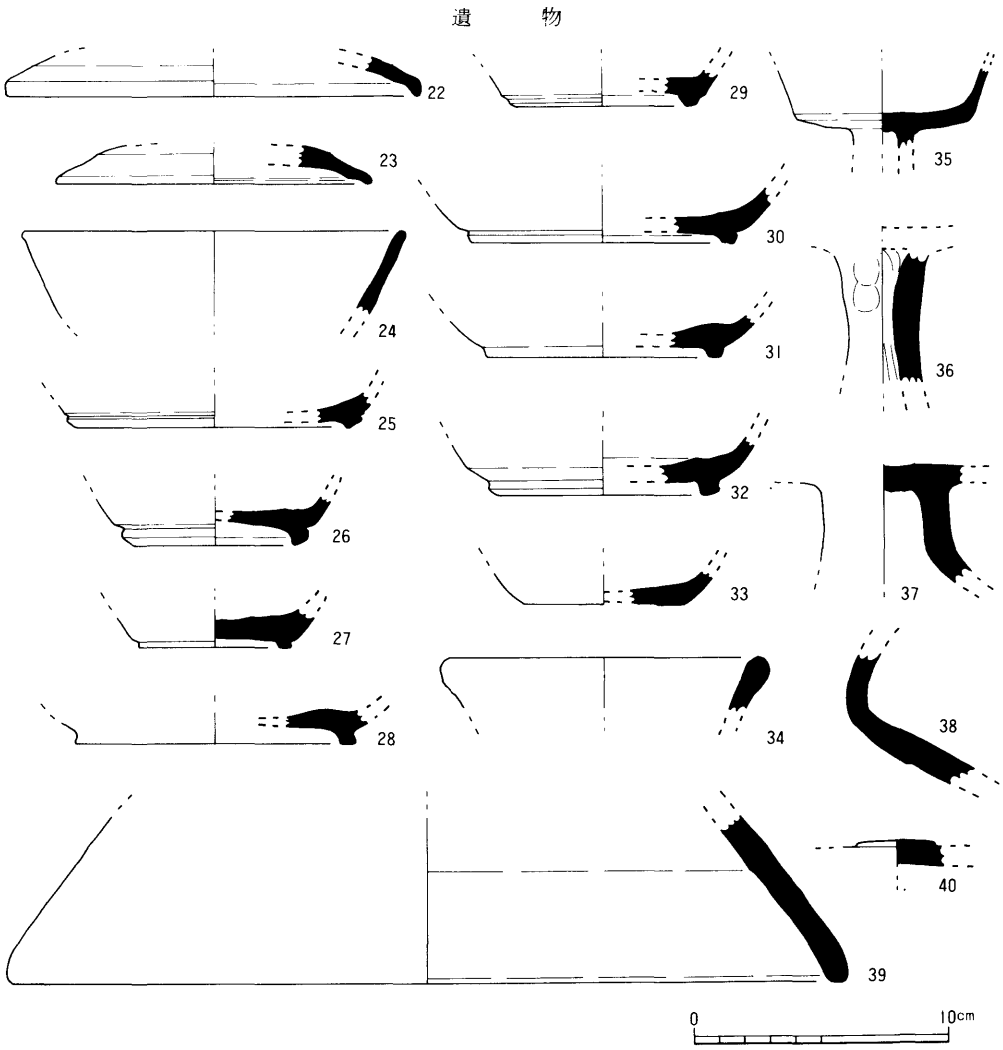


Fig. 23　第３層灰褐色粘質土出土遺物実測図（須恵器）

Tab. 10　第３層灰褐色粘質土出土遺物観察表（須恵器）１　法量（　　）は復原値

番号	器種	法量（cm） 口径	底径	器高	高台高	形態	技法	色調	胎土	焼成
Fig. 23 22	坏蓋	(16.2)				鳥嘴状の口縁端部はやや尖りぎみにおさめる。	内外面とも横ナデ。	灰青色	良好	良好
23	坏蓋	(12.4)				体部は口縁部付近で屈曲し、端部は丸くおさめる。	内外面とも横ナデ。	濁黄褐色	良好	不良
24	坏身	(14.9)				体部は直線的に開き、口縁端部は丸くおさめる。	内外面とも横ナデ。	灰青色	やや不良	良好
25	坏身		(11.4)		0.5	外方へ開く断面長方形の扁平な高台の接地面は内側端。	内外面とも横ナデ。	暗青灰色	良好	良好

Tab.11　第3層灰褐色粘質土出土遺物観察表（須恵器）2　　法量（　　）は復原値

番号	器種	法量（cm） 口径	底径	器高	高台高	形態	技法	色調	胎土	焼成
Fig.23 26	坏身		(7.3)		0.5	底部と体部の境より内側に内彎ぎみに開く高台を貼付する。	体部外面カキ目、他は横ナデ。	淡青灰色	良好	良好
27	坏身		(6.0)		0.3	小型。底部と体部の境より内側に断面長方形の扁平な高台付す。	内外面とも横ナデ。	灰青色	良好	やや不良
28	坏身		(11.0)		0.5	大型の坏。底部と体部の境に断面方形の外開きの高台付す。	内外面とも横ナデ。	青灰色	良好	良好
29	坏身		(7.4)		0.3	底部と体部の境より内側に断面台形、接地面内側端の高台付す。	内外面とも横ナデ。	灰青色	精良	良好
30	坏身		(10.2)		0.5	底部と体部の境にいびつな高台を付す。接地面は高台内側端。	内外面とも横ナデ、器面荒れが著しい。	青灰色	良好	良好
31	坏身		(9.2)		0.4	底部と体部の境に断面台形の直立する高台を貼付する。	内外面とも横ナデ。	青灰色	良好	やや不良
32	坏身		(9.0)		0.5	底部と体部の境に断面方形の高台を付す。接地面は高台内側端。	底部内面ナデ、他は横ナデ。	青灰色	やや不良	良好
33	坏身		(6.2)			小型の坏。体部は内彎しながら立ち上がる。	内面、底部外面ナデ、体部外面横ナデ。底部外面ナデ粗い。	淡青灰色	良好	良好
34	壷	(12.0)				口縁端部は肥厚し、丸くおさめる。	内外面とも横ナデ。	青灰色	良好	良好
35	高坏					坏部は屈曲度が強く、比較的浅いものと思われる。	坏部内面ナデ、他は横ナデ。薄手づくり。	青灰色	良好	良好
36	高坏					長脚の脚部で現存資料には穿孔はみあたらない。	内外面ともナデ。内面にシボリ痕。外面に指圧痕。	灰青色	良好	良好
37	高坏					短脚の脚部をもつもので上半部で角度をかえて裾部に至る。	坏部内面ナデ、他は横ナデ。	青灰色	やや不良	堅緻
38	甕					頸部の破片。口縁部はゆるやかに立ち上がる。	内面ナデ、外面横ナデ。外面に自然釉がかかる。	青灰褐色	やや不良	堅緻
39	器台					裾部は直線的に外方へ開き、端部は丸みをおびて終る。	内外面とも横ナデ。	灰青色	良好	良好
40	坏蓋					極めて扁平で貧弱なボタン状の摘。	摘天井部・側面および内面ナデ。他は横ナデ。	灰青色	やや不良	良好

淡灰色、釉は灰白色。41・42とも横田賢次郎・森田勉氏のいう白磁Ⅳ類[3]にあたる。

瓦質土器（Fig.24　43・44　PL 15－(1)）

43は甕ないしは鉢の底部で内外面ともナデ仕上げ。側面は指圧による整形が施される。暗灰色を呈し、胎土、焼成良好、44は盤。体部は短く内彎して立ち上がり、端部は断面

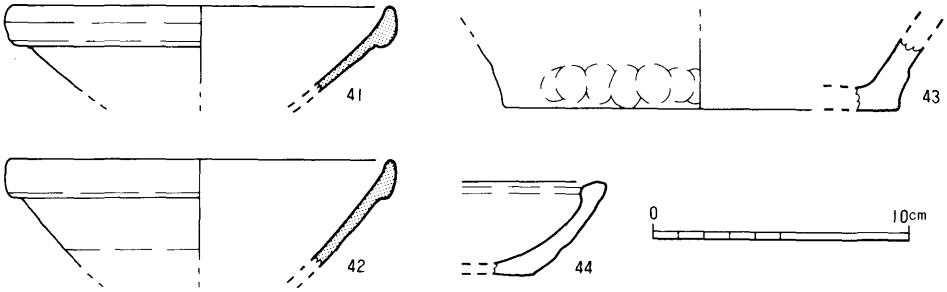


Fig.24　第３層灰褐色粘質土出土遺物実測図（輸入陶磁器、瓦質土器）

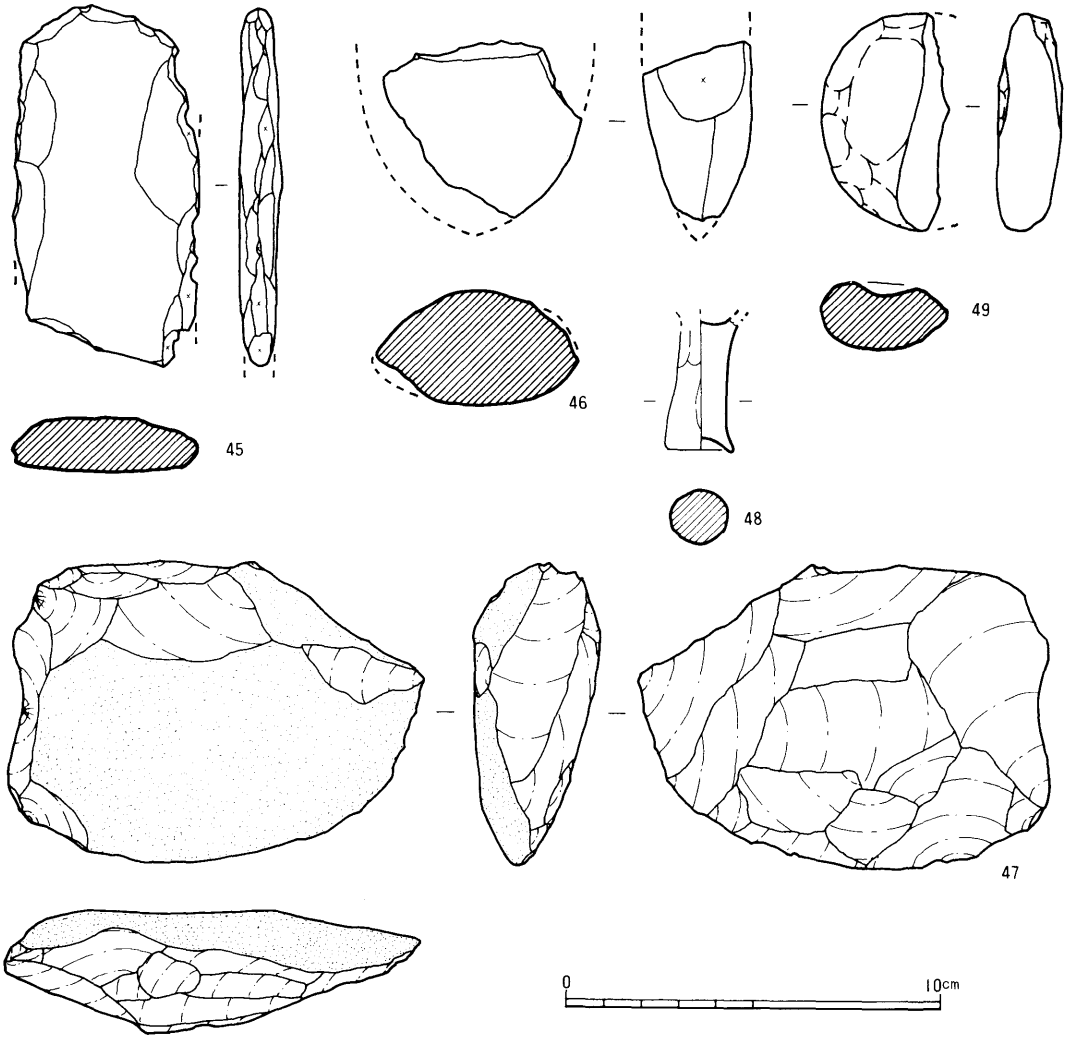


Fig.25　第３層灰褐色粘質土出土遺物実測図（石器・土製品・製塩土器）

三角形状に内側に肥厚する。底部および体部下半はナデ、口縁部は横ナデ仕上げ。灰茶褐色を呈し、胎土、焼成良好。

石器（Fig.25　45～47　ＰＬ15－(2)）

45は打製石斧（掘鍬）で刃部を欠損する。扁平な緑色片岩を素材とし周縁の剥離作業は粗雑。重量85.5ｇ。46は大型蛤刃石斧の刃部で研磨は粗い。47は目的剥片剥離の母岩（石核）。作業面は一面のみで周縁からの敲打による剥離作業を行う。

土製品　（Fig.25　48　ＰＬ15－(2)）

手捏ねの土製円板で片面中央部が指圧により窪む。

製塩土器（Fig25　49　ＰＬ15－(2)）

短い台脚部をもつ美濃ケ浜式土器で坏部を欠損する。粗い指圧による整形で脚部径1.6㎝。近藤義郎氏のいう美濃ケ浜2類[4]に相当する。胎土は砂粒を若干含む程度で良好。

第4層黒褐色粘質土出土遺物（Fig.26～35　ＰＬ15－(3)～21－(3)）

弥生土器、土師器、須恵器、磁器、瓦質土器、石器、石製品、土製品、スラグが出土した。

弥生土器（Fig.26　ＰＬ15－(3)　16－(1)）

前期から後期の各時期のものがある。

甕（1～6・19・20）　1～5は如意形口縁をもつもので、3・4は短く外反する。いずれも口縁端部が尖りぎみで刻目をもたない。6はヘラによる刺突列点文の下位に少くとも4条のヘラ描き沈線がめぐる。1・2は頸部内面ナデ、他は横ナデ、3は頸部内外面、5は内面刷毛目、他は横ナデ。6は外面縦刷毛目、内面ナデ仕上げ。1・2・6は茶褐色、3・4は赤褐色、5は黒褐色を呈し、いずれも胎土、焼成良好。19・20は「く」の字に短く外反する口縁部。19は内外面とも横ナデ、20は口縁部外面下半縦刷毛目、他は横ナデ仕上げ。19・20とも黄褐色を呈し、胎土、焼成良好。

壷（7～14・16～18）8は貝殻腹縁、9はヘラによる羽状文を施文する。10はヘラによる重弧文と山形文が描出される。11はヘラによる押圧で肩部外面に段をもつ。7は内外面ヘラ磨き、端部のみ横ナデ、8は内外面ナデ、9は外面ヘラ磨き、内面横ナデ、11は内外面ヘラ磨き。10は器面荒れのため調整不明。7は赤褐色、8・11は灰褐色、9・10は黄褐色を呈し、胎土、焼成とも良好。11は胎土に金雲母を含む。12は鋤先状口縁をもつもので黄灰色を呈し、胎土、焼成とも不良。13・16は下垂する口縁部外面にヘラ描きの鋸歯文を施文。17・18は直立ぎみに短く外反する口縁部を有する。いずれも横ナデ仕上げ。13・14・17は黄褐色、16・18は赤褐色を呈する。13は焼成不良、17は胎土に金雲母を含む。

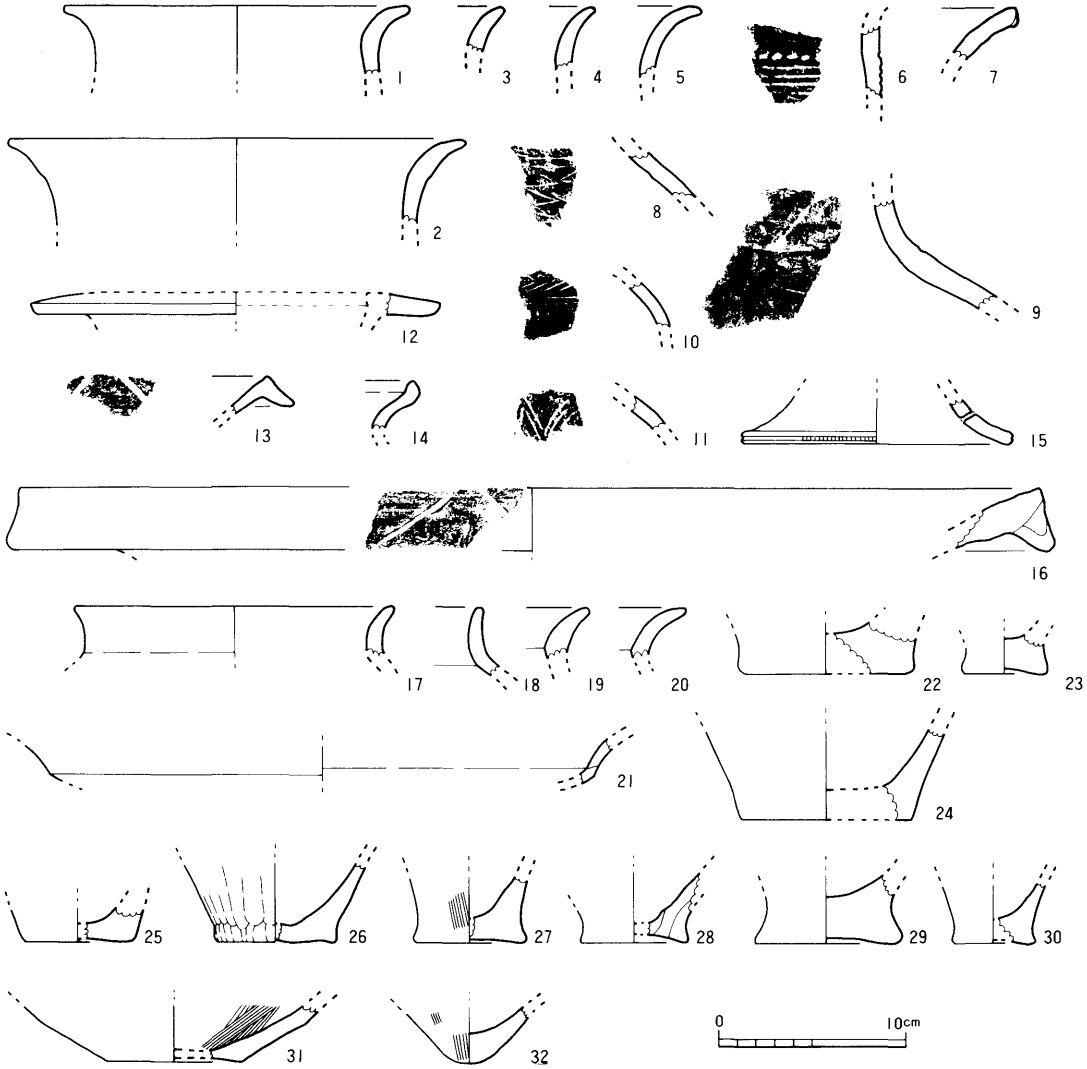


Fig.26　第4層黒褐色粘質土出土遺物実測図（弥生土器）

蓋（15）　ゆるやかな裾広がりの体部をもち、端部には刷毛状工具原体押圧による沈線がめぐる。現資料では1個の紐通し孔がみとめられる。内外面ともヘラ磨きで端部は横ナデ調整。黄褐色を呈し、胎土、焼成良好。

高坏（21）　反転して開く坏部の破片、内外面とも横ナデ仕上げ。黄褐色を呈し、胎土に粗砂を含み、焼成良好。

底部（22～32）　平底のもの（22・24～26）、やや上げ底のもの（23・27～31）、丸

底のもの（32）がある。22～30は甕、31に壷。22は円盤状の底部をもつ。26は外面のナデが粗い。22・24・28は濁黄褐色、23・26・31は茶褐色、25・27・32は赤褐色、29は灰白色、30は褐色を呈する。胎土は25・26・28・30・31が良好で他は不良。23・30は胎土に金雲母を含む。焼成は23・24が不良で他は良好。27は外面、31は内面刷毛調整。

土師器（Fig.27～29　ＰＬ　16－(2)～18－(1)　20－(2)）

坏、埦、小皿、高坏、甑がある。時期的には11～12世紀代の資料が圧倒的である。

黒色土器（Fig.29　106・107　　ＰＬ 18－(1)）

口縁部の資料が２点ある。いずれも炭素吸着が内外面におよぶ黒色土器Ｂ類で、体部が内彎しながら開き、口縁部がわずかに外反する。内外面とも横ナデ調整。106 は復原口径 13.3 cm、胎土精良、焼成堅緻。107は復原口径 14.6 cm、胎土精良、焼成堅緻。

須恵器模倣土師器（Fig.29　108　ＰＬ 18－(1)）

扁平な器形に短い厚平のかえりをもつ須恵器坏蓋模倣土師器で天井部を欠損する。口縁端部は平坦に近い。内外面とも横ナデ仕上げ。橙褐色を呈し、胎土やや不良、焼成堅緻。口径 8.6 cm、身受け部径 11.5 cm、かえり高 0.5 cm。

須恵器（Fig. 30～32　ＰＬ18－(2)～20－(2)）

坏、壷、甕、高坏があり、坏は高台を有するものが多い。時期的には６世紀中葉頃からの遺物が出土しているが、８世紀後半のものが主体を占める。

輸入陶磁器（Fig.33　179～183　ＰＬ20－(3)）

179～181は白磁埦の底部。179は低い高台をもち体部内面に沈線がめぐる。180 は高い高台を有し釉が体部と高台の境付近までかかる。Ｖ類。181は内面見込みに段を有しその内側の釉を環状にかきとる。外面無施釉。Ⅷ－２類。182は青磁埦の底部。181同様内面見込み部分の釉を環状にかきとる。外面無施釉。183は小皿の底部。胎土は179・180・182 が灰白色、181が黄灰色、183が乳白色。釉は179・180が淡灰白色、181が灰白色でいずれも半透明。182は淡青緑色。

瓦質土器（Fig.33　184～196　ＰＬ20－(3)）

184は壷。逆「く」の字状に屈曲する薄手の体部をもち、口縁部は肥厚し端部を上方につまみ上げる。内外面とも横ナデ仕上げ。黒灰色を呈し、胎土、焼成良好。185 は甕で口縁部は「く」の字状に短く外反する。内外面とも横ナデ仕上げ。灰褐色を呈し、胎土、焼成良好。186～189は鍋ないしは鼎。186は口縁部か内彎ぎみに短く立ち上がるもの。187～189は口縁端部外面に断面長方形の突帯がめぐる。187は内面刷毛目、外面横ナデ仕上げ。

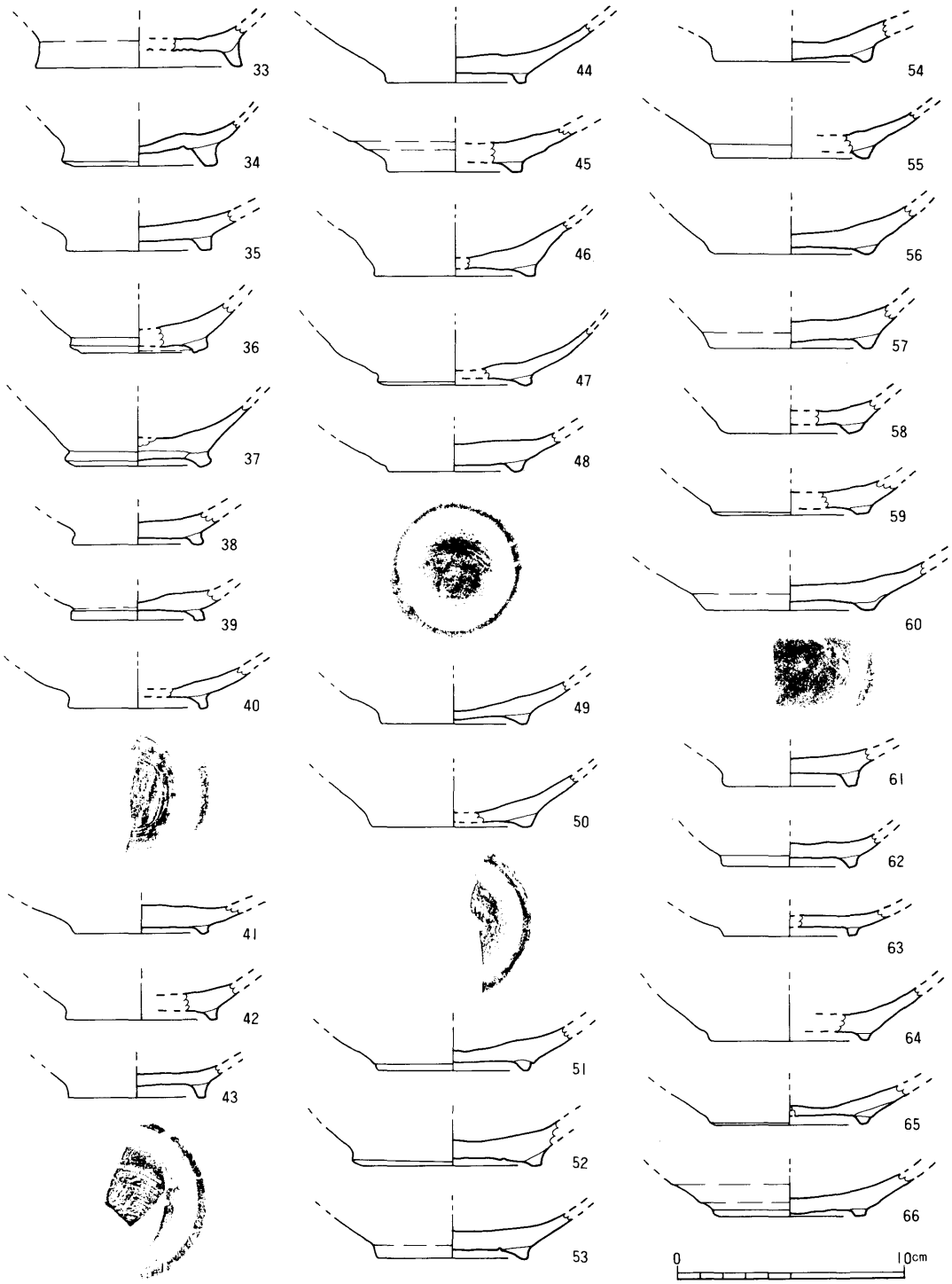


Fig.27　第4層黒褐色粘質土出土遺物実測図（土師器）1

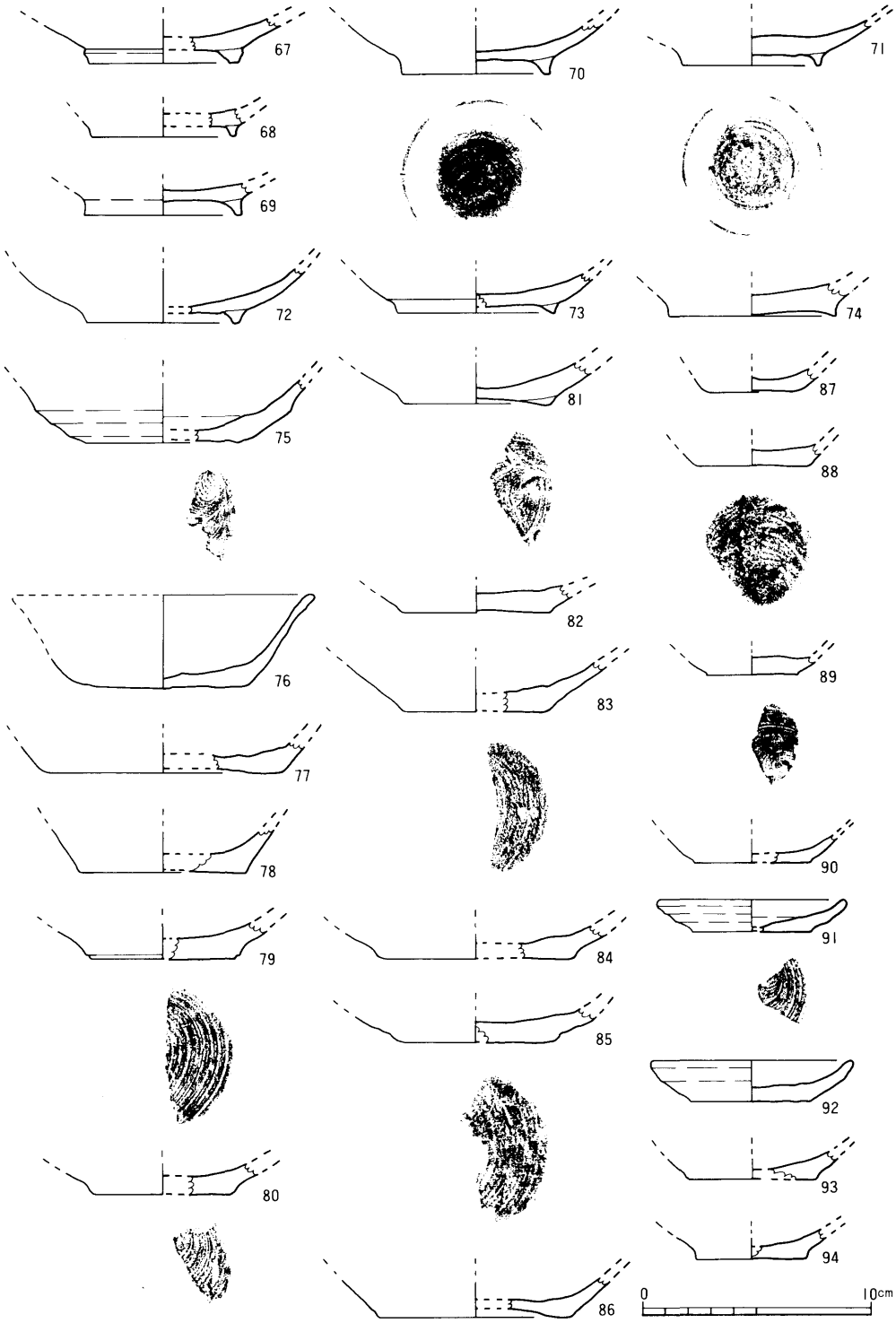


Fig.28　第４層黒褐色粘質土出土遺物実測図（土師器）２

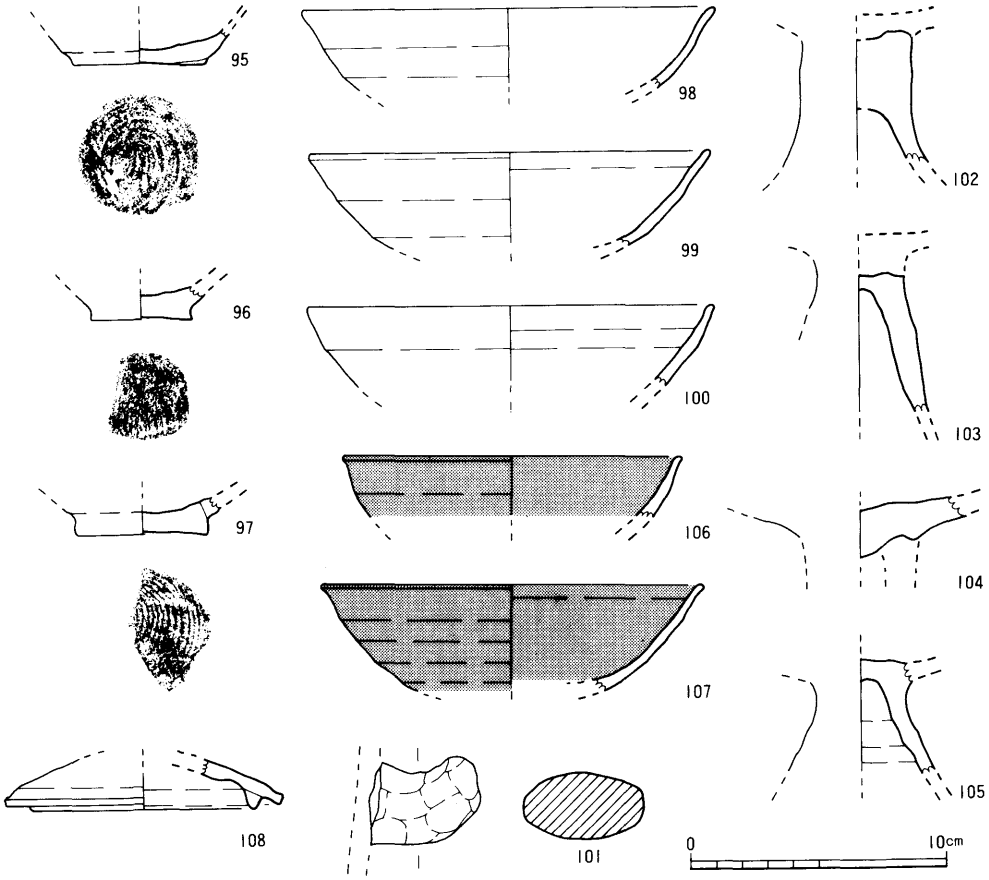


Fig.29　第4層黒褐色粘質土出土遺物実測図（土師器）3

Tab.12　第4層黒褐色粘質土出土遺物観察表（土師器）1

法量（　　）は復原値

番号	器種	法量（cm） 口径	底径	器高	高台高	形態	技法	色調	胎土	焼成
Fig.27 33	椀		(9.0)		1.1	底部と体部の境に外方へ開く断面長方形の高台を付す。	底部内面ナデ、他は横ナデ。底部外面板目圧痕。糸切り底。	灰褐色	不良	良好
34	椀		6.4		1.0	底部と体部の境に厚手の外方へ開く断面台形状の高台を付す。	底部内外面ナデ、他は横ナデ。糸切り底。	淡黄褐色	精良	良好
35	椀		(6.0)		0.6	やや厚手で断面台形状の高台を有し、接地面は丸みをおびる。	高台・体部外面横ナデ。糸切り底。	乳白色	やや不良	不良
36	椀		(5.0)		0.7	断面台形状の扁平な高台の端部外面は窪み、接地面は内側端。	外面横ナデ、内面器面荒れのため不明。	橙褐色	精良	堅緻

Tab.13　第4層黒褐色粘質土出土遺物観察表（土師器）2

法量（　　）は復原値

番号	器種	法量（cm） 口径	底径	器高	高台高	形態	技法	色調	胎土	焼成
Fig.27 37	塊		(6.5)		0.6	外方へ開く高台は低く、接地面は高台内側端。	内外面横ナデ。底部外面粘土帯貼付。糸切り底。	黄白色	精良	精良
38	塊		(5.6)		0.5	底部と体部の境にやや外方へ開く断面台形状の高台を付す。	底部内外面ナデ、他は横ナデ。	乳灰色	精良	良好
39	塊		5.8		0.5	やや外方へ踏んばりぎみに開く断面台形状の高台を付す。	底部中央部外面ナデ、他は横ナデ。糸切り底。	淡橙褐色	精良	良好
40	塊		(6.0)		0.7	底部と体部の境にやや外方へ開く細長の高台を貼付する。	外面横ナデ、内面不明。糸切り底。	淡黄褐色	精良	やや不良
41	塊		(5.6)		0.4	底部と体部の境に貧弱な高台を付す。接地面は高台内側端。	底部中央部外面ナデ、他は横ナデ。糸切り底。	淡黄褐色	良好	良好
42	塊		(6.6)		0.5	底部と体部の境に断面台形状の薄手の高台を貼付する。	内外面とも横ナデ。	灰褐色	良好	良好
43	塊		(6.0)		0.6	底部と体部の境に断面長方形状の高台を貼付する。	内面丁寧なヘラ磨き、他は横ナデ。糸切り底。	淡黄褐色	精良	良好
44	塊		(6.0)		0.3	底部と体部の境に断面長方形状の扁平な高台を貼付する。	底部内外面ナデ、体部内面ヘラ磨き、他は横ナデ。糸切り底。	淡黄褐色	良好	堅緻
45	塊		(5.8)		0.4	底部と体部の境に断面台形の高台を貼付する。	外面横ナデ、内面丁寧なヘラ磨き。	赤橙色	良好	堅緻
46	塊		(7.0)		0.5	底部と体部の境に断面台形の高台を貼付する。	外面横ナデ、内面ヘラ磨き。糸切り底。	淡黄褐色	やや不良	やや不良
47	塊		(6.1)		0.4	断面台形の極めて扁平な高台を有し高台内側端を接地面とする。	外面横ナデ、内面ヘラ磨き。糸切り底。	黄灰褐色	良好	良好
48	塊		(5.8)		0.5	厚手の底部に断面台形状の扁平な高台付す。接地面は狭い。	底部中央部外面ナデ、他は横ナデ。糸切り底。	淡黄褐色	良好	良好
49	塊		(6.3)		0.5	底部と体部の境に断面台形状の扁平な高台を貼付する。	内面ヘラ磨き、底部中央部外面ナデ、他は横ナデ。糸切り底。	橙褐色	やや不良	堅緻
50	塊		(7.0)		0.5	断面台形の扁平な高台を貼付する。接地面は狭い。	内面ヘラ磨き、底部外面ナデ、他は横ナデ。糸切り底。	淡黄褐色	やや不良	堅緻
51	塊		(6.5)		0.4	底部と体部の境よりわずかに内側に断面台形の高台を付す。	底部外面ナデ、他は横ナデ。糸切り底。	濁黄褐色	良好	堅緻
52	塊		(7.9)		0.7	厚手の底部に断面台形の低い高台を貼付する。	外面横ナデ、内面ナデ。糸切り底。	橙褐色	精良	良好
53	塊		(6.6)		0.5	底部と体部の境に断面台形の高台を貼付する。	底部内外面ナデ、他は横ナデ。	乳白色	良好	やや不良
54	塊		(6.6)		0.7	均一の厚さをもつ底部と体部の境に断面台形の高台を付す。	内面不明。底部外面ナデ、他は横ナデ。糸切り底。	淡黄褐色	精良	堅緻

Tab.14　第4層黒褐色粘質土出土遺物観察表（土師器）3

法量（　　）は復原値

番号	器種	法量（cm） 口径	底径	器高	高台高	形態	技法	色調	胎土	焼成
Fig.27 55	塊		(6.7)		0.6	底部と体部の境に断面台形状の扁平な高台を貼付する。	外面横ナデ、内面ナデ。糸切り底。	濁黄褐色	精良	良好
56	塊		(8.7)		0.4	底部と体部の境に断面三角形の扁平な低い高台を貼付する。	底部外面ナデ、高台・体部外面横ナデ。内面不明。	濁黄褐色	精良	やや不良
57	塊		(6.9)		0.7	底部と体部の境に断面台形の高台を貼付する。	外面横ナデ、内面不明。糸切り底。	黄褐色	精良	良好
58	塊		(7.2)		0.5	底部と体部の境よりわずかに内側に断面台形の高台を付す。	外面横ナデ、内面不明。糸切り底。	灰褐色	精良	やや不良
59	塊		(5.8)		0.4	底部と体部の境に断面台形の扁平な低い高台を貼付する。	底部外面ナデ、体部外面・高台横ナデ。内面不明。	淡黄褐色	不良	やや不良
60	塊		(7.3)		0.7	底部と体部の境に断面台形の極めて扁平な高台を貼付する。	底部内面ナデ、他は横ナデ。底部外面麦の圧痕。糸切り底。	黄褐色	良好	堅緻
61	塊		(5.8)		0.6	底部と体部の境に直立する断面長方形の高台を貼付する。	体部外面・高台横ナデ、内面不明。糸切り底。	濁黄褐色	やや不良	良好
62	塊		(7.8)		0.5	底部と体部の境に直立する断面台形状の高台を貼付する。	底部外面ナデ、体部外面・高台横ナデ。内面不明。	濁黄褐色	精良	良好
63	塊		(5.8)		0.4	底部と体部の境に内傾ぎみの断面方形の高台を貼付する。	体部外面・高台横ナデ、内面・底部外面ナデ。	濁黄褐色	精良	やや不良
64	塊		(6.8)		0.3	底部と体部の境に直立する断面台形の小さな低い高台付す。	底部内面ナデ、他は不明。	淡黄褐色	やや不良	やや不良
65	塊		(6.4)		0.3	底部と体部の境に断面台形の高台を付す。接地面は内側端。	体部外面・高台横ナデ、底部外面ナデ。内面不明。	淡黄褐色	やや不良	良好
66	塊		(6.8)		0.3	体部はゆるやかに立ち上がる。高台は断面長方形状で扁平。	底部内面ナデ、他は横ナデ。糸切り底。	黄白色	精良	堅緻
Fig.28 67	塊		(6.4)		0.7	底部と体部の境に変形した断面台形状の高台を貼付する。	底部外面ナデ、体部外面・高台横ナデ。内面不明。	濁黄褐色	良好	堅緻
68	塊		(6.2)		0.4	底部と体部の境に断面長台形状の先細りの高台を貼付する。	体部内外面・高台横ナデ。他は不明。	濁黄褐色	良好	不良
69	塊		(6.6)		0.7	底部と体部の境に断面長台形の高台を貼付する。	高台横ナデ、内面不明。糸切り底。	黄白色	精良	良好
70	塊		(6.4)		0.8	底部と体部の境に断面台形状の先細りの高台を貼付する。	高台横ナデ、内面不明。糸切り底。	乳白色	精良	不良
71	塊		(6.0)		0.6	底部と体部の境に断面三角形の高台を付す。接地面は狭い。	外面・体部内面横ナデ、他は不明。糸切り底。	黄褐色	精良	良好
72	塊		(6.6)		0.5	体部は内彎しながら立ち上がる。高台は断面台形状。	体部外面・高台横ナデ、他は不明。	乳白色	精良	不良

Tab.15　第4層黒褐色粘質土出土遺物観察表（土師器）4

法量（　　）は復原値

番号	器種	法量（cm） 口径	底径	器高	高台高	形態	技法	色調	胎土	焼成
Fig.28 73	塊		(6.8)		0.5	底部と体部の境に断面三角形の低い高台を貼付する。	体部外面・高台横ナデ、他は不明。	淡黄 褐色	良好	やや不良
74	塊		(7.2)		0.5	やや特異な断面三角形の小さな高台を貼付する。	底部中央部外面ナデ、他は横ナデ。糸切り底。	淡黄 褐色	やや不良	良好
75	坏		(6.6)			やや上げ底ぎみで体部は内彎しながら立ち上がる。	体部下半厚手。内面・体部外面横ナデ。糸切り底。	橙褐色	やや不良	堅緻
76	坏	12.8	7.2	4.1		体部は直線的に立ち上がり、口縁端部はわずかに外反する。	底部外面・底部中央部内面ナデ、他は横ナデ。ヘラ切り底。	濁黄 褐色	やや不良	不良
77	坏		(8.0)			やや上げ底ぎみ。	内面・体部外面横ナデ、底部外面ナデツケ。ヘラ切り底。	黄褐色	不良	不良
78	坏		(7.2)			大型の皿かもしれない。	内外面とも器面荒れのため不明。	灰褐色	不良	不良
79	坏		(6.2)			底部と体部の境外面にヘラ押圧による段を有する。	体部外面横ナデ、内面ナデ。他は不明。糸切り底。	橙褐色	良好	良好
80	坏		(5.8)			体部は底部とほぼ均一の厚さで立ち上がる。	体部外面横ナデ、内面ナデ。他は不明。糸切り底。	橙褐色	精良	良好
81	坏		6.2			底部と体部の境に粘土帯を貼付し接地面をつくりだす。	体部外面ナデ、体部・底部内面横ナデ。糸切り底。	明褐色	精良	良好
82	坏		(6.4)			厚手の底部はやや上げ底ぎみ。	内外面とも器面荒れのため不明。	淡黄 褐色	不良	やや不良
83	坏		(6.2)			体部は厚手の底部から直線的に立ち上がる。	内面・体部外面横ナデ。内面は丁寧。糸切り底。	橙褐色	精良	やや不良
84	坏		(8.0)			底～体部の破片。	内面ナデ、体部外面横ナデ。糸切り底。	淡赤 褐色	精良	良好
85	坏		(6.2)			底部は台状を呈し、体部との境は不明瞭。	内面ナデ、体部外面粗い横ナデ。糸切り底。	黄褐色	良好 (金雲母)	良好
86	坏		(8.3)			全体的に薄手で体部の開きは大きい。上げ底。	内外面とも横ナデ。	灰褐色	良好	良好
87	小皿		(3.4)			やや上げ底ぎみで底部と体部の境は不明瞭。	内面ナデ、外面器面荒れのため不明。	淡黄 褐色	不良	不良
88	小皿		5.0			厚手の底部の破片。	内外面とも調整不明。糸切り底。	乳白色	不良	不良
89	小皿		3.9			小型品で底部の厚さはほぼ均一。	内外面横ナデ。体部下端まで糸切り痕残る。糸切り底。	橙褐色	精良	堅緻
90	小皿		(5.0)			極めて薄手のつくりの小型品。	底部内外面ナデ、体部内外面横ナデ。糸切り底。	黄橙色	不良	やや不良

Tab.16　第4層黒褐色粘質土出土遺物観察表（土師器）5　法量（　　）は復原値

番号	器種	法量（cm） 口径	底径	器高	高台高	形態	技法	色調	胎土	焼成
Fig.28 91	小皿	7.8	(5.1)	1.9		体部は内彎ぎみに短く立ち上がる。口縁端部は平担。	底部内面ナデ、他は横ナデ。糸切り底。	灰褐色	良好	良好
92	小皿	8.7	5.3	1.8		体部は内彎ぎみに短く立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。	内面・体部外面横ナデ。他は不明。糸切り底。	橙褐色	やや不良	良好
93	小皿		(5.3)			体部は底部からゆるやかに立ち上がる。	体部外面横ナデ、底部外面ナデ。内面不明。	灰褐色	良好	やや不良
94	小皿		(4.7)			薄手の体部は円盤状の底部からゆるやかに立ち上がる。	内外面とも器面荒れのため不明。糸切り底。	橙色	不良	不良
Fig.29 95	小皿		(5.1)			底部と体部の境外面は粘土帯貼付によりやや厚手となる。	内外面とも横ナデ。糸切り底。	灰褐色	やや不良(金雲母)	良好
96	小皿		3.9			やや上げ底ぎみの底部	内面ナデ、体部外面・底部側面横ナデ。糸切り底。	乳白色	良好	やや不良
97	小皿		5.0			やや上げ底ぎみの底部。	底部中央部内面ナデ、他は横ナデ。糸切り底。	橙褐色	良好	堅緻
98	埦	(16.0)				体部は内彎しながら立ち上がり、口縁端部はわずかに外反。	内外面ともやや粗い横ナデ。	黄褐色	不良	良好
99	埦	(15.6)				体部は内彎ぎみに屈曲しながら立ち上がり、端部は尖りぎみ。	内外面とも横ナデ。	橙褐色	精良	堅緻
100	埦	(15.6)				体部は直線的に立ち上がり、口縁端部付近で内彎する。	内外面とも横ナデ。	黄橙色	精良	良好
101	甑					甑の把手。断面長楕円形で端部は上方へもち上がる。	指圧による整形。	赤褐色	やや不良	良好
102	高坏					脚上半部の破片で下方へ大きく開く短脚のもの。	器面荒れのため内外面とも調整不明。	黄褐色	精良	良好
103	高坏					脚上半部の破片で坏部を欠く。	器面荒れのため内外面とも調整不明。	橙褐色	やや不良	良好
104	高坏					坏部の破片で脚部を坏部に接合する。	器面荒れのため内外面とも調整不明。	黄橙色	良好	やや不良
105	高坏					薄手のつくりで脚裾部への開きは大きい。	坏部内面粗い横ナデ、他は器面荒れのため不明。	灰黒色	精良	良好

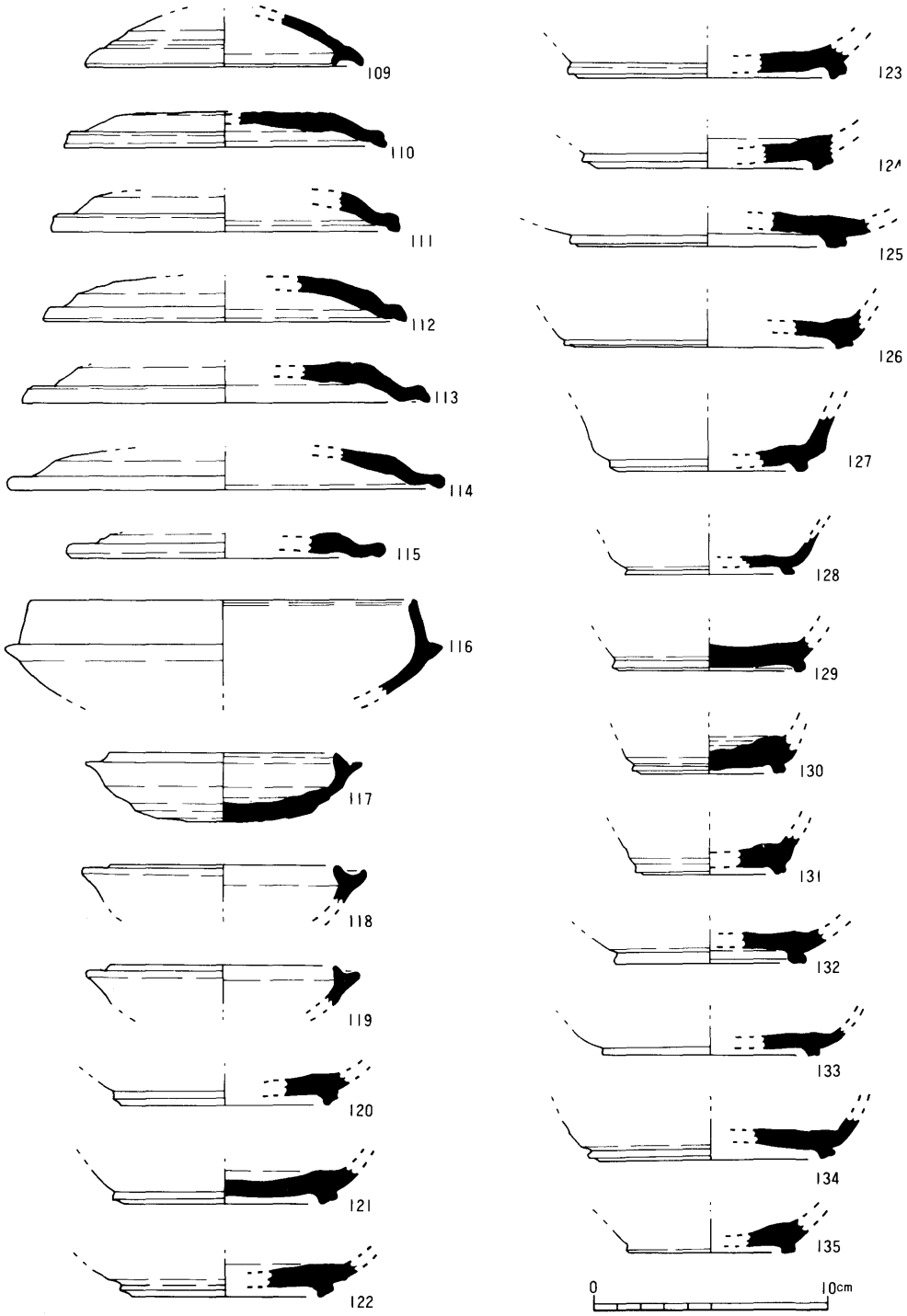


Fig. 30　第４層黒褐色粘質土出土遺物実測図（須恵器）１

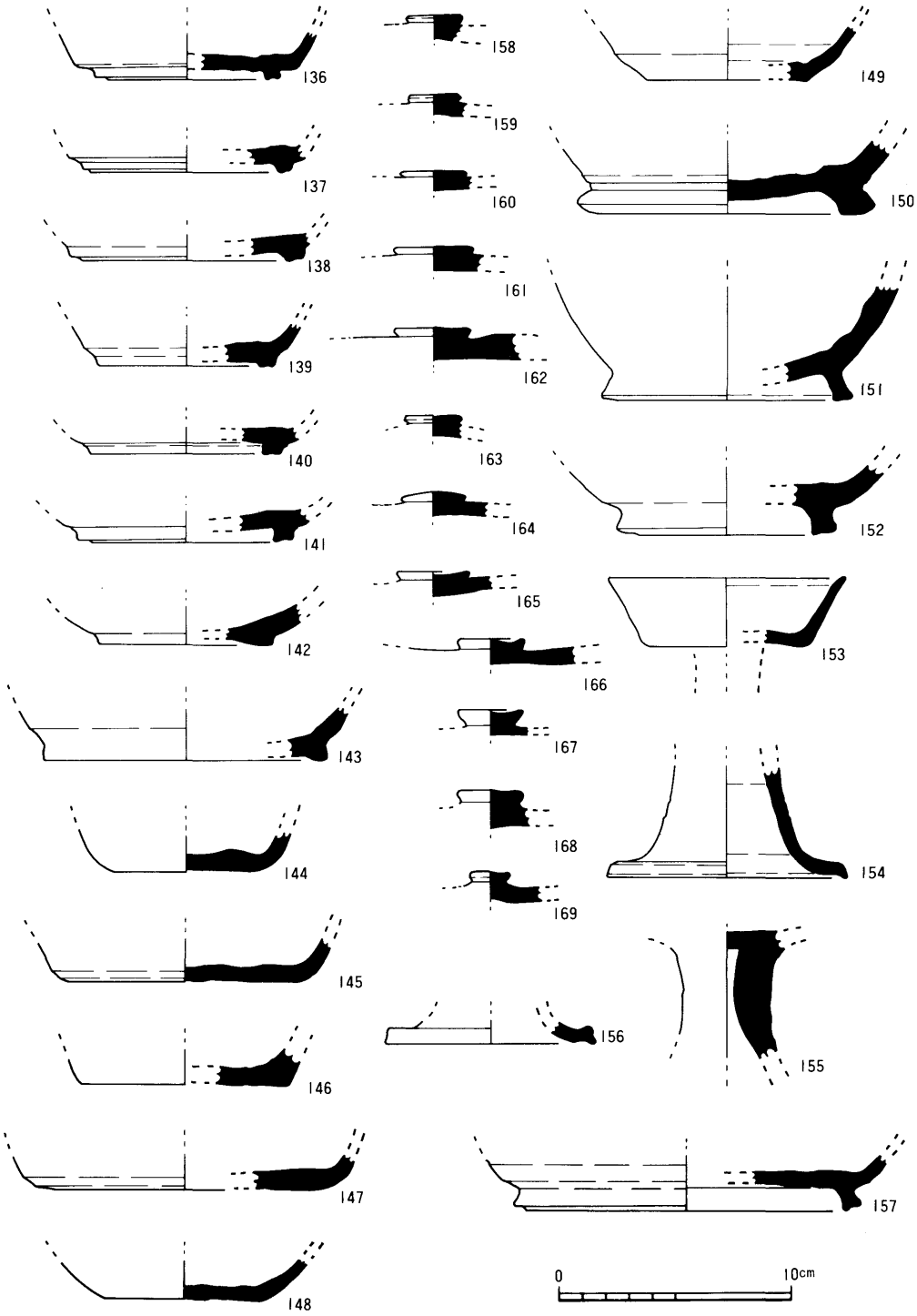


Fig.31　第４層黒褐色粘質土出土遺物実測図（須恵器）２

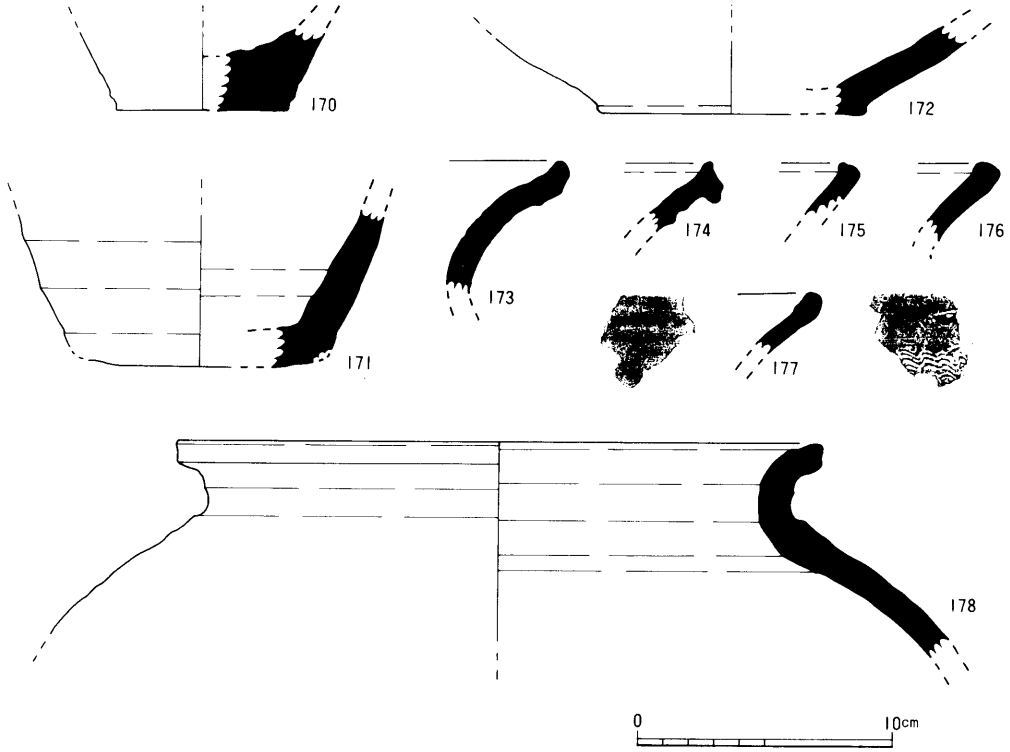


Fig. 32　第4層黒褐色粘質土出土遺物実測図（須恵器）3

Tab. 17　第4層黒褐色粘質土出土遺物観察表（須恵器）1

法量（　　）は復原値

番号	器種	法量（cm） 口径	底径	器高	高台高	形態	技法	色調	胎土	焼成
Fig. 30 109	坏蓋	(11.7)				小型で扁平な蓋。かえりは短く小さいもので外彎ぎみに内傾する。	内外面とも横ナデ。	濃青灰色	精良	良好
110	坏蓋	(13.6)		(1.5)		天井部平坦で撮をもたない。鳥嘴状の口縁部は外方へ開き端部外面窪む。	天井部ヘラ切り後ナデツケ。他は横ナデ。	濃青灰色	不良	良好
111	坏蓋	(14.6)				鳥嘴状の口縁部は外方へ開き、端部はやや尖りぎみに終る。	内外面とも横ナデ。	青灰色	良好	堅緻
112	坏蓋	(15.3)				体部から口縁部の屈曲は小さい。鳥嘴状の口縁部は外方へ開き端部尖る。	口縁部横ナデ、体部外面手持ちヘラ削り。	青灰色	やや不良	良好
113	坏蓋	(17.2)				扁平で天井部は平坦に近い。体部下端と鳥嘴状に尖る口縁端部で接地。	天井部ヘラ切り放し後ナデツケ。他は横ナデ。	灰青色	やや不良	やや不良
114	坏蓋	(18.0)				体部から屈曲しながらほぼ水平に開く口縁部をもつ。端部は丸く肥厚。	体部内外面ナデ、他は横ナデ。	淡青灰色	不良	やや不良

Tab.18　第4層黒褐色粘質土出土遺物観察表（須恵器）2

法量（　　）は復原値

番号	器種	法量（cm） 口径	底径	器高	高台高	形態	技法	色調	胎土	焼成
Fig.30 115	坏蓋	(13.0)				極めて扁平で厚手。口縁端部は丸く肥厚し、体部下端とともに接地する。	体部内外面ナデ、他は横ナデ。	灰白色	やや不良	不良
116	坏身	(16.2)				立ち上りは内傾し、端部は尖りぎみに終る。受部は水平に近く開く。	内外面とも横ナデ。	青灰色	良好	良好
117	坏身	9.5		2.9		立ち上り短く内傾し端部は尖る。受部水平に開き、立ち上りとの境窪む。	底部外面ヘラ切り後ナデ、内面ナデ。	濃青灰色	不良	堅緻
118	坏身	(9.6)				立ち上りは短く外彎ぎみに内傾し、端部は尖る。受部は短く外方へ開く。	内外面とも横ナデ。	青灰色	不良	良好
119	坏身	(9.5)				立ち上り短く外彎ぎみに内傾し、端部は尖りぎみ。受部は水平に近く開く。	内外面とも横ナデ。	青灰色	精良	良好
120	坏身		(8.6)		0.6	底部と体部の境に断面長方形状の高台を付す。接地面は高台内側端。	底部内面ナデ、他は横ナデ。	灰青色	良好	良好
121	坏身		8.2		0.5	わずかに外方へ開く断面長方形状の高台を付す。接地面は高台内側端。	底部内外面ナデ、他は横ナデ。	青灰色	良好	良好
122	坏身		(7.9)		0.6	底部と体部の境より内側に外方へ開く断面長方形状の高台を貼付する。	内外面とも横ナデ。	濃青灰色	良好	堅緻
123	坏身		(10.8)		0.7	外方へ開く断面方形状の高台を付す。高台端部は窪み接地面は高台内側端。	底部中央部内外面はナデ、他は横ナデ。	淡青灰色	良好	良好
124	坏身		(9.2)		0.6	底部と体部の境に外方へ開く幅広扁平な高台を付す。接地面は高台内側端。	底部内外面ナデ、他は横ナデ。	灰青色	良好	良好
125	坏身		(11.0)		0.5	底部と体部の境に外方へ開く断面長方形状の幅広の高台を貼付する。	内外面とも横ナデ。	青灰色	良好	良好
126	坏身		(11.2)		0.3	やや大型の坏。外方へ開く極めて扁平な低い高台を付す。高台端部は窪む。	底部内面ナデ、他は横ナデ。	濃青灰色	やや不良	良好
127	坏身		(7.6)		0.5	底部と体部の境より内側にやや外方に開く断面台形状の高台を貼付する。	底部内面ナデ、他は横ナデ。	濃青灰色	不良	良好
128	坏身		(7.2)		0.3	小型の坏。底部と体部の境に外方へ開く貧弱な高台を貼付する。	底部中央部内外面ナデ、他は横ナデ。	青灰色	良好	良好
129	坏身		7.6		0.5	底部と体部の境に外方へ開く断面方形の低い高台を貼付する。	底部中央部内外面ナデ、他は横ナデ。	濃青灰色	精良	良好
130	坏身		(5.6)		0.4	小型の坏。底部と体部の境にやや外方へ開く小さな高台を貼付する。	底部内外面ナデ、他は横ナデ。	濃青灰色	良好	良好
131	坏身		(5.6)		0.4	小型の坏。底部と体部の境に断面台形の高台を付す。高台端部は窪む。	底部外面ナデ、他は横ナデ。	濃青灰色	良好	堅緻
132	坏身		(8.2)		0.5	底部と体部の境に外方へ開く断面台形の高台を付す。接地面は高台内側端。	底部内面ナデ、他は横ナデ。	青灰色	良好	良好

Tab.19　第4層黒褐色粘質土出土遺物観察表（須恵器）3

法量（　　）は復原値

番号	器種	法量（cm） 口径	底径	器高	高台高	形態	技法	色調	胎土	焼成
Fig.30 133	坏身		(9.1)		0.3	小型の坏。薄手で底部と体部の境に断面長方形状の高台を貼付する。	底部内面ナデ、他は横ナデ。	淡青灰色	良好	良好
134	坏身		(9.4)		0.5	底部と体部の境に断面長方形状の高台を貼付する。接地面は高台内側端。	底部内面・底部中央部外面ナデ、他は横ナデ。	青灰色	不良	良好
135	坏身		(7.0)		0.4	厚手の底部と体部の境に断面長方形状の扁平な高台を貼付する。	底部外面ナデ、高台・体部外面横ナデ。	灰青色	良好	やや不良
Fig.31 136	坏身		(6.8)		0.4	底部と体部の境より内側に断面長方形状の扁平な高台を付す。高台端部窪む。	底部中央部内外面ナデ、他は横ナデ。	青灰色	不良	良好
137	坏身		(8.4)		0.4	底部と体部の境よりわずかに内側に断面台形の扁平な高台を貼付する。	底部中央部内面ナデ、他は横ナデ。	青灰色	精良	良好
138	坏身		(8.9)		0.6	底部と体部の境に断面台形の扁平な高台を付す。接地面は高台内側端。	底部内面ナデ、他は横ナデ。	青灰色	良好	良好
139	坏身		(7.5)		0.4	底部と体部の境に断面台形の極めて扁平な低い高台を貼付する。	底部外面ナデ、他は横ナデ。	濃青灰色	やや不良	堅緻
140	坏身		(8.1)		0.5	底部と体部の境に内傾する不整形な高台を貼付する。高台端部は窪む。	底部内面ナデ、他は横ナデ。	青灰色	良好	良好
141	坏身		(7.8)		0.7	底部と体部の境よりやや内側に方形状の高台を付す。高台端部は窪む。	内面ナデ、高台・体部外面横ナデ。	青灰色	良好	堅緻
142	坏身		7.4		0.4	底部と体部の境付近に粘土帯を貼付し高台状に仕上げる。	内面・底部外面ナデ、体部外面横ナデ。	濃青灰色	不良	やや不良
143	坏身		(12.0)		0.6	底部と体部の境に断面三角形の厚手の高台を貼付する。	底部内面ナデ、他は粗い横ナデ。	青黄色	不良	やや不良
144	坏身		(6.0)			底部と体部の境は不明瞭。体部は強く屈曲して立ち上がる。	底部中央部内外面ナデ、他は横ナデ。	淡青灰色	精良	良好
145	坏身		(9.8)			体部は底部から均一の厚さで内彎しながらゆるやかに立ち上がる。	底部内外面ナデ、他は横ナデ。	青灰色	良好	良好
146	坏身		(8.8)			厚手の底部をもち、体部との境は不明瞭。	底部内外面・体部外面粗いナデ、他は横ナデ。	青黄色	精良	堅緻
147	坏身		(14.0)			大型の坏。底部と体部の境は不明瞭。	底部内外面ナデ、体部内外面横ナデ。	青灰色	良好	良好
148	坏身		6.6			薄手のつくりで体部は内彎ぎみに立ち上がる。	内外面横ナデ、底部内外面ナデツケ。	灰青色	良好	良好
149	坏身		(6.9)			体部は内彎ぎみにやや屈曲しながら立ち上がる。	底部内外面ナデ、体部内外面横ナデ。	青黄色	良好	やや不良
150	壷		(11.0)		1.3	外方へ開く厚手の高台は低く、高台端部は肥厚する。	底部内面粗いナデ、底部外面ナデ、他は横ナデ。	濃青灰色	やや不良	良好

Tab.20　第4層黒褐色粘質土出土遺物観察表（須恵器）4

法量（　　）は復原値

番号	器種	法量（cm） 口径	底径	器高	高台高	形態	技法	色調	胎土	焼成
Fig.31 151	壷		(9.2)		0.7	丸底の底部に外方へ開く脚台をもつ小ぶりの壷の底部。	内外面とも横ナデ。	淡青灰色	良好	良好
152	壷		(7.4)		1.2	わずかに外方へ開く脚台は断面長方形状を呈する。	内外面とも横ナデ。	青灰色	やや不良	良好
153	高坏	(10.1)				坏部の破片。体部は直線的に短く立ち上がり、端部は尖りぎみに終る。	底部内外面ナデ、他は横ナデ。	淡青灰色	やや不良	良好
154	高坏		10.2			ゆるやかに外方へ開く脚部は下半部で屈曲し鳥嘴状の端部にいたる。	内外面とも横ナデ。	青灰色	良好	良好
155	高坏					厚手の脚上半部。	脚部内外面横ナデ、坏部内面ナデ。	濃青灰色	やや不良	堅緻
156	高坏		(9.0)			脚端部は鳥嘴状を呈し、外面はわずかに窪む。	内外面とも横ナデ。	暗灰色	精良	良好
157	盤		(13.7)		1.1	底部と体部の境よりやや内側に外方へ開く断面長方形状の高い高台付す。	底部内外面ナデ、他は横ナデ。	淡青灰色	良好	良好
158	坏蓋					撮をもつ頂部の破片。撮上面は平担。	外面横ナデ、撮中央部・内面ナデ。	灰白色	良好	不良
159	坏蓋					撮をもつ頂部の破片。撮は扁平で上面は平担。	外面横ナデ、撮中央部・内面ナデ。	青灰色	良好	良好
160	坏蓋					撮をもつ頂部の破片。撮は扁平で上面は平担。	外面横ナデ、内面ナデ。	淡青灰色	良好	やや不良
161	坏蓋					撮をもつ頂部の破片。撮は大きく扁平で上面は平担。	外面横ナデ、撮中央部・内面ナデ。	青灰色	精良	良好
162	坏蓋					撮をもつ頂部の破片。撮上面はほぼ平担。	外面横ナデ、内面ナデ。	淡青灰色	やや不良	やや不良
163	坏蓋					撮をもつ頂部の破片。撮は扁平で上面はほぼ平担。	外面横ナデ、撮中央部・内面ナデ。	青灰色	精良	良好
164	坏蓋					撮をもつ頂部の破片。撮は中央部に向うにつれてやや厚手となる。	外面横ナデ、撮中央部・内面ナデ。	淡青灰色	精良	良好
165	坏蓋					撮をもつ頂部の破片。撮中央部は窪む。	外面横ナデ、撮中央部・内面ナデ。	青灰色	良好	堅緻
166	坏蓋					撮をもつ頂部の破片。撮中央部は窪む。	外面横ナデ、撮中央部・内面ナデ。	青灰色	良好	良好
167	坏蓋					撮をもつ頂部の破片。やや高い撮の中央部は窪む。	外面横ナデ、撮中央部・内面ナデ。	乳白色	やや不良	不良
168	坏蓋					撮をもつ頂部の破片。高い撮の中央部はわずかに窪む。	外面横ナデ、撮中央部・内面ナデ。	青灰色	やや不良	やや不良

Tab.21　第4層黒褐色粘質土出土遺物観察表（須恵器）5

法量（　　）は復原値

番号	器種	法量（cm） 口径	底径	器高	高台高	形態	技法	色調	胎土	焼成
Fig.31 169	坏蓋					撮をもつ頂部の破片。撮は中央部に向うにつれて厚手となる。	外面横ナデ、内面ナデ。	濃青灰色	やや不良	良好
Fig.32 170	壷		(6.7)			極めて厚手の平底。	底部外面ナデ、他は横ナデ。	濃青灰色	良好	良好
171	壷		(10.0)			不安定な平底ぎみの底部。	内外面ともやや粗い横ナデ。	青灰色	やや不良	良好
172	壷		(10.0)			平底で胴部の開きは大きい。	内面・底部外面ナデ、他は横ナデ。	灰白色	精良	やや不良
173	甕					口縁部の破片。外彎しながら開き、端部は内彎ぎみに立ち上がる。	内外面とも横ナデ。	灰青色	良好	やや不良
174	甕					口縁部の破片。直線的に開き、端部外面は粘土帯貼付により肥厚する。	内外面とも横ナデ。	灰青色	良好	極堅緻
175	甕					口縁部の破片。端部外面は平担。	内外面とも横ナデ。	青灰色	やや不良	堅緻
176	甕					口縁部の破片。端部はやや肥厚し、端部外面は平担面をもつ。	内外面とも横ナデ。	青灰色	良好	良好
177	甕					口縁部の破片。口縁端部は肥厚し丸くおさめる。	外面少くとも6条の波状文。内外面とも横ナデ。	濃青灰色	良好	堅緻
178	甕	(25.0)				口縁部は大きく屈曲し、短く外彎しながら開く。端部外面はやや窪む。	胴部外面平行叩き、内面ナデ、口縁部横ナデ。	青灰色	良好	良好

187・189は内面および外面突帯以下刷毛目、他は横ナデ、188は内面刷毛目、外面横ナデ仕上げ。187は黒灰色、188・189は黒褐色を呈し、胎土、焼成良好。いずれも外面に煤付着。190は鍋ないしは鉢。口縁端部内面は内側に突出する。体部内面粗い刷毛目、他は横ナデ調整。灰黒色を呈し、胎土やや不良、焼成良好。191は厚手の皿。体部は内彎ぎみに立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。底部外面ナデ、他は横ナデ仕上げ。黒灰色で胎土精良。焼成良好。192は擂鉢。口縁端部内面は粘土帯貼付により断面三角形状に肥厚する。体部内面に6条の櫛目描き上げを施す。体部外面刷毛目、他は横ナデ仕上げ。外面黒灰色、内面乳灰白色を呈し、胎土、焼成とも良好。193～196は鼎の脚部。いずれも指圧による整形が施される。196は底部との境に煤が付着する。193は黒灰色、194は黄褐色、195は黄灰褐色、196は茶褐色を呈し、いずれも胎土、焼成良好。

石器（Fig.34・35　PL21－(1)）

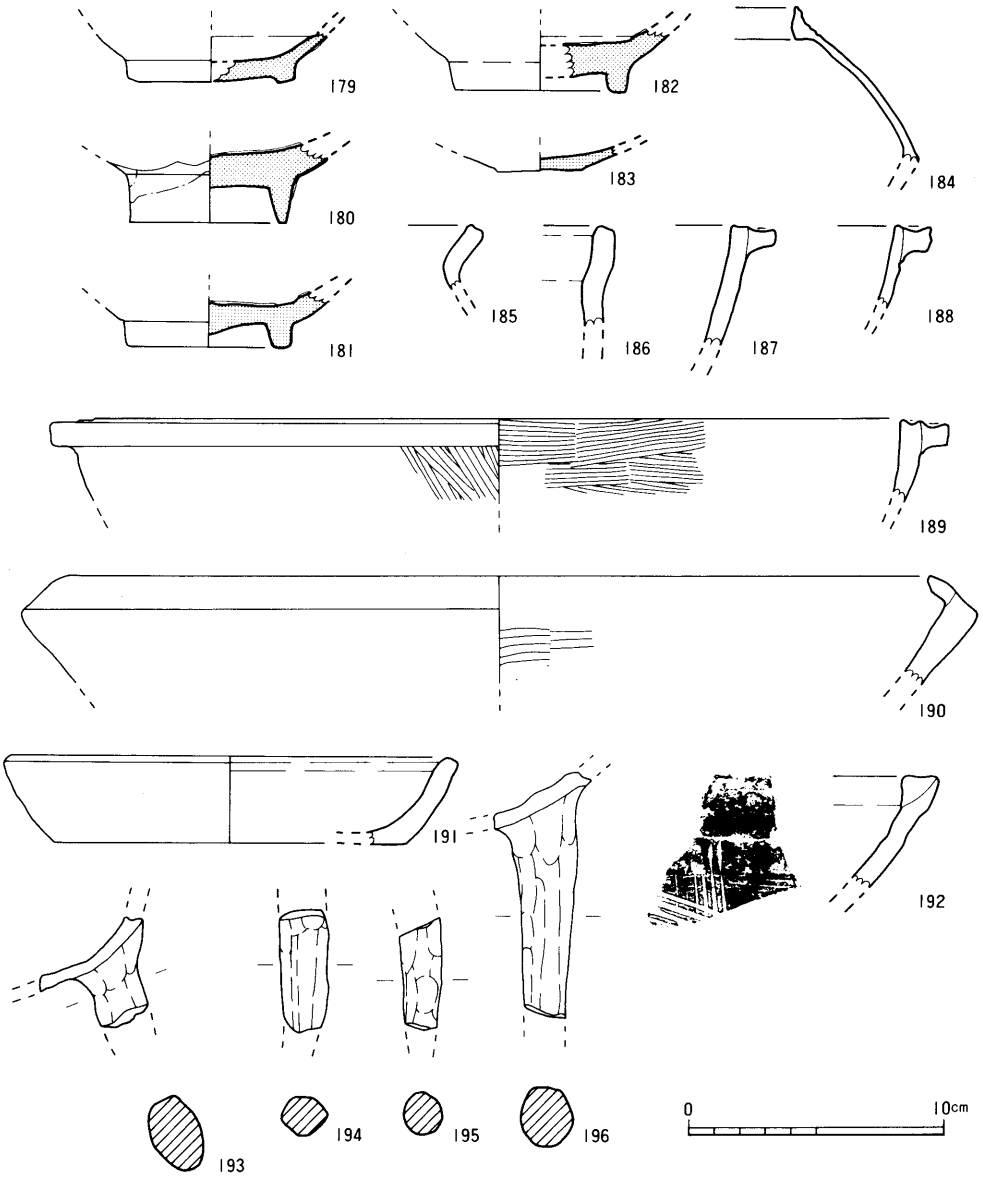


Fig. 33　第4層黒褐色粘質土出土遺物実測図（輸入陶磁器・瓦質土器）

磨製石斧（Fig. 34　197～199）　197は寸づまりの扁平磨製石斧。撥形を呈し頭部はゆるくカーブする。再研磨により両刃に造出するが、正背両面での刃部長の差が著しい。器長9.2 cm、器幅6.2 cm、器厚2.1 cm、重量228.0 g。198・199は蛤刃石斧。198は小型品で頭部を欠損する。内彎する刃部は短く刃部長1.7 cm。器長8.6 cm、器幅4.1 cm、器厚2.5 cm、

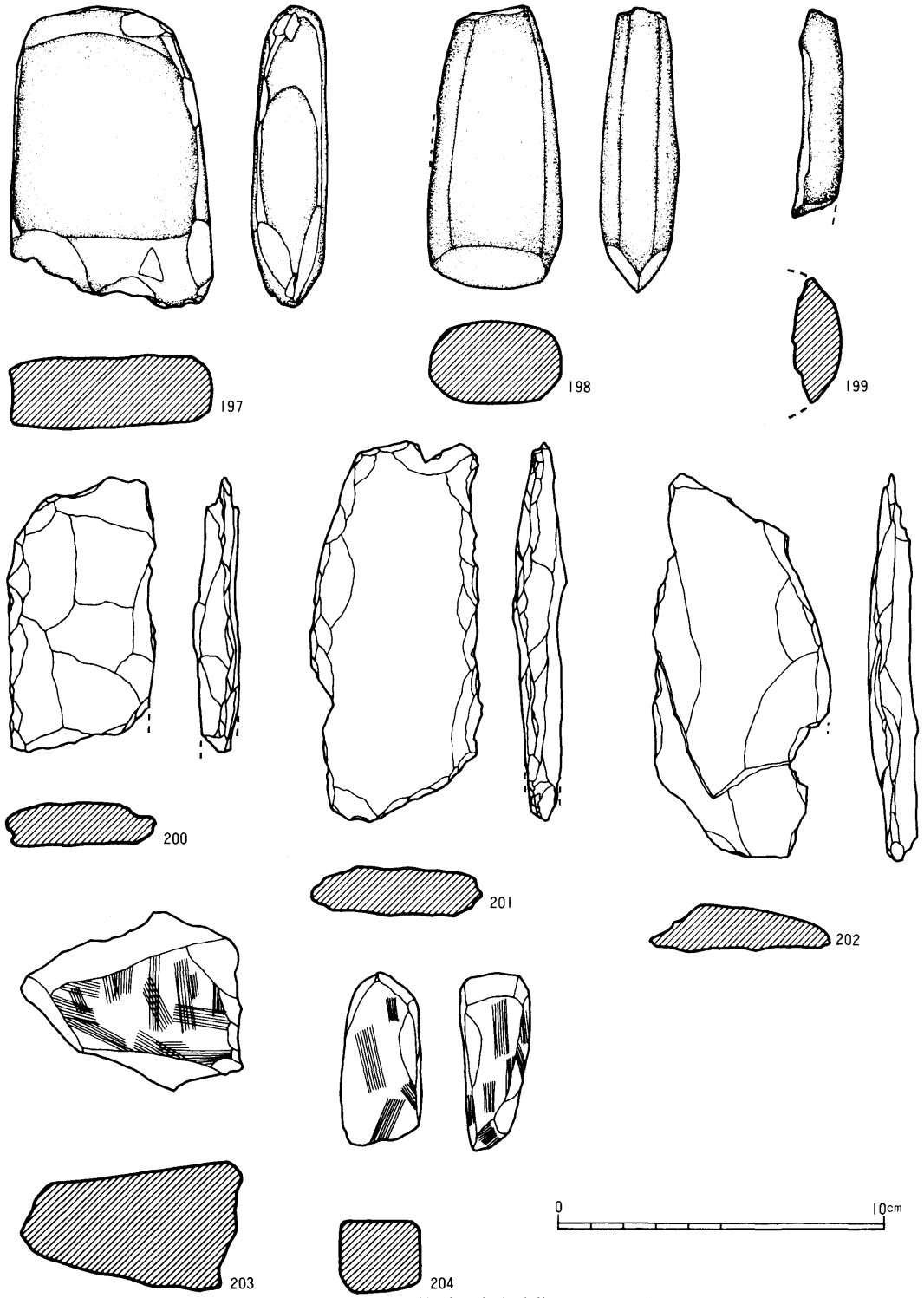


Fig.34　第４層黒褐色粘質土出土遺物実測図（石器）

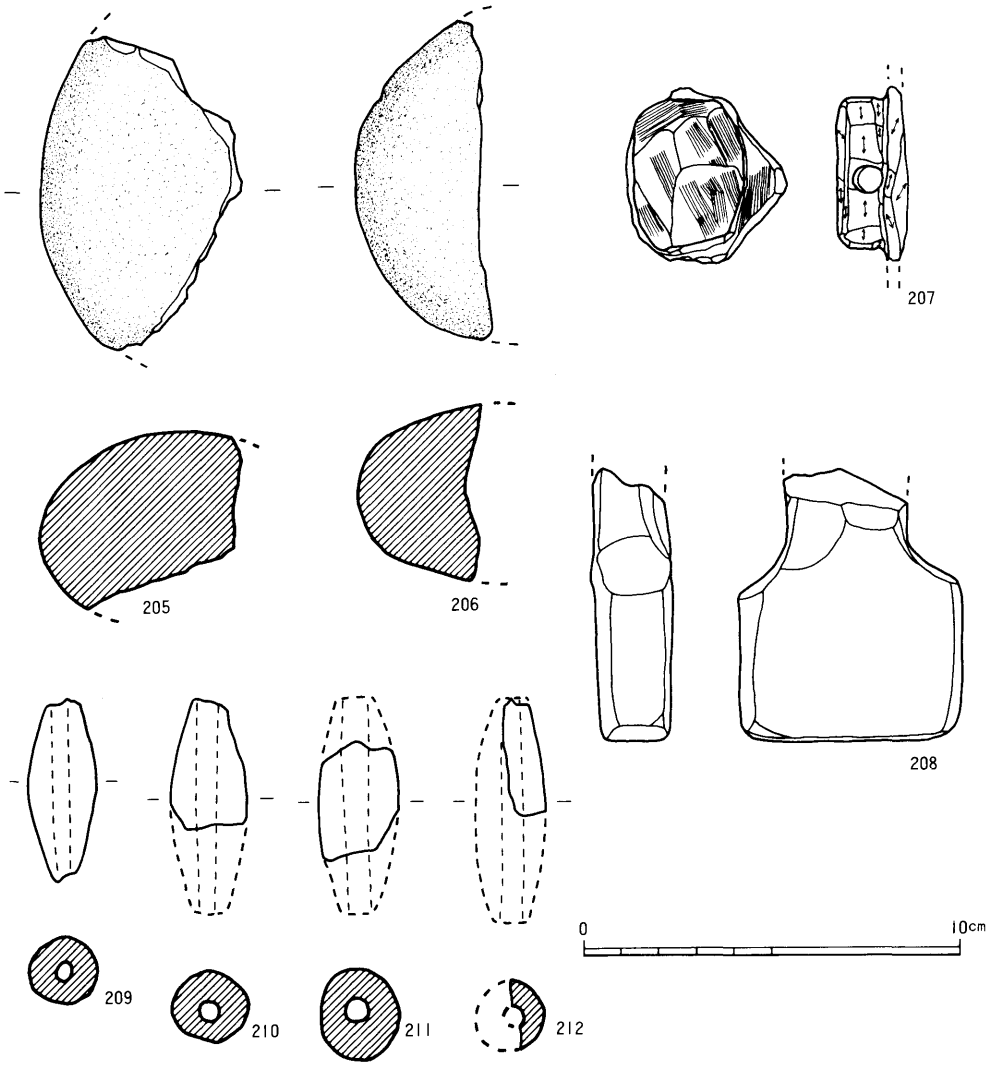


Fig. 35　第4層黒褐色粘質土出土遺物実測図（石器・土製品）

重量 126.5 g。199は太型蛤刃石斧の頭部。

打製石斧（Fig. 34　200～202）　いずれも扁平な緑色片岩を素材とするもので、土掘り具（打製石鍬）の可能性も考えられる。200は敲打による剥離が全周におよび現存器長 8.4 cm、器幅 4.5 cm、器厚 1.3 cm、重量 67.1 g。201は縁辺部にのみ敲打による丁寧な剥離作業を行う。現存器長 11.7 cm、器幅 5.2 cm、器厚 1.5 cm、重量 123.1 g。202 は頭部が傾斜する。正面下半部は節理面に沿って剥落している。敲打による剥離は粗雑。現存器長 11.8 cm、器

幅 5.5 cm、器厚 1.4 cm、重量 103.1 g。

砥石（Fig.34　203・204）　203は資料の上面にのみ砥面が認められる。砥面はわずかに凹面を呈するもののほぼ平坦で石質の粒子が細かく仕上げ砥と思われる。重量 146.3 g。204は楔形状を呈し、研砥は頭部を除いた全面におよんでいる。203 同様石質の粒子細かく仕上げ砥と考えられる。重量 38.8 g。

磨石（Fig.35　205・206）　欠損品のため凹石の可能性もある。いずれもやや扁平な河原石を素材とする。

石製品（Fig.35　ＰＬ21－(1)）

有孔鈕付石製品（207）　鈕は平面楕円形を呈し、扁平な体部との境には抉りをもつ。中央部よりやや下位に長側縁を貫通する穿孔がみられる。上面は平坦で長軸に斜行、側縁部は各側縁に平行する削りによって整形する。鈕は長径 4.0 cm、短径 2.0 cm、高さ 1.3 cm。孔径 0.7 cm。重量46.5 g。

土製品（Fig.35　ＰＬ21－(1)）

分銅形土製品（208）　正背両面に顔等の造出作業が認められず、穿孔も施されないことから下半部と推察される。小型品で下縁部の平坦な方形状を呈し、両上端部は側面からの指圧により弧状に抉れる。断面は背面が凸面をなすが正面は平坦。丹彩は認められない。現存長 7.2 cm、幅 5.9 cm、くりこみ部幅 3.3 cm、厚さ 2.0 cm。ナデ仕上げ。淡黄褐色で粗砂粒を多く含み、焼成は良好。

土錘（209～212）　紡錘形をなすものが 4 点出土した。209は小型品で胴部中位の屈曲部に最大径をもち、上下両端部径を大きく上まわる。長さ 4.8 cm、胴部最大径 1.8 cm、上端部径 0.9 cm、下端部径 0.6 cm、孔径 0.4 cm、重量11.6 g。209・211は灰褐色、210・212は乳白色を呈する。焼成はいずれも良好で、209・210は胎土に粗砂を多く含む。

第５層明灰色砂質土出土遺物（Fig.36　ＰＬ21－(4)）

弥生土器、土師器、須恵器が出土した。

弥生土器（７）

短く直線的に外反する壷の口縁部。口縁端部は丸くおさめる。外面横ナデ仕上げ、内面荒れのため調整不明。黒褐色を呈し、胎土、焼成とも良好。

土師器（１～６）

１は坏でゆるやかに大きく開き立ち上がる体部をもつものと思われる。体部外面横ナデ仕上げ、他は器面荒れのため調整不明。糸切り底。黄褐色を呈し、胎土、焼成ともやや不良。

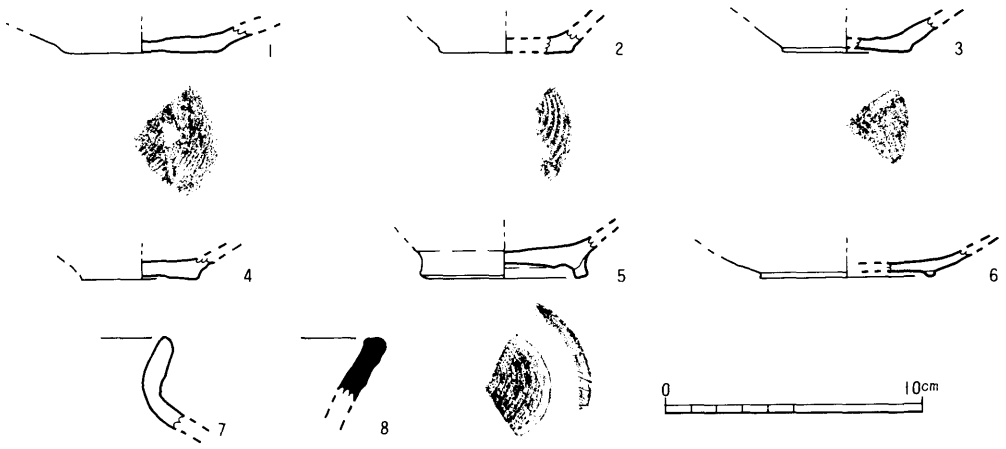


Fig.36　第５層明灰色砂質土出土遺物実測図
（弥生土器７　土師器１～６　須恵器８）

復原底径 6.0 cm、２～４は小皿。２・４は外面横ナデ、３は内面横ナデ仕上げ、他は器面荒れのため不明。２・３は糸切り底。いずれも濁黄褐色を呈し、２・４は胎土、焼成とも良好、３は不良。復原底径は２が 5.2 cm、３が 2.4 cm、４が 2.2 cm。５・６は椀の底部。５は底部と体部の境にわずかに外方へ開く断面長方形の高台を付す。接地面は高台内側端。内面ヘラ磨き、底部外面ナデ、他は横ナデ仕上げ。糸切り底。底部 6.0 cm、高台高 1.1 cm。６は貧弱な低い高台をもつ。調整不明。復原底径 6.7 cm、高台高 0.2 cm。５は内面黒色、外面赤褐色、６は灰褐色を呈し、胎土、焼成はいずれも良好。

須恵器（８）

甕の口縁部でシャープさを欠く。暗青灰色を呈し、胎土、焼成とも良好。

5　小　結

今回の調査では土壙、溝、旧河川跡、柱穴および３層にわたる遺物包含層を検出した。

土壙は５基検出したが不整形で浅いものが多い。また、各土壙からの出土遺物には各時期のものが混在し時期はにわかに決定し難い。

溝は弥生時代後期のものから近～現代のものまで７条を検出した。近～現代のものを除いていずれも東西方向に流路をもち、特に溝ＳＤ３は幅 2.6 ～ 4.4 m と他の溝と規模が異なり、後述する旧河川跡堆積土中に溝ＳＤ３覆土と同一層が認められることから旧河川跡と一時期併存し機能していた可能性が指摘できる。しかし、溝ＳＤ３水口付近にしがらみ

状ないしは堰状の構造物は検出されなかった。

旧河川跡は調査区中央部を南東から北西へ貫流し、川床には古墳時代前期前葉を上限とする杭列および時期不明の杭列の少くとも二時期にわたるものと思われる杭列が認められた。学内では旧河川跡は吉田遺跡調査団の呼称する第Ⅳ地区の南区で縄文時代晩期を上限とするものが、また、昭和56年度に実施した教育学部構内Ｊ－19・20区の調査[5]で弥生時代前期を上限とし古墳時代前期前半まで機能していたものが検出されており、いずれも南ないしは南東から北ないしは北西へ流路をもつものである。なお、昭和54年度に実施した本部構内Ｌ－14区の調査では調査区南西隅において北東から南西へ地山が急激に下降しており、今回検出した旧河川跡の河道は集落内における日常生活および生産活動と不離密接な有機関係を保ちつつ、こうした丘陵縁辺下の小規模な谷あいをキャンパス北方に所在する九田川ないしは椹野川方面へと貫流していたものと推察される。

遺物包含層はいずれも弥生時代から鎌倉時代の各時期の遺物が混在し、周辺地域にこの期の集落が存在することを示唆するが、竪穴住居跡は現在までにわずかに弥生時代中期および古墳時代のものが検出されているにすぎない。また、自然科学分野の調査として調査区二カ所で実施したプラント・オパール分析の結果、三層に及ぶ遺物包含層はいずれも乾燥した土壌条件における水田である可能性を示していることが判明し、畦畔は後世における水田上層の削平により消失しているものと推察された。構内遺跡においても生産の場は花粉分析等を含めた自然科学分野の調査との関連によって今後追求すべきであり、その前提として各時期の詳細な集落分布を早急に把握する必要があろう。

包含層出土遺物には弥生土器、須恵器、土師器、黒色土器、輸入陶磁器、瓦質土器、石器、石製品、土製品等があり、注目すべき資料も少くない。

弥生土器は前期から後期まで各時期のものが出土している。

須恵器は第３・４層を中心に出土し坏、盤、皿、高坏、甕、壷、器台があるが、坏の出土量が多い。坏身は高台を貼付するものが大半を占め、断面台形ないしは長方形の高台を底部と体部の境より内側に付するものと底部と体部の境付近に付するものとがある。いずれにも高台が外方へ開くものと垂直に下降するものとが存在し、わずかに前者において外方へ開く高台をもつものが多い。坏身にはこのほかに蓋受けのかえりをもつものも混在する。坏蓋は口縁部が屈曲して内傾するもの、扁平な天井部をもち口縁部が鳥嘴状になるものおよび肥厚して丸く終るものの他に内傾する身受けのかえりをもつものもある。撮は極めて扁平で頂部が平坦なもの、中窪みのもの、中央部が肥厚するものの三種があるが、

撮をもたない資料も出土している。高坏は脚裾部で急激に開いて端部を内側に折り曲げるものおよび脚端部を上下にわずかに拡張させる短脚のものがみられ、坏部は平担な底部に屈曲して開く体部をもつものがある。

以上のように須恵器は6世紀中葉から9世紀代にかけての遺物が混在するが、8世紀代の資料が圧倒的に多い。なお、注目すべき資料として焼成時に窯内の熔化した側壁が付着した甕ないしは壷の胴部が第4層から出土している[6]（ＰＬ21－(2)）。こうした資料は窯周辺、とりわけ灰原等から出土する事例が多く、本調査区北方を中心とした丘陵縁辺部に8世紀代の須恵器の窯跡が存在する可能性を示唆するものである[7]。防長における須恵器生産の朋芽は小野田須恵窯跡の6世紀後半にみられ、様々な政治的、社会的、経済的要請をモメントに地方窯として展開するが、吉敷郡内における須恵器生産は本構内遺跡と標高300～400ｍの山口山地を隔てて約6㎞南西に位置する陶窯跡群[8]が知られているにすぎない。陶窯跡群は谷を臨む丘陵斜面に立地し、谷筋を単位とする数支群によって構成されており、操業期間は8世紀代から9世紀後半、下っても10世紀初頭頃と考えられる[9]。また、胎土分析の結果、周防鋳銭司、周防国府国庁に須恵器を供給していたことが判明しており[10]、胎土分析等自然科学分野の検討を行うべきことはいうまでもないが、本調書区周辺に包含層中において量的に大きなウエイトを占める8世紀代の窯跡が存在するとすれば、陶窯跡群同様、特定官衛等に須恵器を供給していた可能性は十分に予想され、政治機構による掌握力の差異によって五反地遺跡[11]等周辺諸遺跡への供給の可能性も提起されるであろう。

歴史時代の土師器は第4層を中心に坏、椀、小皿、台付皿等が出土したが全形を知りうるものは少い。坏はヘラ切りのものと糸切りのものとがあり、前者は9世紀後半に位置づけられるものであるが量は少ない。椀は出土量が多くいずれも糸切り底である。高台は断面が長方形に近くやや高いものも存在するが、大半は断面台形ないしは三角形を呈し退化したものである。内面にヘラ磨きを施すものも数点ある。また、坏ないしは椀の体部～口縁部の資料には内彎して開く体部に口縁部がわずかに外反するものとそのまま開くものとがあり、底部と共に11世紀～13世紀前半に比定される。皿はすべて糸切りで11世紀代のものが出土している。

輸入陶磁器は白磁Ⅳ、Ⅴ、Ⅷ類に加え青磁が出土したが量は少なく、時期的にはおおむね土師器の年代幅の中に収まるものと考えられる。

石器には扁平打製石斧、太型蛤刃石斧、磨石の他、縄文系磨製石斧の再研磨品がある。

このほかに注目すべき遺物として美濃ケ浜式土器、分銅形土製品があげられる。出土し

た美濃ケ浜式土器は短い脚部をもつもので、近藤義郎氏のいう美濃ケ浜2類[12]に相当する。防長における内陸部での美濃ケ浜式土器の出土例は本遺跡同様椹野川流域の下東遺跡[13]、毛割遺跡[14]にみられる。下東遺跡では7世紀代の竪穴住居跡から2類、6世紀後半～7世紀代の須恵器を伴出する包含層中より2・3類が出土している。前者は滑石製紡錘車4点、後者は手捏ね土器2点、滑石製紡錘車3点、管玉1点を共伴する。毛割遺跡では13・14号竪穴住居跡より2類ないしは3類と思われるものが出土し、13号竪穴住居跡からは滑石製紡錘車1点、碧玉製管玉1点を伴出している。

上記各遺跡は内陸部での製塩土器の出土例が知られる河内船橋遺跡[15]、大和布留遺跡[16]等をはじめとする幾内諸遺跡および中国山地の松ケ迫遺跡[17]、備後西江遺跡[18]等の各遺跡同様いずれもその地域の中核的集落を形成していたものと思われ、内陸部消費地での需要に対応して製塩遺跡において散状塩として生産されたものが製塩土器あるいは別の容器に入れられた状態で搬入され、集落内で焼き塩に再生産されたものと考えられる[19]。すなわち、内陸部での出土例がピークに達すると思われる6世紀後半ないしは7世紀から幾内で確認されている9世紀にかけて内陸部（消費地）で出土する製塩土器は主として生産地からの運搬用、消費地での貯蔵用として機能していたものと推定される[20]。このことは内陸部で出土例のなかにしばしば二次的な火熱を受けたものがみられ、灰や炭を伴う事例もあることが傍証としてあげられるが、その際、伴出する滑石製模造品あるいは土製品等を使用した再生産にかかる祭祀、もしくは再生産された塩を用いた祭祀が集落内で行なわれたものと推察され、消費地での需要を背景にした流通・消費過程の把握に貴重な資料を提供した。

分銅形土製品はその分布の中心地域である備前、備中のものと異なり、島田川流域[21]および井上山遺跡[22]等でみられる方形状を呈する小形品で、その形状は調整等から推して弥生時代後期のものと考えられ、本例の西限を示す資料である。

以上述べてきたように、今回の調査では弥生時代前期から鎌倉時代前半の遺構、遺物が明らかとなり、その内容も多岐にわたっている。しかし、これらの遺物をもたらしたと考えられる同時期の遺構の分布は、上述したように断片的な発掘調査により本調査区至近地域、とりわけ北方丘陵地域で検出されている住居跡、溝、土壙等で散見しうるのみで、未だ十分に把握されていないのが現状である。したがって、県内において稀有な資料を内包しつつキャンパス北部に営まれた集落の生産、消費領域を規定する占地、時期、規模、住居単位等解明の一手段として周辺地域の徹底調査によるデータの収積が急務であろうと思われる。

小　　結

注)

1)　山口大学埋蔵文化財資料館　「山口大学構内遺跡調査研究年報　Ⅰ」　山口大学　1982

2) a　小野忠凞　「山口大学構内遺跡」　『考古学ジャーナル』　第9号　1967

b　〃　「山口大学構内吉田遺跡の性格」『学園だより』　山口大学　1970

c　山口大学吉田遺跡調査団「山口大学構内吉田遺跡発掘調査概報」　山口大学　1976

3)　横田賢次郎・森田勉　「太宰府出土の中国輸入陶磁器について」　『九州歴史資料館研究論集』4　1978

以下、輸入陶磁器は上記の分類に従う。

4) a　近藤義郎　「土器製塩の盛行と衰退」　『日本塩業大系　古代・中世』　日本専売公社　1980

b　〃　「土器製塩の研究」　青木書店　1984

5)　前掲書　1)

6)　器表、断面を観察すると二次焼成痕が認められず、焼き台とは考えにくい。

7)　本構内丘陵の基盤は花崗岩バイラン土で陶窯跡群と同様な立地条件下にある。

山口県立博物館　「山口県の地質」　1975

8) a　小郡町史編集委員会　『小郡町史』　小郡町　1979

b　山口県教育委員会　「生産遺跡分布調査報告書　窯業」　山口県埋蔵文化財調査報告第74集　1983

9)　桑原邦彦、池田善文　「防長地域の須恵器窯跡と編年研究」　『山口県の土師器・須恵器 ― 集成と編年 ― 』　周陽考古学研究所　1981

10)　前掲書　8) b

11)　山口県教育委員会　「堂道・五反地遺跡」　山口県埋蔵文化財調査報告第22集　1973

12)　前掲書　4)

13)　山口県教育委員会　「下東遺跡・荻峠遺跡」　山口県埋蔵文化財調査報告第30集　1975

14)　毛割遺跡出土遺物については山口市歴史民俗資料館小田村宏氏より御教心を得た。

山口市教育委員会　「毛割遺跡」　山口市埋蔵文化財調査報告第18集　1983

15)　原口正三他　「船橋」　Ⅰ　平安学園考古クラブ　1972

16)　布留遺跡範囲確認調査会　「布留遺跡範囲確認調査報告書」　1979

17)　広島県教育委員会・㈶広島県埋蔵文化財調査センター　「松ケ迫遺跡群発掘調査報告」　1983

18)　岡山県教育委員会　「西江遺跡」　岡山県埋蔵文化財調書報告第20集　1977

19)　前掲書　4) a, b

20) a　岩本正二　「製塩土器の分布と流通」　『考古学研究』　106号　1980

b　岩本正二　「7～9世紀の土器製塩」　『文化財論叢』　1982

21)　山口大学島田川遺跡学術調査団　「島田川」　山口大学　1953

22)　井上山遺跡発掘調査団　「井上山」　1979

第３章　大学会館新営予定地Ｍ－14・15区の試掘調査

調査地区　本部構内　Ｍ－14・15区（Fig.37　ＰＬ１－44）

調査期間　昭和58年12月13日～12月28日

調査方法　新営予定地東半部に設定した３カ所のトレンチによる試掘

調査面積　約130㎡

調査結果　竪穴住居跡、溝、土壙、柱穴を検出した（Fig.38)。第１トレンチにおける層順は上位から第１層：表土（腐触土および構内造成時等の置土）、第２層：淡黄橙色土層、第３層：淡褐色粘質土層・第４層：鉄分含む黒褐色土層、第５層：暗褐色粘質土層となっており、現地表下約55㎝で第６層：黄褐色粘質土層の地山が確認された。第２、４層は厚さそれぞれ８、２㎝で無遺物層、第３、５層はそれぞれ15、20㎝の厚さをもつ弥生時代から中世の遺物包含層である。検出した遺構には竪穴住居跡１基、溝１条、柱穴、不明遺構がある。竪穴住居跡は壁溝を有するもので一辺約５ｍの平面形態方形になるものと思われ、検出面より深さ20㎝の規模をもつ。検出時に上面より弥生時代後期の遺物が出土した。溝は灰褐色土を覆土とするもので中世に下るものであろう。また、不明遺構は部分的にしか検出していないが竪穴住居跡である可能性が強い。

第１・２両トレンチでは厚さそれぞれ30、50㎝の第１層直下が第６層（地山）となっており、遺物包含層は確

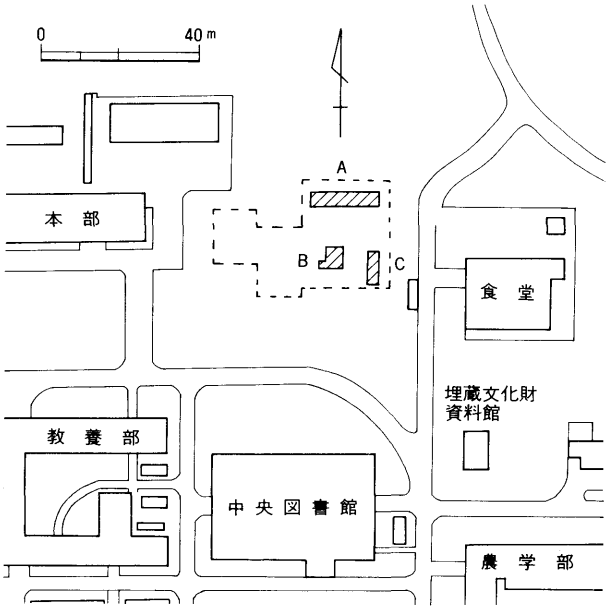


Fig.37　調査区位置図（2500分の１）

認できなかった。

第2トレンチでは後世の削平により地山が西半部において階段状に約30cm低くなっている。遺構は切り合い関係から暗褐色粘質土および灰褐色土を覆土とする少くとも二時期のものがあり、前者には土壙2基、柱穴、後者には溝2条、柱穴がある。

また、第3トレンチ中央部と第1トレンチ南端部にみられる北から南への落ち込みは構内造成時における削平によるもので、Cトレンチで検出された暗褐色粘質土を覆土とする幅1.1m、深さ10cmの溝は南への延長部を消失している。

なお、昭和56年度に実施した本部構内L－14区の調査で本調査区周辺地域では地山が東から西へゆるやかに下降することが確認されており、第1トレンチにおいて遺物包含層の堆積が認められたことは新営予定地西半部においてさらに良好な状態で遺構が検出される可能性を示唆し、今後の詳細な調査が期待される。

今回の調査で検出した遺構はその存在の確認にとどめ学内の全面的な理解・協力によって現地保存の措置が講ぜられたことを付記しておく。

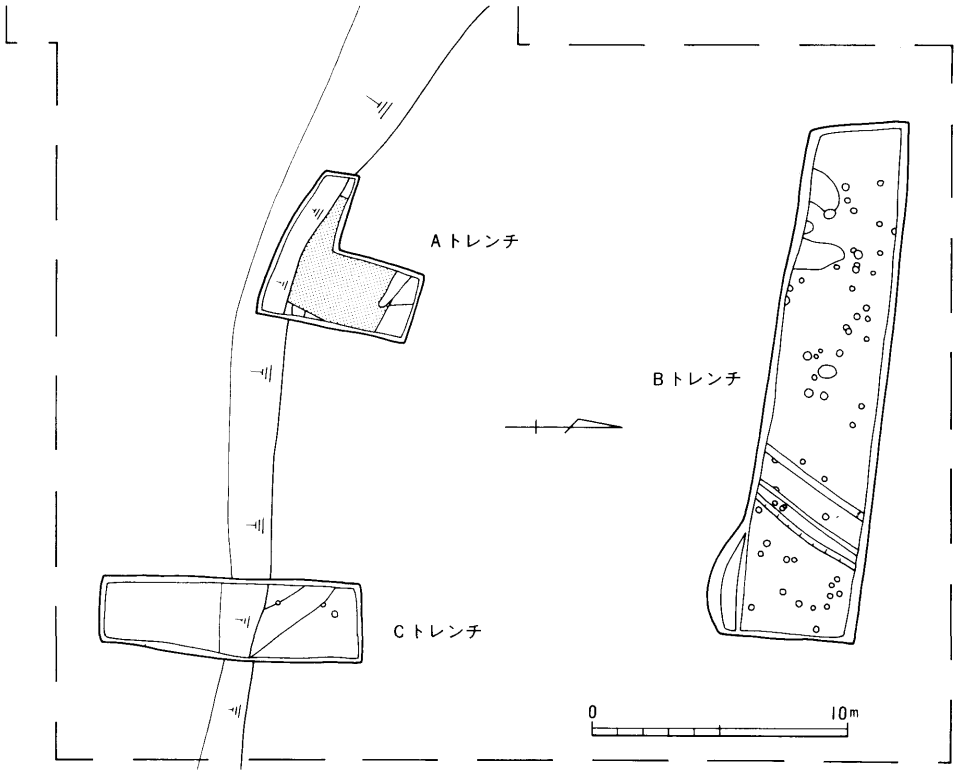


Fig.38　遺構配置図（300分の1）

第４章　昭和57年度山口大学構内の立会調査

１　教育学部附属養護学校プール新営に伴う立会調査

調査地区　教育学部構内　Ｂ－22区（Fig.39　ＰＬ１　－ 45）

調査期間　昭和58年２月７日、２月14日

調査方法　工事施工時における立会

調査面積　約880㎡

調査結果　養護学校キャンパス内は昭和54年度に試掘調査が実施されており、キャンパス北西隅から体育館北東方、すなわち、Ａ－22区からＢ－21区にかけての地域では東西に走る弥生時代から古墳時代の溝２条および平安時代から中世の掘立柱建物跡が検出されている。上記の結果を踏まえ、当初予定されていたＡ－22区での新営計画は、試掘調査により顕著な遺物、遺構が認められなかった体育館西方に変更されることとなり、立会調査を実施した。現地表面下約60cmまでは表土（腐触土および構内造成時等の置土）でその下部に厚さ約10cmの旧耕土が認められる。続いて厚さ約40～60cmの黒灰色粘土層、30cm以上の厚さをもつ青灰色粘土層（地山）が堆積するが顕著な遺物、遺構は認められなかった。

黒灰色粘土層は中高等部棟以南の地域においても確認されており、調査区以南の地域は少くとも弥生時代以降低混地化しており湿潤な条件下にあったものと推察される。

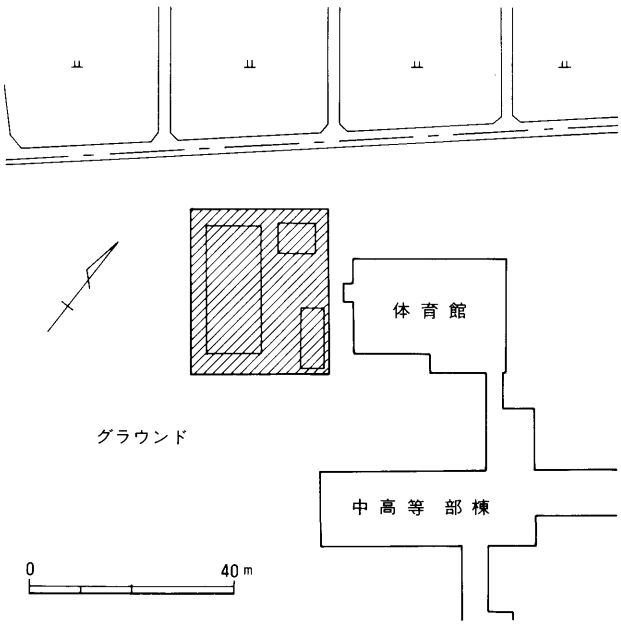


Fig.39　調査区位置図（1500分の１）

2　理学部放射性同位元素総合実験室排水桝新営に伴う立会調査

調査地区　理学部構内O－18区（Fig.40　PL 1－46）

調査期間　昭和58年3月12日

調査方法　工事施工時における立会

調査面積　約2㎡

調査結果　環境整備に伴う掘削は現地表下75㎝に及ぶが、掘削深度内にには構内造成時等の置土が堆積しており、遺物包含層、遺構は未検出であった。

昭和54年度に実施した農学部動物舎新営に伴う発掘調査（PL 1－25）、および昭和55年度に実施した農学部解剖棟周辺環境整備に伴う立会調査（PL 1－30）では、厚さそれぞれ60～110㎝、60～140㎝の表土直下が前者は黄褐色粘質土、後者は青灰色粘土の地山となっており、遺物、遺構は確認されなかった。こうした状況は、調査区周辺地域が東側の農園（牧草地）から比高差にして約5m低くなっており、東から西に延びる古墳時代の竪穴住居跡や古代から中世の柱穴群の埋存する低丘陵が、北東－南西に貫通する循環道路付近で大規模に削平を受けた結果、埋存の予想される遺物包含層、遺構がすでに消失している可能性を示唆する。

したがって、調査区周辺地域、特に理学部構内をはじめとして農学部、人文学部両構内において、この低丘陵の削平範囲を試掘調査等により確認することによってキャンパス中央部付近における遺物包含層、遺構分布のあり方をより明確に把握する必要があろう。

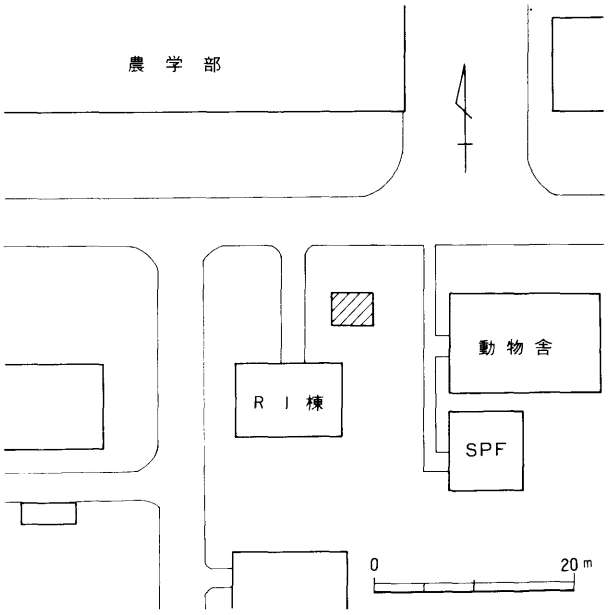


Fig.40　調査区位置図（750分の1）

3　教養部環境整備に伴う立会調査

調査地区　教養部構内　J・K－16区　K・L－17区（Fig.41　PL 1－47）

調査期間　昭和58年2月21日　3月7日　3月18日

調査方法　工事施工時における立会

調査面積　A区約150㎡　B区約10㎡

調査結果　A区においては植栽に付随する幅約80cm、長さ12～26mの暗渠9ケ所、B区においては自転車置場昇降口3カ所の掘削に伴い調査を実施した。

工事に伴う掘削はA区では現地表下70cm、B区では現地表下25cmまでであったが、掘削深度内にはいずれも構内造成時等の置土が認められ、遺物包含層、遺構は未検出であった。

教養部構内では昭和56年度擁壁工事に伴う立会調査（PL 1－37)の際、弥生時代から古墳時代にかけてのものと思われる東西に走る幅130cmの溝が1条検出されている。その埋存相対深度はA区現地表面下約1mにあたり、A・B両区内においても今後、工事等に伴う掘削によって関連遺構が検出される可能性は十分に予想され、遺構の分布範囲の確認が当面の課題となろう。

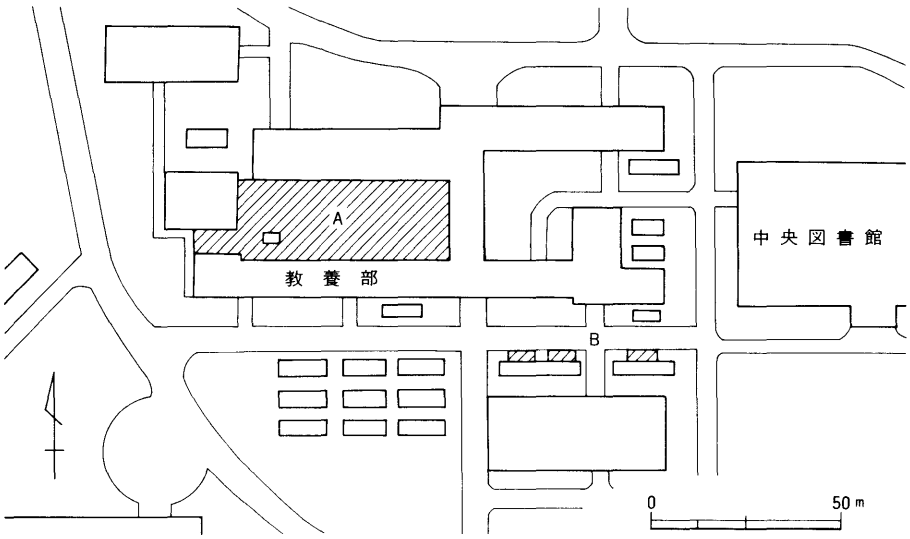


Fig.41　調査区位置図（2000分の1）

第5章　付　　篇

1　中央図書館増築予定地M－16区におけるPlant Opal分析

宮崎大学農学部　藤原　宏志

1　分析試料

試料採取

分析試料は調査区東壁において10層9試料、南壁東隅において7層8試料、計17点の分析用土壌試料を採取した。東壁は溝状遺構が掘り込まれているため南壁東隅に重点を置きその試料採取地点の土柱図をFig.43に示した。

分析法

試料の分析はプラント・オパール定量分析法（ガラス・ビーズ法）の定法に拠った。Fig.42に同法のフローを示した。

2　分析結果

東壁は溝状地形で直接水田に関係するかどうか判然としかねる場所であり、一方、南壁は安定した堆積層序を示し、水田の存在した可能性が考えられる状況であった。

分析の結果、予想されたとおり東壁は溝状地形の特徴を、南壁は水田の特徴を示すイネ科植生分布が認められた。ここでは特に問題となる南壁の分析結果をFig.44に図示しておく。

3　考　察

1. 1～5層には2 t／10a・cm程度の乾物籾生産量に対応するイネ機動細胞プラント・オパールが検出された。この量からみて5層までは水田が営まれていたと判断される。
2. 畦畔遺構が検出されなかったのは後代に水田上層が削平されたためと思われる。
3. 6層まではタケ亜科（ササ）が多く、調査区域周辺は低湿地化しておらず、比較的乾燥した土壌条件下にあったものと思われる。
4. 7層にはイネ科植物は全く認められなかった。

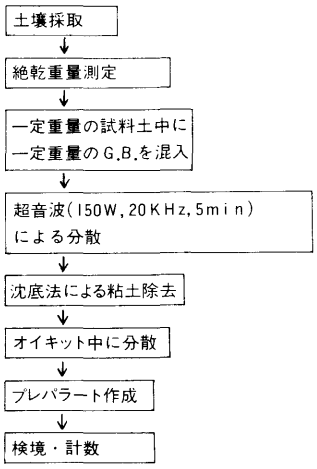


Fig. 42　ガラスビーズ法によるプラント・オパール定量分析ダイアグラム

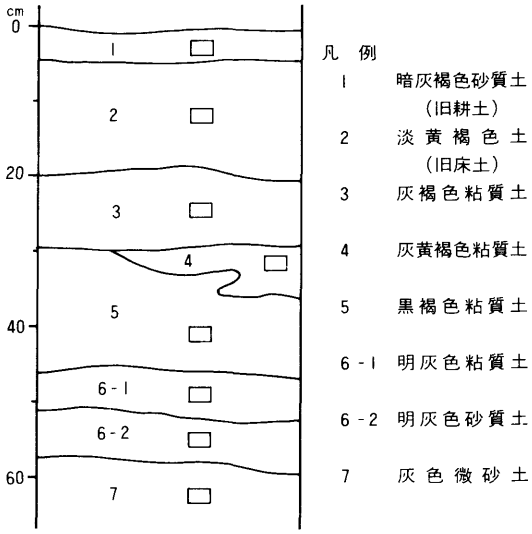


Fig. 43　南壁東隅における
プラント・オパール分析試料採取柱状図

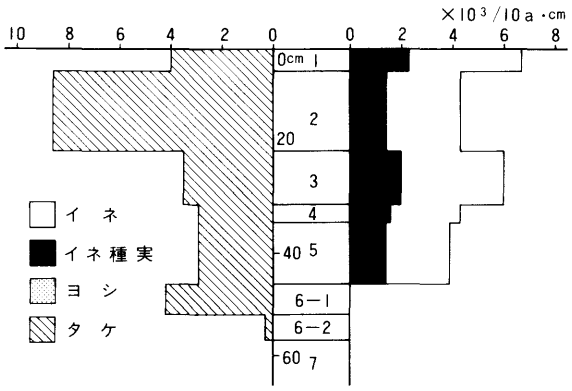


Fig. 44　南壁東隅におけるイネ科植物生産量の推定

2　防長における古代～中世の土器

河　村　　吉　行

近年、防長地域における古代～中世の土器編年は調査例の増加と呼応して秋根遺跡[1]、下右田遺跡[2]等各遺跡単位で試みられているが、実年代を示す良好な共伴資料に恵まれないこともあって編年観に混乱を生じているのが現状である。本稿では秋根遺跡を中心に周辺諸遺跡における共通項を援用し、防長における土師器の時間的先後関係について概括的に述べてみたい。

奈良時代のものは、周防国衙[3]、長門国府[4]、長門国分寺[5]等で散見される。Ｉ－１－ａ段階のものは周防国衙木船2062の２番地（厨屋地区）の溝から出土したものがあげられ土師器坏、皿、椀、甕、高坏が須恵器と伴出している。このうち皿（19）は体部状内彎ぎみに外方へ立ち上がり口縁部を軽く内側に巻き込むもので、伴出する高坏は外面をヘラ削りし内面には少くとも２段に螺旋暗文と放射線暗文が施されている。このタイプは平城宮ＳＤ485[6]の高坏と形態的に類似し、内面螺旋暗文＋放射線暗文＋連弧暗文が一般化する前段階のものと考えられ、皿とともに８世紀前半に位置づけることができる。また、長門国分寺国分寺地区ＬＸ101（ＸＩ$_2$層）出土の高坏はＳＤ1900Ａ[7]に類例がみられ内面暗文もＳＤ1900Ａ出土のものと同一である。Ｉ－１－ｂ段階は長門国府54年度調査の坏(1)で形態的にも平城宮ＳＫ820[9]出土の坏に特徴的な口縁端部をまるく肥厚させ、端部内面に一条の凹線がめぐる程度である。また、内外面とも横ナデ調整を施し、ヘラ磨き、削り等は認められない。従って、ここではＳＢ116との中間形態とし８世紀中頃～後半におくことにする。Ｉ－１－ｃ段階はやや器高が高く、口縁端部をつまみ上げ口唇部外面が凹面になる周防国衙例（２、20）があげられる。これは平城宮ＳＢ116[8]と同一の手法によるもので、８世紀末～９世紀初頭のものと考えられる。

９世紀から13世紀までは秋根遺跡出土遺物により編年を行うことが可能である。秋根遺跡の土師器の編年は平安時代をⅣ１～Ⅳ４、鎌倉・室町時代をⅤ１、２の各様式に分類して編年を行っている[10]が、各様式とも形態、手法、法量、共伴関係により細分が可能で本稿では秋根の各様式を細分することによって各様式相互あるいは一様式内の時間的先後関係[11]について検討してみたい。以下、各段階について述べることにする。

１－２（秋根Ⅳ－１）

底部の切り離しがヘラ切り手法によるもの

Ⅰ－2－a

資料数は少い。

坏は体部の立ち上がりが急角度で直線的に開くもので、口縁部は外反せず端部が尖る。底部と体部の境は明瞭で、底部内面をヘラ削りするものが多い。磨きは認められず、横ナデで仕上げる。胎土精良、焼成良好なものが多い。口径 11.6～12.7 cm、器高 3.9～4.7 cm、底径 7.2～8.0[12] cm前後である。

皿は坏同様体部が直線的に開き、口縁部は尖りぎみに終わる。横ナデ調整。21は口径 13.7 cm、器高 2.5 cm、底径 8.3 cmでO－ XIX ＬD 061出土。

この期の椀は出土していない。

Ⅰ－2－b

坏はQ－XⅦ ＬK 084のものがこれにあたり、Ⅰ－2－a同様ヘラ切り底であるが、体部が内彎ぎみに立ち上がり、口縁部が外反する。器形的には須恵器の坏とほとんどかわりない。Ⅰ－2－aに比べ胎土が粗い。口径 13.2～13.3 cm、器高 4.3～4.7cm、底径6.1～7.0 cm前後。

皿は底部と体部の境が不明瞭で口縁部が外反する。Ⅰ－2－aに比べ法量的変化は小さい。22は口径 14.4 cm、器高 2.4 cm、底径 8.2 cmで O－XIX ＬD 061 出土。坏、皿とも横ナデ仕上げ。

この段階においても椀はみられない。

Ⅱ－1（秋根Ⅳ－2）

この期の最大の特徴は糸切り手法の導入である。

Ⅱ－1－a

坏は器形的にはⅠ－2－cと変わるところはないが口径 13.3～14.6 cm、器高 4.1～4.7 cm、底径 5.4～7.1 cmで口径に比べ底径が小さくなる傾向がある。

皿も器高的にはⅠ－2－cと変わるところがなく、体部は内彎ぎみに開き、口縁部は外反する。口縁端部は丸くおさめている。23は口径 14.1 cm、器高 2.3 cm、底径 7.4 cmとやや小ぶりになる。坏、皿とも横ナデ仕上げ。

椀はみられない。

Ⅱ－1－b

坏は内彎して立ち上がる。体部中位から屈曲して大きく外反する。口縁端部は尖りぎみに終わる。口径 13.1 cm、器高 3.8～3.9 cm、底径 6.4～6.5 cm前後。6は口径 13.1 cm、器

高 3.8 cm、底径 6.5 cm。

皿は体部の内彎度および口縁部の外反度が大きくなる。口縁端部は尖りぎみに終わる。24は口径 14.6 cm、器高 2.3 cm、底径 7.5 cm。

埦はＬＫ 051 のものがこの期にあたるものと思われる。体部中位付近からわずかに外反して開く。40は口径 15.2 cm、器高 5.9 cm、底径 7.4 cm、高台高 1.0 cm。

坏、皿、埦とも横ナデ仕上げ。

Ⅱ－１－c

Ｏ－XX　ＬＫ 034 のものがこれにあたる。

坏は内彎して開く体部に外反する口縁部をもつ。口縁端部は尖りぎみのものと丸く終わるものとがある。口径 12.8 ～ 13.3 cm、器高 3.7 ～ 4.2 cm、底径 6.5 ～ 6.8 cm前後。

皿はⅡ－１－ｂに比べ形態的変化に乏しいが、口縁部が短く外反し、口径、底径とも小さくなる。口径 13 6.～ 14.2 cm、器高 7.1 ～ 7.4 cm、底径 2.1 ～ 2.2 cm前後。

埦は直線的に開く体部に軽く外反する口縁部をもつもので高台は細長く外方へ開く。口径14.4 ～ 15.1 cm、器高 5.1 ～ 5.3 cm、高台径 7.3 ～ 7.8 cm、高台高はいずれも 0.7 cm。

坏、皿、埦とも横ナデ仕上げ。

Ⅱ－１－d

Ｏ－XX　ＬＫ036のものがこれにあたる。

坏はわずかに内彎して開く体部をもつもので、口縁部は外反ぎみに終わるものと体部から直線的に開いて肥厚ぎみないしはそのまま丸く終わるものとがある。口径 13.8～16.0 cm、器高 4.6 ～ 6.0 cm、底径 5.7 ～ 7.0 cm前後で法量にバラツキが認められる。

皿はこの段階で小形のものばかりとなり、口径は 9.4 ～ 9.8 前後とまとまりがみられるが口径に対する器高の高低により、器高 2.6 cm前後で埦の小形化した小皿ａと器高 2.0 cm弱で体部が直線的に大きく開き口縁部の外反する小皿ｂに分化する。27は口径 9 8.cm、器高 1.8 cm、底径 4.6 cm。14は口径 9.4 cm、器高 2.6 cm、底径 4.4 cm。

埦は体部が内彎して開き、口縁部の外反度は大きい。しっかりした高台はⅡ－１－ｂ、ｃ同様外方へ開く。42は口径 15.2 cm、器高 6.4 cm、高台径 7.2 cm。

坏、皿、埦とも横ナデ仕上げ。

Ⅱ－２（秋根Ⅳ－３）

資料数が少い。

坏の体部は大きく内彎して開き、口縁部は軽く外反する。口径に対して器高が低くなる。

9は口径15.2㎝、器高4.8㎝、底径6.2㎝。

小Ⅲaは Ⅱ－1－dの系譜を引くものである。口径9.4～10.1㎝、器高2.4～2.7㎝、底径4.6～5.0㎝前後。小Ⅲb、埦はⅡ－2－a、bに細分されよう。

小Ⅲbは小Ⅲa同様Ⅱ－1－dの系譜を引くもので体部は直線的に開き口縁部は尖りぎみに終わる。29は口径8.2㎝、器高1.6㎝、底径4.2㎝。Q－XⅥ　ＬＧ019出土。31は体部が内彎ぎみに大きく開き、口径に比べ器高が低くなる傾向がある。口径9.2㎝、器高1.5㎝、底径5.6㎝。O－XⅨ　ＬＢ050出土。

この期以降の埦は高台の形状、高さ、口縁部の外反度によって時間的先後関係がとらえられ、下右田遺跡[13]、鋳銭司大歳遺跡14号建物[14]、後出するⅡ－3にみられるように高台の断面形が三角形に近くなるにつれて高台高を減じ、口縁部の外反度が弱くなり、最終的には体部からそのまま開くようになる。したがって高台が低く口縁部がわずかに外反するＬＢ050の44に先行するものとして山口大学構内中央図書館増築予定地溝ＳＤ３のものおよび、堂道遺跡２号井戸出土のもの[15]があげられる。43は口径15.6㎝、器高6.2㎝、底径6.1㎝。44は口径14.8㎝、器高5.2㎝、底径6.5㎝。坏、Ⅲ、埦とも横ナデ仕上げ。

Ⅱ－3（秋根Ⅳ－4）

Ⅱ－3－a

P－XⅧ　ＬＤ105、Q－XⅦ　ＬＧ034のものが該当する。

坏はⅡ－2に比べ体部の内彎度が小さくなり器高も低くなる。また、口縁部は外反せず体部からそのまま開くようになる。口径13.4～14.2㎝、器高3.9～4.1㎝、底径6.1～7.0㎝前後のものが多い。

Ⅲは、ほとんど小Ⅲbのみとなり底部と体部の境が不明瞭となる。体部は直線的に開くものと内彎しながら開くものとがある。口径7.9～9.0㎝、器高1.2～2.1㎝前後でⅡ－2に比べ口径が小さくなる。

埦は高台が退化し断面三角形となり、口縁部の外反は目立たないほどになる。口径15.0～15.9㎝、器高5.2～6.0㎝、底径5.1～7.3㎝前後。

坏、Ⅲ、埦とも横ナデ調整。

Ⅱ－3－b

坏はⅡ－3－aに比べ体部が直線に近く開くP－XⅥ　ＬＫ045のものがこれにあたる。11は口径14.1㎝、器高4.0㎝、底径7.2㎝。横ナデ仕上げ。

埦、ⅢはⅡ－3－aとⅡ－4－bの間に入るものとして、Ⅱ－3－aに比べ高台の退化

した底径の小さいものがこの期にあたると思われるが確認していない。

Ⅱ－4－b（秋根Ⅴ－1）

M－XⅦ　LW002出土のものがこれにあたる。

坏は口径、器高ともに減じ小形化する。底部と体部の境が不明瞭となり、体部は内彎ぎみに開くがほぼ直線的で口縁端部は尖るものが多い。12は口径11.4㎝、器高3.3㎝、底径7.7㎝。

皿は口径7.3㎝、器高1.5㎝前後で形態的には変化に乏しいが、器高を減じ、底部周縁をつまみ上げただけのものが出現する。

埦はⅡ－3－aに比べ高台のさらに退化した高台径の小さいものがこの期に入るであろうが確認していない。

坏、皿とも横ナデ仕上げ。

Ⅱ－4－c

鋳銭司大歳遺跡14号建物[16]出土のものがこの段階にあたる。

坏は薄手で体部が直線的に開くようになり口径に対して底径が小さくなる。口径11.4㎝、器高3.5～3.9㎝、底径5.0㎝前後で器高指数34[17]前後である。

皿はいずれも底部の周縁を直線的ないしは内彎ぎみにつまみあげただけのもので、口径6.9～7.1、器高0.9～0.7㎝、底径6.1～6.4㎝と法量的に小さくなり作りも粗雑になる。

埦は極めて退化した高台をもつもので、体部は内彎して開く。46は口径15.5㎝、器高5.7㎝、底径4.4㎝、

坏、皿、埦とも横ナデ仕上げ。

Ⅱ－5

坏は薄手のもので堂道遺跡C地区包含層[18]および大内氏館跡53年度調査1号土壙[19]のものがこの時期にあたる。口径11.5～14.0㎝、器高2.5～3.2㎝、底径5.0～6.5㎝前後で器高指数22～24。体部がほぼ直線的に開くものと、やや内彎ぎみに開くものとがあるが現段階では時期差か形態差か、にわかに決定しがたい。口縁部は尖りぎみに終わるものが多い。

皿は大内氏館跡13号土壙[20]のもの。口径7.3㎝、器高1.0～2.0㎝、底径4.0～5.0㎝前後の薄手のもので、口径に比べ器高が高い。

坏、皿ともナデ調整で粗雑。

Ⅱ－6

玉祖遺跡Ⅰ地区5号墓[21]、朝田墳墓群第Ⅲ地区69号墓[22]、吉田岡畠遺跡[23] pit.199、大内氏館跡10号土壙[24]、黒川遺跡[25]等でみられる。

坏は薄手で体部中位から屈曲し外方へ開くもの（Ⅰ類）と体部からそのまま直線的に開くもの（Ⅱ類）とがある。いずれも調整は横ナデで粗雑。

Ⅰ類は口径11cm以下10cm前後、器高2.0cm、底径5.0cm前後。Ⅱ類は口径12cm、器高2.5cm、底径5.6cm前後である。また大内氏館跡では厚手で口径10cm以下、器高2.0cm内外のもの（Ⅲ類）が認められる。

Ⅰ～Ⅲ類とも器高指数は20以下である。

皿は良好な資料がないが形態変化が少く、Ⅴ－2に比べ口径の小さくなる黒川遺跡5号墓の例を上げることができる。39は口径6.3cm、器高1.8cm、底径3.9cm。

Ⅱ－7

朝倉河内古墳群の1号墳墳丘裾より検出された第1号集石遺構[26]、黒川遺跡土葬墓[27]および勝栄寺遺跡[28]から出土した坏が該当する。

坏は薄手で体部が直線に開くものと口縁部付近で屈曲して外方へ開くものとがあるが、直線的に開くものの方が多い。口径11.4～12.2cm、器高2.4～2.7cm、底径3.6～5.2cm、器高指数20前後のものの他に小型のものがある。

以上、述べてきたように9世紀以降秋根遺跡を中心としてⅠ－2～Ⅱ－7の各段階の分類が可能であることが明らかとなった。以下、各様式の実年代について考えてみたい。

Ⅰ－2－aの段階にあたるLK081からは須恵器、蓋坏が伴出している。坏蓋は扁平な天井部に凝宝珠形の撮みをもち、口縁部の断面が鳥嘴状に三角形になるものである。
また坏身は高台がつかず、体部が直線的に立ち上がるもので底径指数0.52を測る。これらは百谷1号窯跡[29][30]、末原5号窯跡[31]で類品がみられ両窯跡では底部と体部との境に垂直かあるいはやや外反ぎみの高台を貼付し、底部と体部の境が認められない高台付坏を伴出している。このタイプの高台付坏は太宰府学校院井戸埋土層出土のものと酷似し、亀井明徳氏は9世紀代に比定されている[32]が、百谷、末原両遺跡では環状撮みをもつもの、あるいは撮みをもたないものと共存しており、9世紀前半から中頃に比定されうるものである[33]。したがってLK081出土須恵器、土師器も同時期の所産として取扱うことができる。

また、Ⅱ－1－aの坏5は北方遺跡8号溝第2層例[34]より口径は小さいが器形は同一で糸切り底である。調査者はこの型式を「10世紀の早い時期[35]」と考えておられ、この段階をヘラ切り底から糸切り底への転換期としている。

秋根遺跡Ⅱ－１－ａの坏は、その他で良好な共伴資料が得られず時期決定に苦慮するが本稿では北方遺跡例にならい一応10世紀初頭におくことにする。したがってⅠ－２－ｂは９世紀中頃～後半に位置づけることができる。しかし、Ⅰ－２－b、Ⅱ－１－aとも形態的な変化に乏しく、口縁部の形態および底部切り離し手法の相違を指摘できるだけであり、ヘラ切りおよび糸切りの両底部切り離し手法は、しばらくの間共存していたものと思われることから、Ⅰ－２－ｂは10世紀初頭に下る可能性がある。

Ⅱ－１－ｂの坏（８）は現段階ではⅡ－１－ｃからの系譜関係を捉えることが困難であるが、周防国衙南限地域Ｄ地区（西南隅部）の調査では第６トレンチ西端部から体部が大きく内彎しながら開く椀および乾元大宝、八稜鏡と共伴することから上限を10世紀後半、下限は後述するⅡ－２との関係から10世紀終末に比定することができよう。したがってⅡ－１－ｂおよびｃはⅡ－１－ａおよびｄの中間型式として前者を10世紀初頭～中頃、後者を10世紀中頃～後半におくことにする。

Ⅱ－２は、秋根遺跡に限らず県内では資料数が多いとはいえない。椀および小皿ａについては下限の決定資料がないが30が坏９と共伴することおよびＬＤ105出土の椀と共伴する坏10が12世紀前半頃と考えられることから11世紀代には比定されよう。また、坏は一型式をもって11世紀を代表させるには時期的幅がありすぎ、今後細分が必要であろう。小皿ｂ 29は断面三角形の小さな高台をもち、内彎して開く体部に続く口縁部の内面に一条の沈線をめぐらす黒色土器Ａ類を共伴している。このタイプの黒色土器は、併出する須恵器から樽崎彰一氏の編年では10世紀後半に比定される京都市深草仁明稜北方遺跡火葬墓例[37)38)39)40)]と11世紀前半から末葉と考えられている成立段階の瓦器椀を伴う法隆寺東室出土例[41)]との間に位置するもので11世紀の前半でも比較的早い時期におくことができよう。

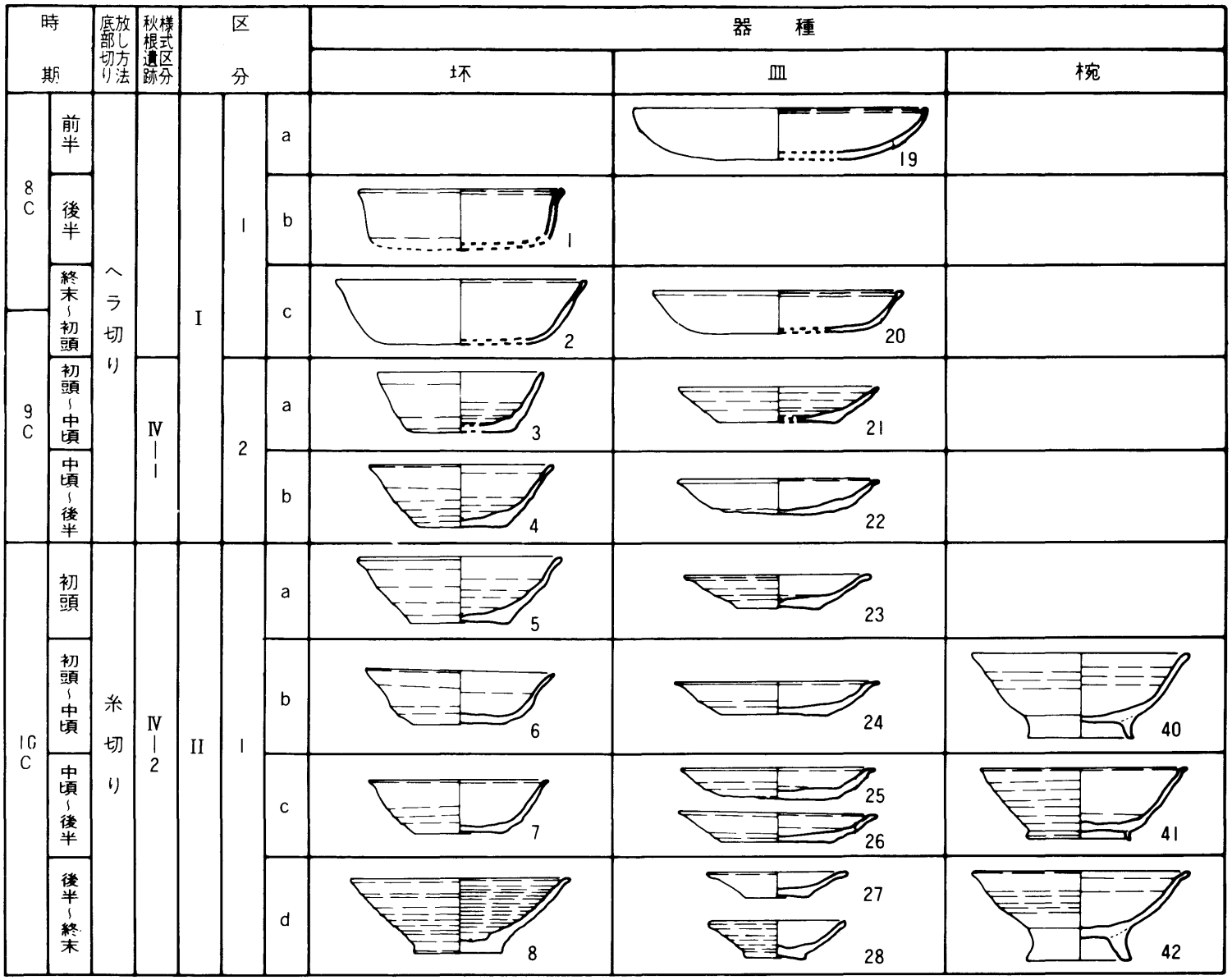
Ⅱ－３－ｂの坏11は瓦器椀を伴出している。この瓦器椀は体部が屈曲することなく内彎して立ち上がり高台は断面三角形を呈する。胎土は比較的精良であるが、内外面とも粗いヘラ磨きを施し、口径 16.2 cm、器高 5.6 cm、器高指数 34.5 である。このタイプの瓦器椀は白石太一郎氏の編年[42)]では第Ⅱ段階の後半に位置づけられ、12世紀後半の年代が与えられている。また森田勉氏による第Ⅲ型式[43)]の範疇に入るものと思われ、氏は12世紀後半～13世紀初頭に比定されている。従ってⅡ－３－ｂは時期幅をとり12世紀後半～13世紀初頭に比定されうる。鋳銭司大歳遺跡２号墓[44)]からはこの期の椀とともに横田賢次郎、森田勉氏らの分類でいう白磁Ⅴ－４－ａ[45)]が出土しており矛盾しない。従ってⅡ－３－ａは12世紀前半頃、Ⅱ－２－ｂは11世紀後半頃におくことができよう。

Ⅱ－4－bは神道寺・天疫神社前遺跡5号土壙[46]に類似の資料が認められる。この遺跡から出土する瓦器椀はⅠ・Ⅱ類に区分され、長野D遺跡[47]の瓦器椀との形態、法量およびヘラ磨きの有無等の手法の差異により時間的先後関係がとらえられるとし、Ⅰ類を13世紀後半、Ⅱ類を13世紀中頃に比定している。5号土壙からは瓦器椀Ⅱ類のみが出土し、伴出する坏は体部が直線的に開くものと内彎ぎみに開くものが認められ、口径11.5～13.5㎝、器高2.9～3.7㎝、底径6.0～8.5㎝を測り、口径12.5㎝、器高3.4㎝、底径6.9㎝前後のものが多いとされている。Ⅱ－4－bの坏は調整、器形、法量とも共通する要素が多く13世紀中頃に比定されよう。

Ⅱ－4－cの坏は力丸遺跡[48]および鋳銭司大歳遺跡に類品をみることができる。栗山伸司氏は力丸例を中国銭、青磁を共伴し13世紀後半をさかのぼらない辻田西遺跡[49]を上限とし、辻田西遺跡よりやや後出する椎木山遺跡[50]例との間に位置づけ少なくとも13世紀後半から14世紀前半の時期を与えている[51]。また、鋳銭司大歳遺跡14号建物跡からは口径11.4㎝、器高3.9㎝、底径5.0㎝と力丸例に比べわずかに器高が高いが、調整、器形等変わるところのない坏が皿および前述したような体部が内彎して開き、高台の極めて退化した椀と伴出している。北九州市域では13世紀中頃に比定される神道寺・天疫神社前遺跡2号土壙における椀が鋳銭司大歳遺跡例と共通する要素が多く、この期の椀が急激に減少することから13世紀代に消滅する可能性が高いとされている。以上のことからⅡ－4－cは13世紀中頃から13世紀後半、下っても14世紀の早い時期までの可能性が高いものと思われる。

なお、鋳銭司大歳遺跡14号建物跡からは、この坏とは別に体部が内彎し、立ち上がりの急傾斜な口径13.7～15.5㎝、器高5.3～6.2㎝、底径4.8～6.8㎝を測る大形坏の一群がある。14世紀の資料は年代決定の決め手を欠くきらいがあるが、北九州市域では13世紀後半以降、口径に比べ器高が低くなり、底径が小さくなる傾向が認められており、器高指数が30～34であるⅡ－4－cに比べ器高指数22～24である堂道遺跡C地区包含層例および大内氏館跡1号土壙例をあてることができる。15世紀の資料は玉祖遺跡Ⅰ地区5号墓、朝田墳墓群第Ⅲ地区69号墓、大内氏館跡54年度調査10号土壙で永楽通宝を伴出した例が知られており、上限を15世紀前半におくことができる。口径に比べ器高はさらに小さくなり、器高指数は20以下となる。大内氏館跡の調査では、器壁の薄いものが厚手のものに先行する事実が認められており、大内氏館跡54年度調査10号土壙例は時期的に下る可能性がある。

Ⅱ－7の資料は、年代決定の決め手が少なくわずかに朝倉河内例があげられるにすぎない。出土した坏は蔵骨器・五輪塔を伴出するが時期幅があり、蔵骨器（Ⅲ）を上限として16世紀代に比定されるものである。



1	長門国分寺跡 54年度調査LW006	15.38	吉田岡畠遺跡 pH199	37	大内氏館跡 54年度調査13号土壙
14	堂道遺跡C地区包含層	18	朝倉河内古墳群第1集石遺構	その他	秋根遺跡
17	大内氏館跡 54年度調査10号土壙	43	堂道遺跡2号井戸		
39	黒川遺跡5号墓	13.35.36.46	鋳銭司大歳遺跡14号墓		
2.19.20	周防国衛跡厨屋地区東西溝	16	朝田墳墓群第 地区69号墓		(各報告書より転載、一部加筆)

Fig.45－(1) 防長における土師器編年図（試案） 縮尺 1/4

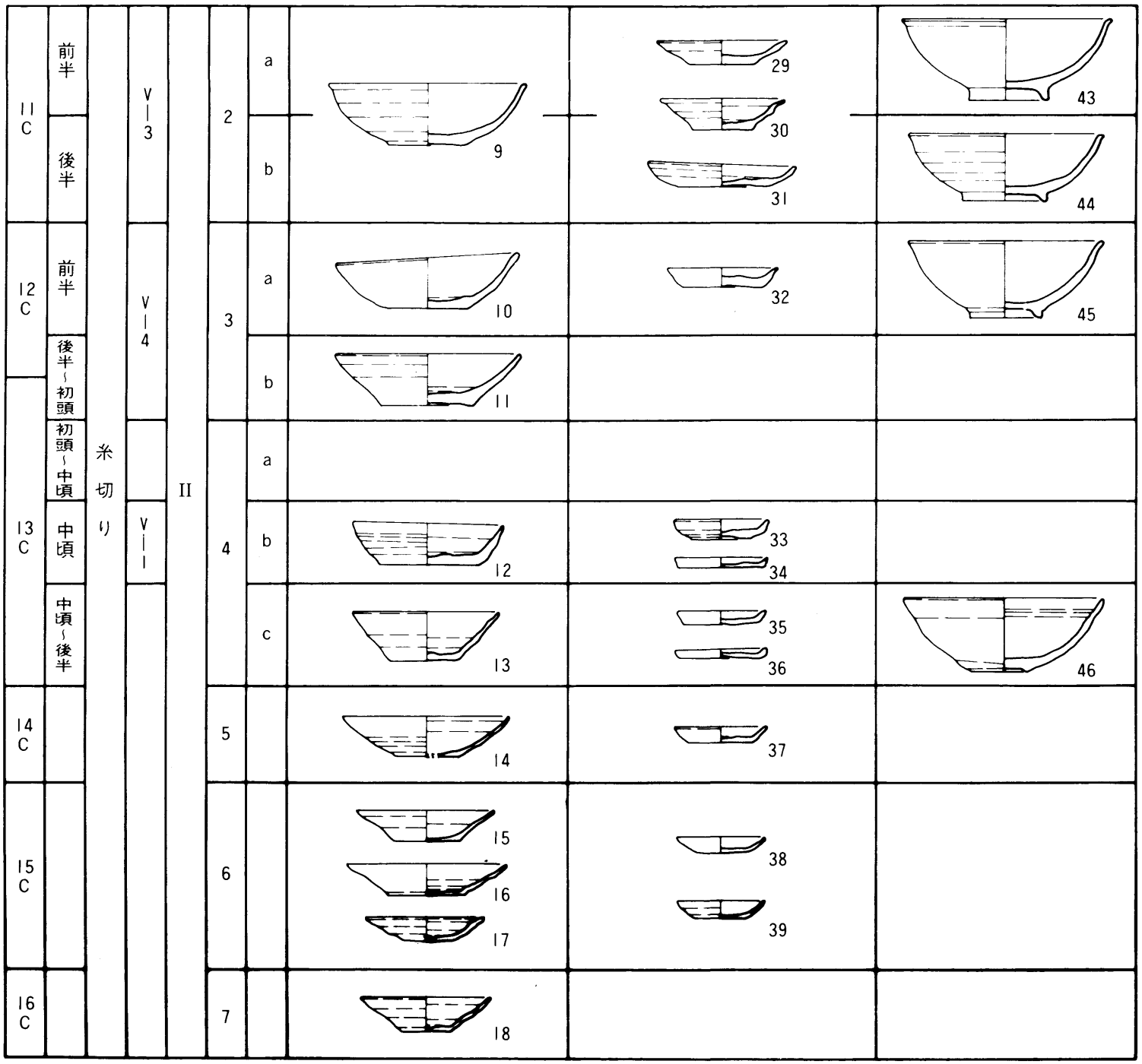


Fig. 45－(2)　防長における土師器編年図（試案）　縮尺 ¼

注）

1) 下関市教育委員会　「秋根遺跡」　1977

2) 山口県教育委員会編　「下右田遺跡第４次調査概報・総括」　山口県埋蔵文化財調査報告第53集　1980

3) 防府市教育委員会　「周防の国衙」　1967

4) 下関市教育委員会　「長門国府」　長門国府周辺遺跡調査報告Ⅲ　1979

5) 同　上　「長門国分寺」　長門国府周辺遺跡発掘調査報告Ⅴ　1982

6) 奈良国立文化財研究所　「平城宮発掘調査報告Ⅵ」　奈良国立文化財研究所学報第23冊　1974

7) 同　上　「平城宮発掘調査報告Ⅸ」　奈良国立文化財研究所学報第34冊　1978

8) 同　上　「平城宮発掘調査報告Ⅱ」　奈良国立文化財研究所学報第15冊　1962

9) 同　上　「平城宮発掘調査報告Ⅶ」　奈良国立文化財研究所学報第26冊　1976

10) 秋根遺跡において設定された一様式中の各器種はひとつの様式内で明らかに同時期性を内在するが、この様式がいかなる一定地域を包括するものか今後の資料の増加を待って検討されるべきことは言うまでもない。しかし、資料数の不足が歪めない現段階では秋根遺跡の各様式をもって一定の空間的、時間的まとまりをもつ一群と理解する。

11) 編年表における一様式内の特定器種における上下関係は時間的先後関係は示さない。

12) 法量は秋根遺跡に限らず量的には多くはない一遺跡中、一様式中の一器種について法量化したもので、各様式中の特定器種についての法量の絶対性を占るものではない。

13) 山口県教育委員会編　「下右田遺跡第３次調査概報」　山口県埋蔵文化財調査報告第46集　1977

14) 同　上　「上辻・鋳銭司大歳・今宿西」　山口県埋蔵文化財調査報告第75集　1984

15) 山口県教育委員会　「堂道・五反田遺跡」　山口県埋蔵文化財調査報告第22集　1973

16) 前掲書　14)

17) 器高の底径に対する比率。底径指数＝ $\frac{器高}{口径} \times 100$

18) 前掲書　15)

19) 山口市教育委員会　「大内氏館跡Ⅰ」　山口市埋蔵文化財調査報告第９集　1981

20) 同　上　「大内氏館跡Ⅱ」　山口市埋蔵文化財調査報告第10集　1980

21) 山口県教育委員会　「玉祖神社・西小路遺跡」　山口県埋蔵文化財調査報告第70集　1980

22) 同　上　「朝田墳墓群Ⅱ、鴻ノ峰１号墳」　山口県埋蔵文化財調査報告第33集　1977

23) 同　上　「吉田岡畠・吉田大浴・下長野遺跡」　山口県埋蔵文化財調査報告第23集　1973

24) 前掲書　20)

25) 山口県教育委員会　「くろかわ」　山口県埋蔵文化財調査報告第57集　1980

26) 朝倉河内古墳群発掘調査委員会編　「朝倉河内古墳群調査報告書」　山口市埋蔵文化財調査報告第４集　1975

27) 前掲書　25)

28) 新南陽市教育委員会　「勝栄寺」　新南陽市埋蔵文化財調査報告第１集　1983

29) 渡辺亨　「百合窯跡」『小郡町史』　小郡町　1979
30) 桑原邦彦・池田善文　「防長地域の須恵器窯跡と編年研究」『山口県の土師器・須恵器』周陽考古学研究所　1981
31) 末永博憲・小田村宏　「末原窯跡」　山口県教育委員会　1980
32) 亀井明徳・酒井仁夫・高橋章　「向佐野・長浦窯跡の調査」『九州縦貫自動車関係埋蔵文化財調査報告　Ⅳ』　福岡県教育委員会　1975
33) 前掲書　30)
34) 谷口俊治・上村佳典・栗山伸司・梅崎恵司　「北方遺跡」『発掘ニュース』№21　北九州市教育文化事業団　1982
35) 谷口俊治・上村佳典　「砥石山遺跡」　北九州市埋蔵文化財調査報告書第28集　1984
36) 防府市教育委員会　「周防国府―南限地域―の調査」　1975
37) 酒詰仲男他　「京都市伏見区深草仁明陵北側地点発掘経過略報」　日本考古学協会第25回総合研究発表要旨　1960
38) 樽崎彰一　「土器の発達―須恵器」『世界考古学大系』Ⅳ　平凡社　1976
39) 白石太一郎　「いわゆる瓦器に関する二、三の問題」『古代学研究』54　1969
40)　同　上　　「瓦器の生産に関する二、三の覚え書」『古代文化』27巻1号　1975
41) 『重要文化財法隆寺東室修理工事報告書』　1961
42) 前掲書　39)、40)
43) 森田勉　「九州地方の瓦器椀について　―型式分類と編年試案―」『考古学雑誌』第59巻2号　1973
44) 前掲書　14)
45) 横田賢次郎・森田勉　「太宰府出土の中国輸入陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4　1978
46) 木太久守・小方泰宏・藤丸詔八郎　「神道寺・天疫神社前遺跡」　北九州埋蔵文化財調査報告第11集　㈶北九州市教育文化事業団　1982
47) 木太久守・山手誠治　「長野D遺跡」　北九州市埋蔵文化財調査報告第5集　㈶北九州市教育文化事業団　1980
48) 中村修身・山手誠治　「力丸遺跡」　北九州市埋蔵文化財調査報告第26集　北九州市教育委員会　1978
49) 山手誠治・梅崎恵司・佐藤浩司・宇野慎敏・栗山伸司　「辻田西遺跡」　「北九州市埋蔵文化財調査報告第13集　㈶北九州市教育文化事業団　1982
50) 木太久守・山手誠治　「椎木山遺跡」　北九州市埋蔵文化財調査報告第24集　北九州市教育委員会　1977
51) 宇野慎敏・栗山伸司　「徳力遺跡第二地点」　北九州市埋蔵文化財調査報告第30集　㈶北九州市教育文化事業団　1984

第6章　山口大学構内遺跡調査要項

1　山口大学埋蔵文化財資料館規則

（設置）

第1条　山口大学に、山口大学埋蔵文化財資料館（以下「資料館」という。）を置く。

（資料館の業務）

第2条　資料館は、学内の共同施設として、次の各号に掲げる業務を行なう。

一　山口大学構内から出土した埋蔵文化財の収蔵・展示及び調査研究

二　山口大学構内における埋蔵文化財の発掘調査並びに報告書の刊行

三　その他埋蔵文化財に関する必要な業務

（運営委員会）

第3条　資料館に関する事項を審議するため、山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会（以下「委員会」という。）を置く。

2　委員会に関する規則は、別に定める。

（館長）

第4条　資料館に館長を置く。館長は、委員会の議を経て学長が委嘱する。

2　館長の任期は2年とし、再任を妨げない。

3　館長は、資料館の業務を掌理する。

（調査員）

第5条　資料館に調査員若干名を置く。

2　調査員は、委員会の議を経て館長が委嘱する。

3　調査員は、資料館の業務を処理する。

（特別調査員）

第6条　埋蔵文化財に関する特別な分野の調査研究を行うため、資料館に特別調査員若干名を置くことができる。

2　特別調査員は、委員会の議を経て館長が委嘱する。

（雑則）

第7条　この規則に定めるもののほか、資料館に必要な事項は別に定める。

2　山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会規則

（趣旨）

第1条　この規則は、山口大学埋蔵文化財資料館規則（以下「資料館規則」という。）第3条第2項の規定に基づき、山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会（以下「委員会」という。）に関し、必要な事項を定めるものとする。

（審議事項）

第2条　委員会は、次の事項を審議する。

一　山口大学埋蔵文化財資料館（以下「資料館」という。）に関する基本的なこと。

二　資料館の管理運営に関すること。

三　資料館の整備充実に関すること。

四　資料館の運営に要する経費に関すること。

五　その他必要な事項

（組織）

第3条　委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

一　資料館規則第4条第1項の館長

二　各学部及び教養部の教官各1名

三　事務局長

2　前項第2号の委員は、それぞれの部局の推薦に基づいて学長が委嘱する。

（任期）

第4条　前条第1項第2号の委員の任期は2年とし、再任を妨げない。

（委員長）

第5条　委員会に委員長を置き、委員の互選とする。

2　委員長は、委員会を招集し、その議長となる。

（幹事）

第6条　委員会に幹事を置き、庶務部長、経理部長及び施設部長をもって充てる。

（委員以外の出席）

第7条　委員会が必要と認めるときは、委員以外の者を委員会に出席させることができる。

（事務）

第8条　委員会の事務は、庶務部庶務課において処理する。

（雑則）

第9条　この規則に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、委員会が定める。

Tab. 22　山口大学埋蔵文化財資料館運営委員　（昭和57年度）

部局名	氏名	官職	任期	備考
農学部	中山清次	教授	56. 4. 1 ～ 58. 3. 31	委員長、館長
人文学部	近藤喬一	〃	57. 4. 1 ～ 59. 3. 31	
教育学部	三浦肇	〃	56. 4. 1 ～ 58. 3. 31	
経済学部	及川順	〃	〃	
理学部	富阪武士	〃	〃	
医学部	黄基雄	〃	〃	
工学部	木村允	〃	〃	
教養部	木村忠夫	〃	〃	
事務局	松澤美作	事務局長	55. 1. 16 ～ 57. 7. 9	
〃	佐藤士郎	〃	57. 7. 9 ～ 60. 2. 1	

Tab. 23　山口大学埋蔵文化財資料館特別調査員　（昭和57年度）

学部等	氏名	官職	専攻科目等
人文学部	八木充	教授	文献史学
〃	中村友博	助教授	日本考古学
理学部	松本徳夫	教授	岩石学
農学部	木脇祐順	〃	家畜解剖学
〃	勝本謙	助教授	植物分類学
工業短期大学部	池谷元伺	教授	年代測定学

（官職はいずれも昭和57年度）

Tab. 24　山口大学構内における主な調査

調査年度	旧調査地区名又は調査区名	学内地区割	地点	担当者	調査区分	面積（㎡）	遺構	遺物	備考
昭和41年	第Ⅰ地区A・B区	L・M－15区	1－1	小野忠凞	事前	（30）	弥生竪穴住居跡、柱穴	弥生土器、土師器、須恵器	吉田第1次発掘調査
	第Ⅱ地区 家畜病院建設予定地	S・T－19区 S－20区	1－2	〃	〃	2000	溝、柱穴	弥生土器、土師器、瓦質土器、須恵器	吉田第2次発掘調査
	第Ⅱ地区	P・Q－19・20区	1－3	〃	試掘			弥生土器、土師器	吉田第3次発掘調査
	第Ⅳ地区 牛舎建設予定地	S－10区	1－4	〃	事前	300	弥生溝、土壙 古墳竪穴住居跡 中世住居跡、溝	弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、陶磁器	吉田第4次発掘調査
	第Ⅳ地区	S・T－10～13区	1－5	〃	試掘				吉田第5次発掘調査
昭和42年	第Ⅲ地区杭列区	E－20区	1－6	〃	事前	1100	杭列	弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、矢板状木杭	吉田第6次発掘調査
	第Ⅲ地区南区	G・11－22・23区	1－7	〃	〃		河川跡、柱穴	縄文土器、弥生土器 木器、石器	吉田第7次発掘調査
	第Ⅲ地区北区	I・J－20・21区	1－8	〃	〃	1400	竪穴住居跡、溝、土壙、柱穴		吉田第8次発掘調査
	第Ⅲ地区東南区	H－23区 I・J・K－24区	1－9	〃	〃		弥生竪穴住居跡	弥生土器	吉田第9次発掘調査
	第Ⅲ地区野球場	I－22・23区 J－21・22・23区 K－22・23区	1－10	〃	試掘		中世柱穴	瓦質土器	吉田第10次発掘調査
	第Ⅴ地区学生食堂	I・J－19・20区 J－20区	1－11	〃	事前		弥生溝、古墳土壙	弥生土器、土師器	吉田第11次発掘調査

調査年度	旧調査地区名又は調査区名	学内地区割	地点	担当者	調査区分	面積（㎡）	遺構	遺物	備考	調査期間
昭和42年	第Ⅴ地区	Ⅰ・J・K・L・M－18・19・20区	1－12	山口大学吉田遺跡調査団	試掘		河川跡、柱穴、土壙	弥生土器、土師器	吉田第12次発掘調査	
	第Ⅰ地区C区 大学本部建設予定地	K・L－14区	1－13	〃	事前	600	竪穴住居跡、溝、土壙	土師器、須恵器、瓦質土器	吉田第13次発掘調査	
昭和46年	第Ⅰ地区D区第1地点	L－13区	1－14	〃	試掘		溝	弥生土器、木炭屑	吉田第14次発掘調査	
	第Ⅰ地区D区第2地点	〃	1－15	〃	〃			弥生土器、土師器、瓦質土器	吉田第15次発掘調査	
	第Ⅰ地区D区第3地点	M－13区	1－16	〃	〃		竪穴住居跡土壙、柱穴	土師器	吉田第16次発掘調査	
	第Ⅰ地区D区第4地点	M・N－13区	1－17	〃	〃		弥生竪穴住居跡、溝、土壙	弥生土器、土師器、石器、瓦質土器	吉田第17次発掘調査	
	第Ⅰ地区D区第5地点	L－13区	1－18	〃	〃		弥生溝	弥生土器	吉田第18次発掘調査	
	第Ⅰ地区D区第6地点	M－13区	1－19	〃	〃		古墳竪穴住居跡弥生溝	弥生土器、土師器、石器	吉田第19次発掘調査	
	第Ⅰ地区D区第7地点	〃	1－20	〃	〃		溝	弥生土器	吉田第20次発掘調査	
	第Ⅰ地区E区 第2学生食堂建設予定地	N・O－15区	1－21	〃	事前	900	弥生～古墳竪穴住居跡、壙墳、溝、柱穴	弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、石器、鉄製品	吉田第21次発掘調査	
昭和53年	人文学部校舎新営予定地	M・N－21区	1－22	近藤喬一	〃	180		寛永通宝、須恵器	吉田第22次発掘調査	12月11日～12月19日
昭和54年	本部管理棟新営予定地	L－14区	1－25	山口大学埋蔵文化財資料館	〃	740	溝、土壙、柱穴中世井戸、土壙墓、住居跡	弥生土器、土師器、石製品	吉田第25次発掘調査　記録保存	8月20日～11月2日
	理学部校舎新営予定地	O－19区	1－23	山口大学埋蔵文化財資料館	〃	250			吉田第23次発掘調査	6月11日～6月18日
	農学部動物舎新営予定地	P－18区	1－24	〃	〃	380			吉田第24次発掘調査	7月2日～7月6日

調査年度	旧調査地区名又は調査区名	学内地区割	地点	担当者	調査区分	面積（㎡）	遺構	遺物	備考	調査期間
昭和54年	教育学部附属養護学校新営予定地	A・B・C・D－20・21・23・24区	1－26	山口市教育委員会山口大学埋蔵文化財資料館	事前	400	溝、土壙	縄文土器 弥生土器	吉田第26次発掘調査	11月26日 ～ 12月13日
昭和55年	経済学部校舎新営予定地	K・L－21区	1－27	〃	事前	70		須恵器、土師器	吉田第27次発掘調査 記録保存	12月1日 ～ 12月16日
	農学部農業観測実験施設新営予定地	Q－15区	1－28	〃	〃	50	溝・土壙	須恵器、土師器	吉田第28次発掘調査 記録保存	1月19日 ～ 2月2日
	本部構内環境整備予定地	F－20・21区 G－19区 H－20区	1－29	〃	立会				吉田第1次立会調査 工事続行	3月10日 ～ 3月16日
	農学部構内環境整備予定地	P・Q－17・18区	1－30	〃	〃				吉田第2次立会調査 工事続行	3月24日
昭和56年	教育学部校舎新営予定地	H－19区	1－31	〃	事前	400	弥生竪穴住居跡、土壙、溝、柱穴	弥生土器、石製品	吉田第29次発掘調査 記録保存	4月13日 ～ 7月18日
	教育学部音楽棟新営予定地	H－16区	1－32	〃	〃	100	溝		吉田第30次発掘調査 記録保存	10月12日 ～ 11月17日
	教育学部美術科・技術科実験実習棟新営予定地	J－19・20区	1－33	〃	〃	130	旧河川跡、溝、柱穴	縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器	吉田第31次発掘調査 記録保存	11月18日 ～ 1月6日
	正門橋脚新営工事予定地	H－11区	1－34	〃	立会				吉田第3次立会調査 工事続行	4月3日 ～ 4月6日
	時計塔埋設工事予定地	H－14区	1－35	〃	〃				吉田第4次立会調査 工事続行	5月19日
	本部構内擁壁工事予定地	K－14区	1－36	〃	〃				吉田第5次立会調査 工事続行	
	教養部構内擁壁工事予定地	I－17区	1－37	〃	〃				吉田第6次立会調査 工法等変更	11月20日
	構内循環道路舗装工事予定地	吉田構内	1－38	〃	〃				吉田第7次立会調査 工事続行	
	農学部中庭整備工事予定地	O－17区	1－39	〃	〃				吉田第8次立会調査 工事続行	10月24日
	暖房施設改修工事予定地	O－16区	1－40	〃	〃				吉田第9次立会調査 工法等変更	11月20日
	学生部文化会車庫新営工事予定地	L－8区	1－41	〃	〃				吉田第10次立会調査 工法等変更	12月25日
	学生部馬場整備工事予定地	M・N－8・9区	1－42	〃	〃				吉田第11次立会調査 工事続行	12月24日 ～ 12月26日

English Summary

These reports account the results of archaeological researches by Yamaguchi University Archaeological Research in five excavated areas located on campus in 1982.

Yamaguchi University is situated on the left bank of the Fushion River which flow through the Yamaguchi Basin in the central part of Yamaguchi city. In Yamaguchi University there are many sits of residence from the *Jomon* to the *Modern* period. The initial excavation of these sites was headed by Tadahiro Ono in 1966 and by the Yamaguchi University Archaeological Research team since 1978.

The current year we carried out excavation in intensive area of the University Library, soundings in planned area of the University Hall and three examinations under construction.

Excavation in intensive area of the University Library uncovered one river, seven diches, numerious pit holes and many relics from the early *Yayoi* to the *Kamakura* period.

The results of the excavation have brough to light some very important points :

1) The river flows southeast to northwest through the center of the excavated area and containts relics from the early *Yayoi* to the *Kamakura* period.

   On the river bed many piles were driven along both banks of the river. These piles have two lines it appears that at least one of them was driven in the early *Kofun* period.

2) All seven diches unearthed in the eastern part, excluding two *modern* ones, flowed from east to west following the late *Yayoi* period. It is possible for the largest one to have existed in the same time as the river.

3) Using Plant Opal analysis, each of the three layers unearthed are presumed to have been dry rice fields lacking foot paths between them.

4) The three layers contained many relics, including jars, beakers, bowls, plates fruitstands, stone implements and various materials made of soil, from the early *Yayoi* to the early *Kamakura* period.

   In Sue ware there are a number of relics dating roughly from the mid

sixth century to the ninth century A.D. centering around the eighth century A.D. One of these specimines shows evidence of having been fired in a kiln. So it is possible that there is more kiln fired pottery of the eighth century A.D. in this area.

Hagi ware is assumed to be from the eleventh century A. D. to the early thirteenth century A.D.

And there are many trade ceramics, including blue and white bowls and plates.

In addition to these many relics, other quan styled soil materials and pottery using salt manufucture were discovered. The former with a square shape is the only intsance to have been found in the most western site. The latter was carried from the producing district and provides the evidence to understand the process in tradition and consumption of salt in the inland area.

These results suggest that many residences made and used such relics in this area.

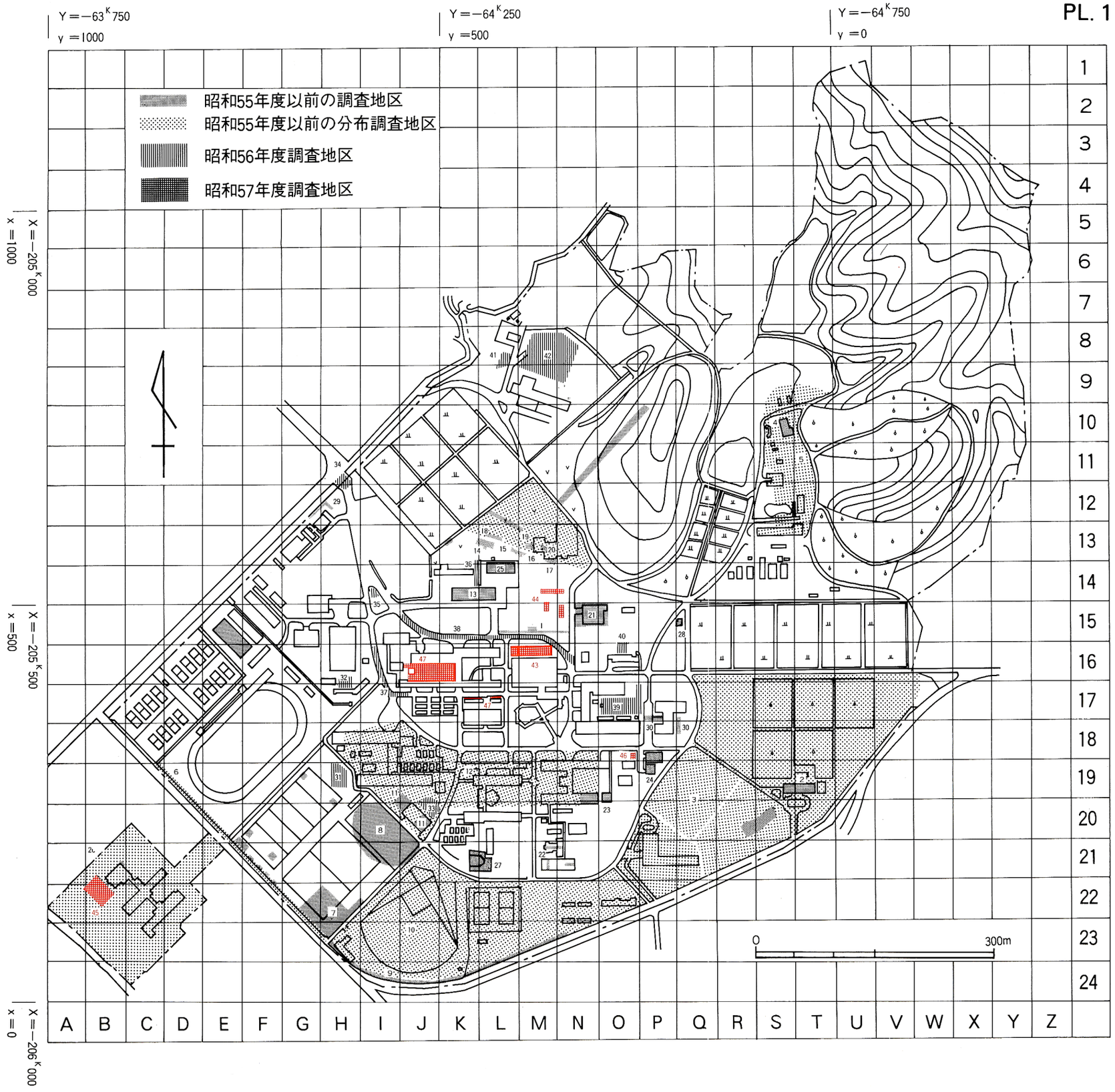
Soundings in planned area of the University Hall uncovered a residence in the late *Yayoi* period, diches in the Medieval age, many pit holes and the layers contained relics.

Only a small area has been so far excavated since 1978. The task now is to accumulate the data to understand the position, age and scope of the prehistoric village by acculate research in the circumference of the digging site.

PLATES

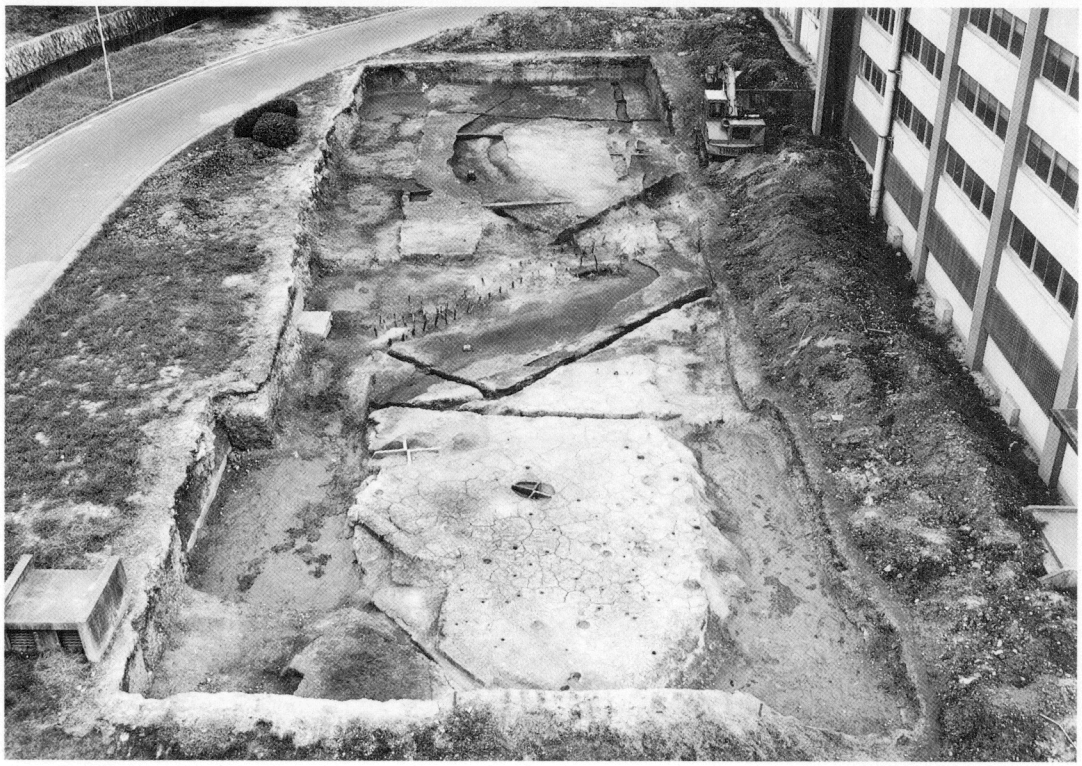
PL. 1

山口大学構内地区割および調査区位置図

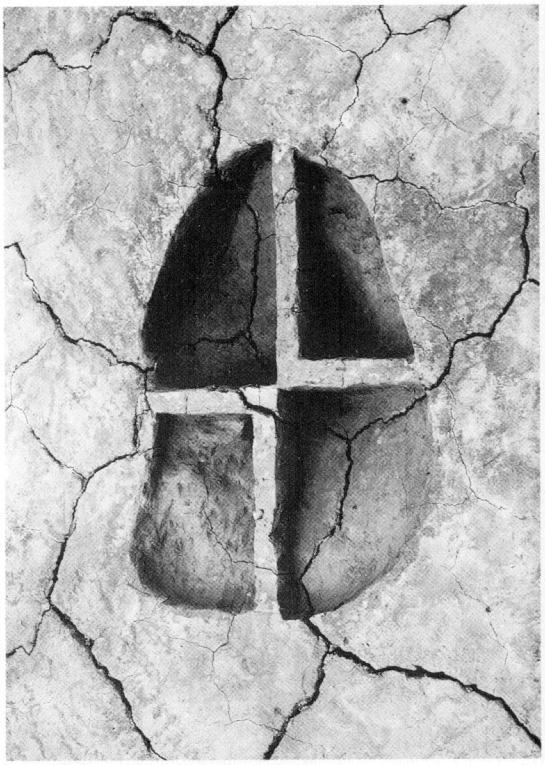


山口大学吉田構内全景（北西から）

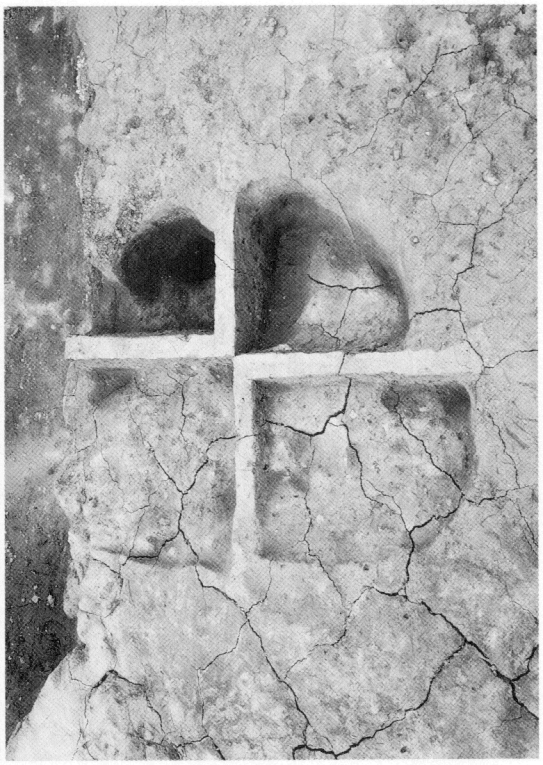
(1)　調査前発掘区全景（東から）



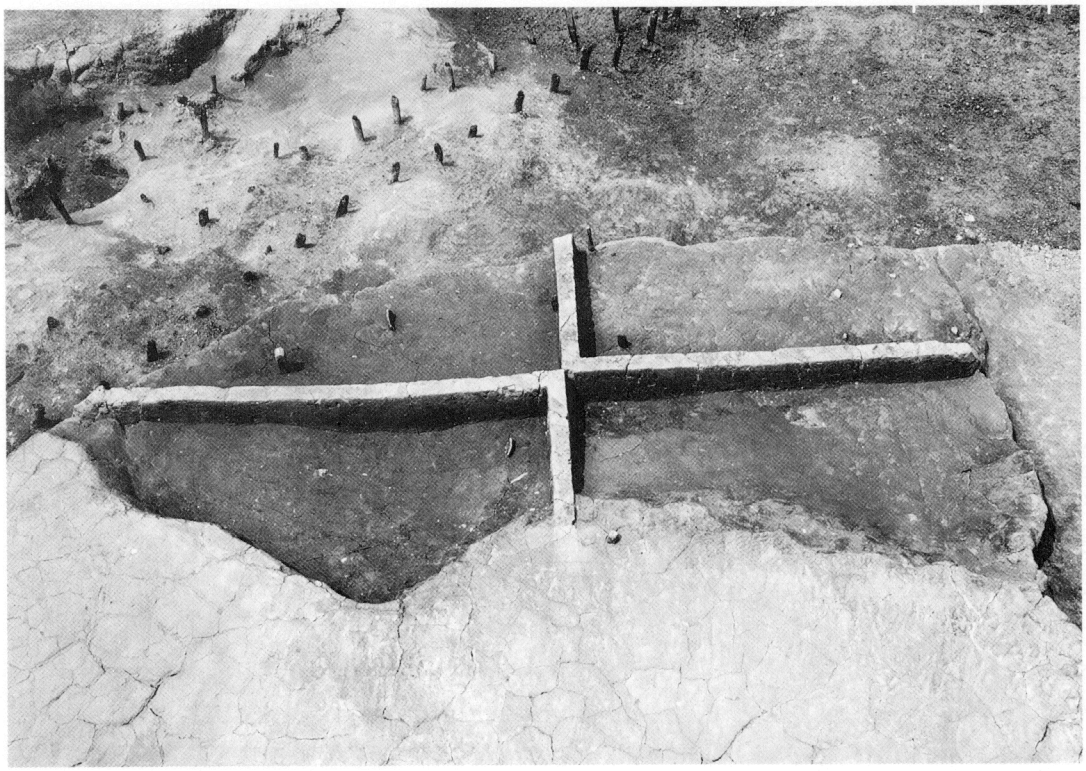
(2)　発掘区全景（西から）



(1) 土壙SK1（南西から）



(2) 土壙SK2（南から）



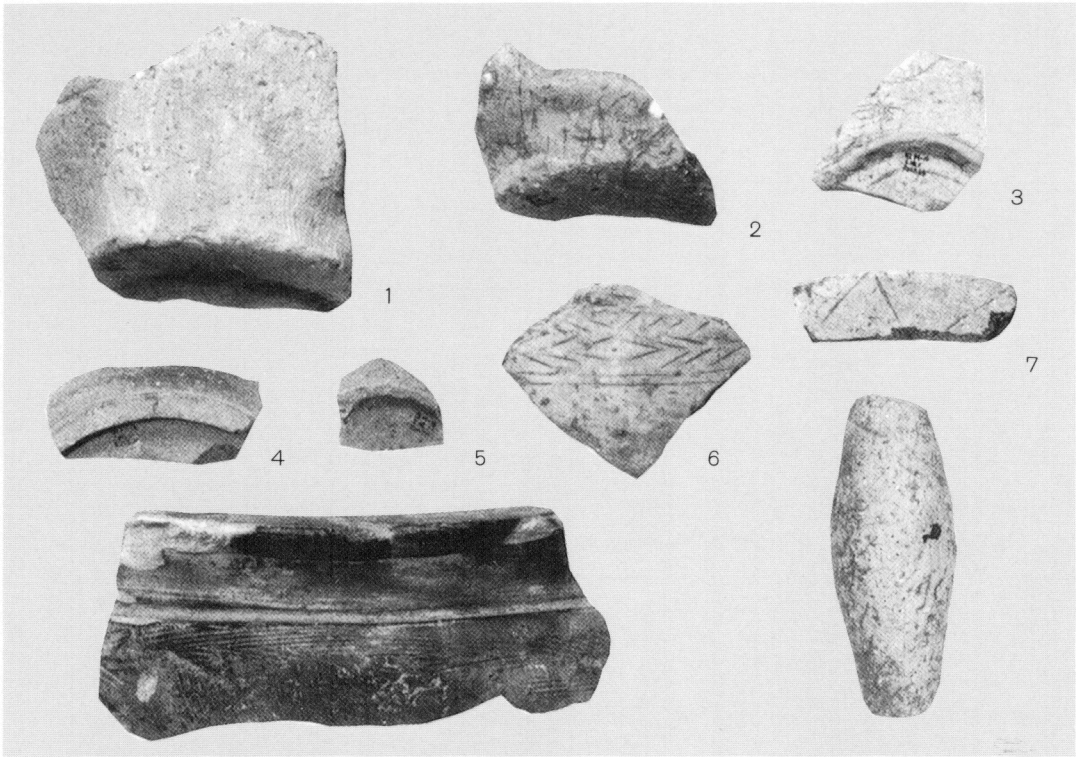
(3) 土壙SK3（東から）

(1)　土壙SK4（南から）

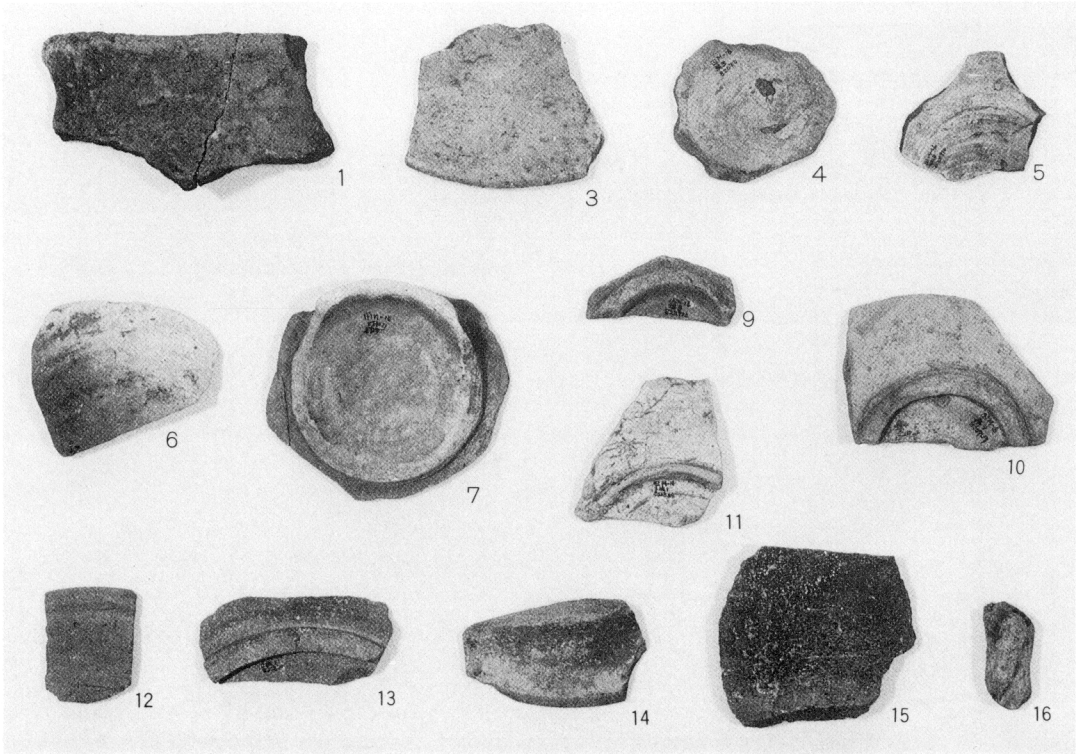
(2)　溝および旧河川跡（西から）

(1)　溝SD4・5・6（東から）

(2)　旧河川跡NR土層断面（南から）

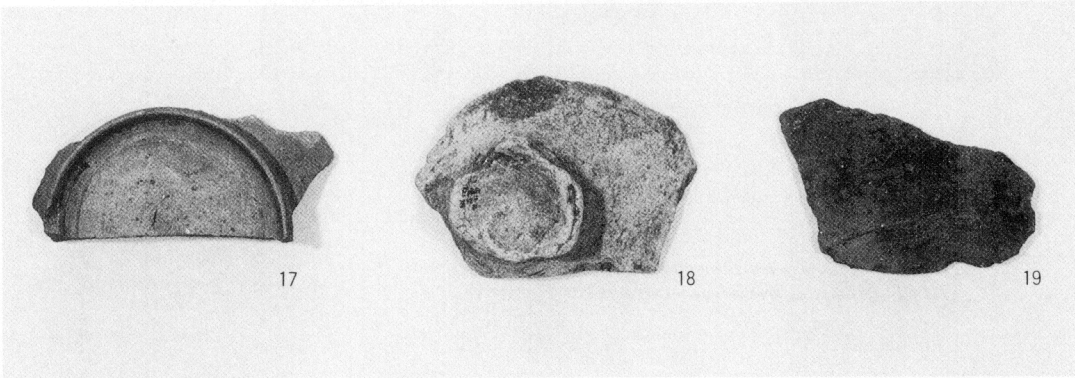


(1)　土壙SK2（1～5）・SK3（6～9）出土遺物

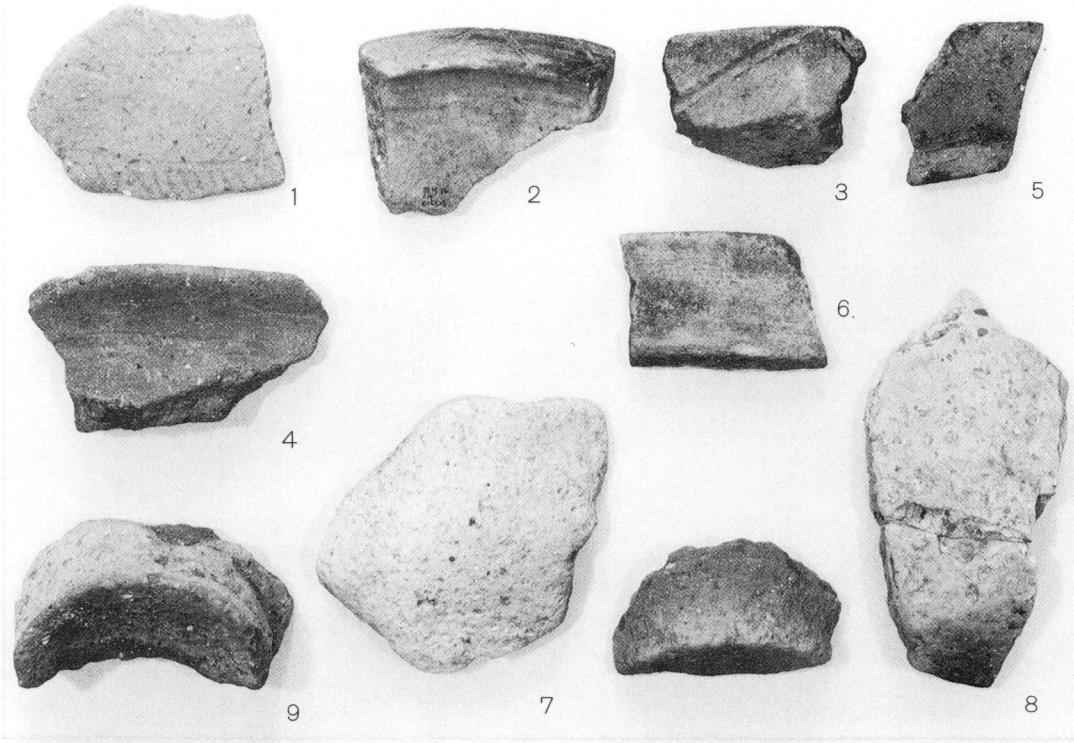


(2)　溝SD3出土遺物

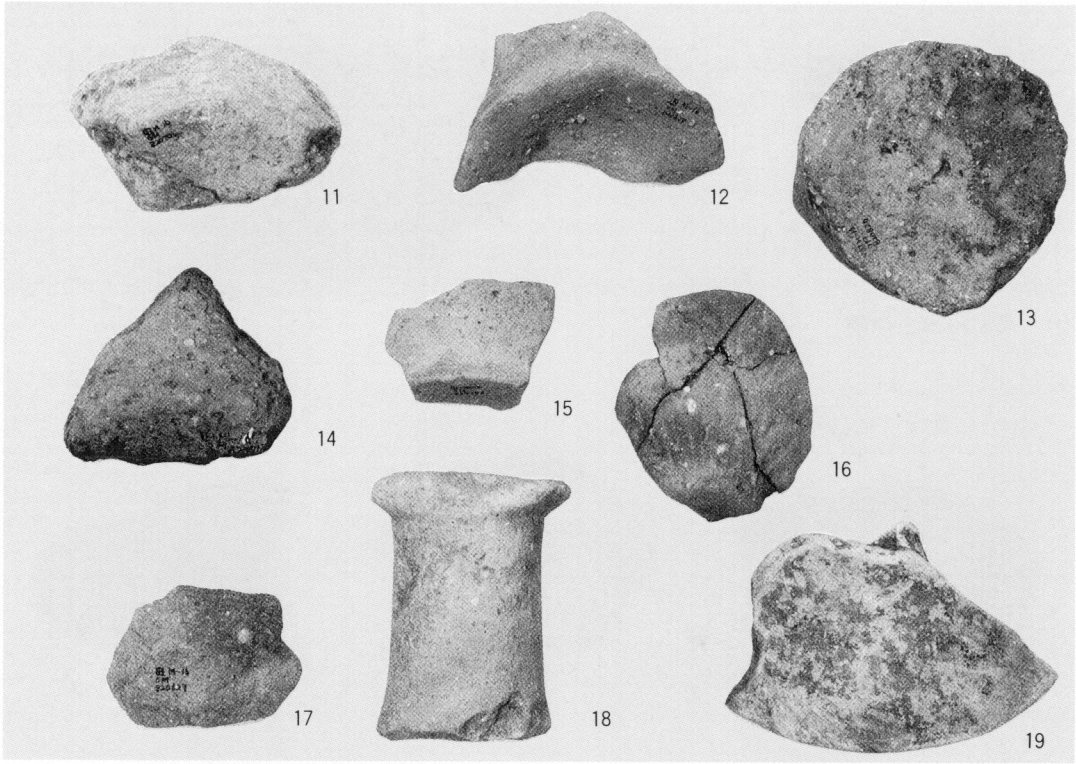
(1)　溝SD3出土遺物



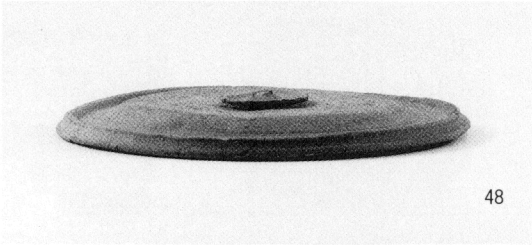
(2)　溝SD4 (17)・SD5 (18・19) 出土遺物



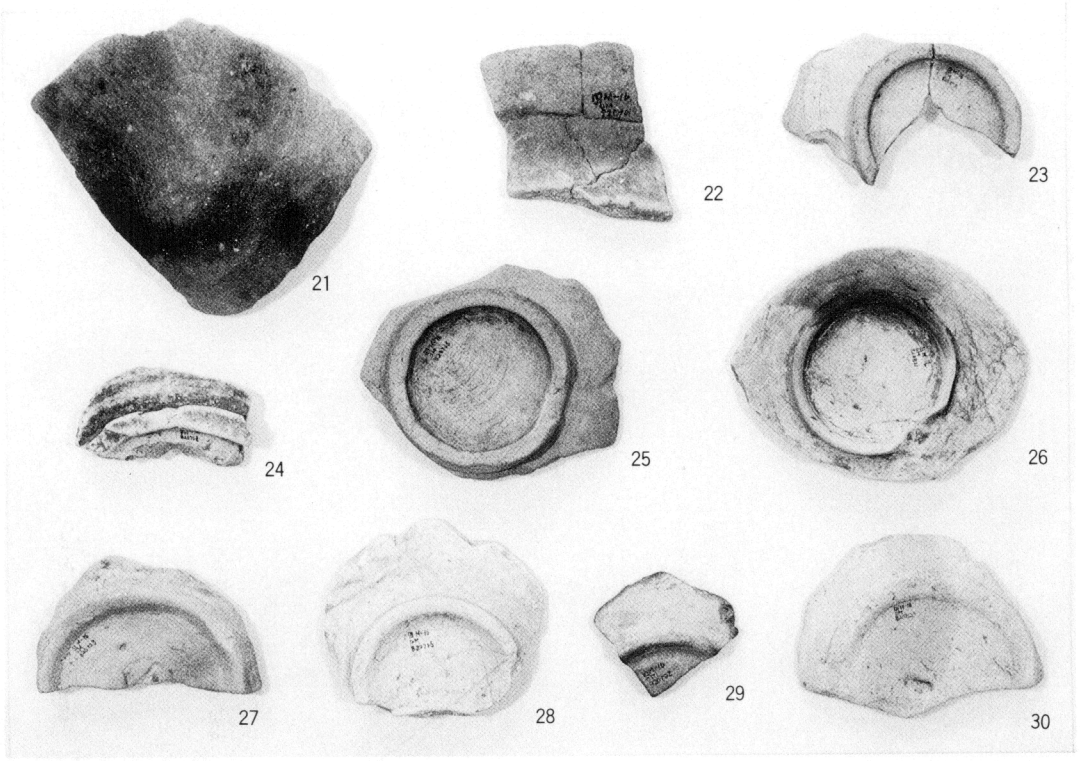
(3)　旧河川跡NR出土遺物（弥生土器）



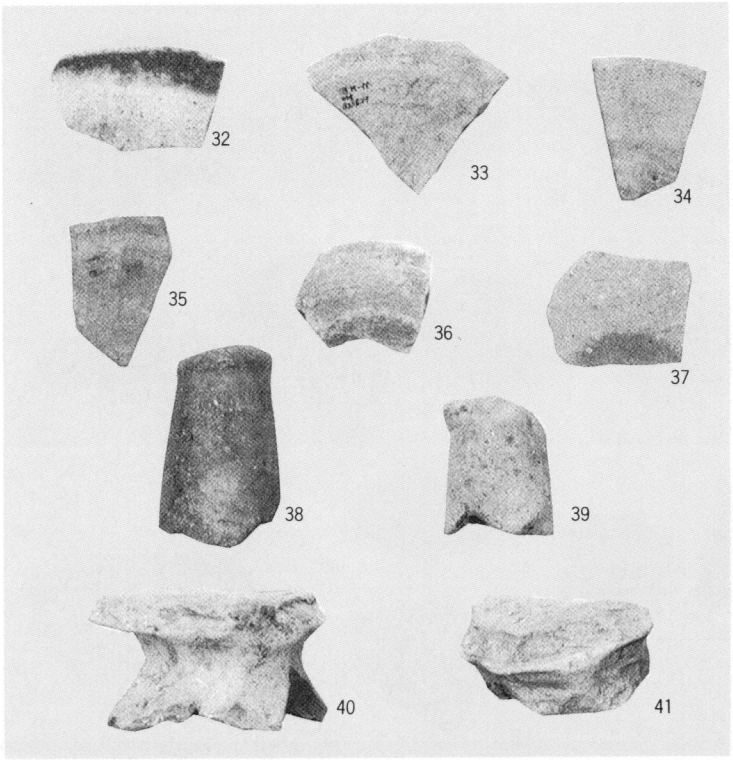
(1)　旧河川跡NR出土遺物（弥生土器）

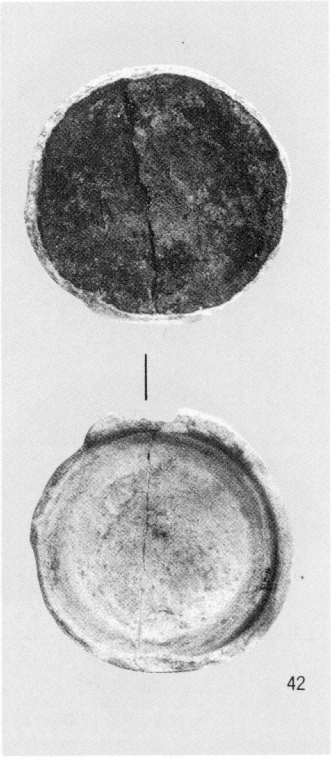


(2)　旧河川跡NR出土遺物（土師器20・31　須恵器48・73・76）

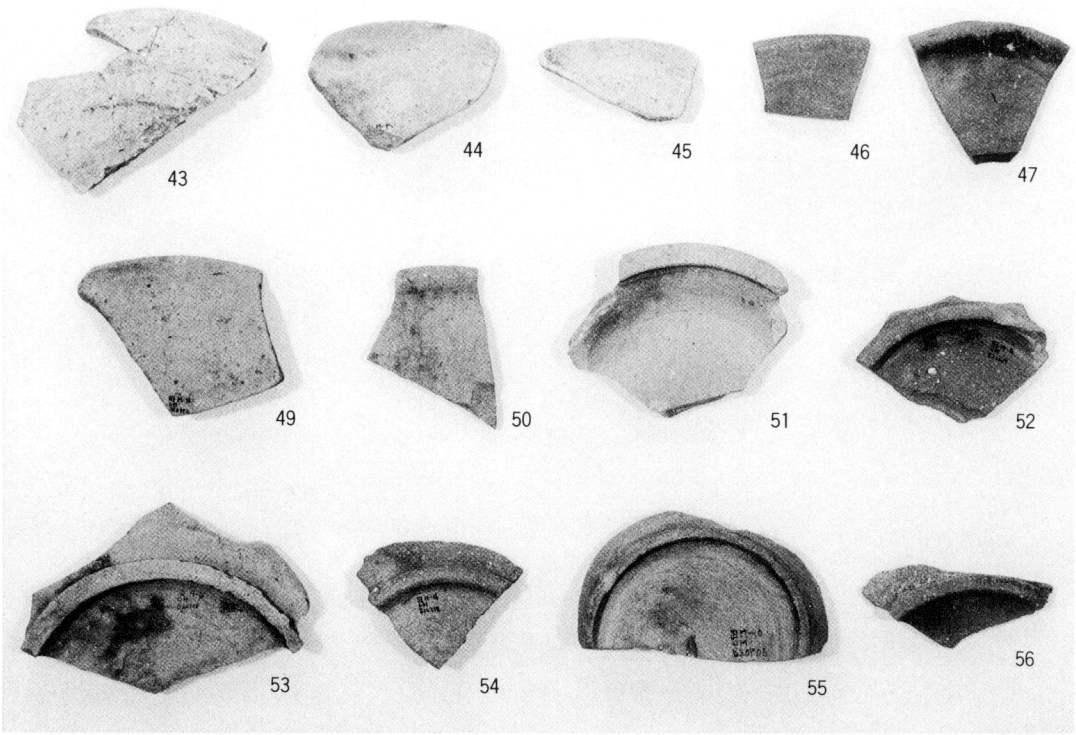


(1)　旧河川跡NR出土遺物（土師器）

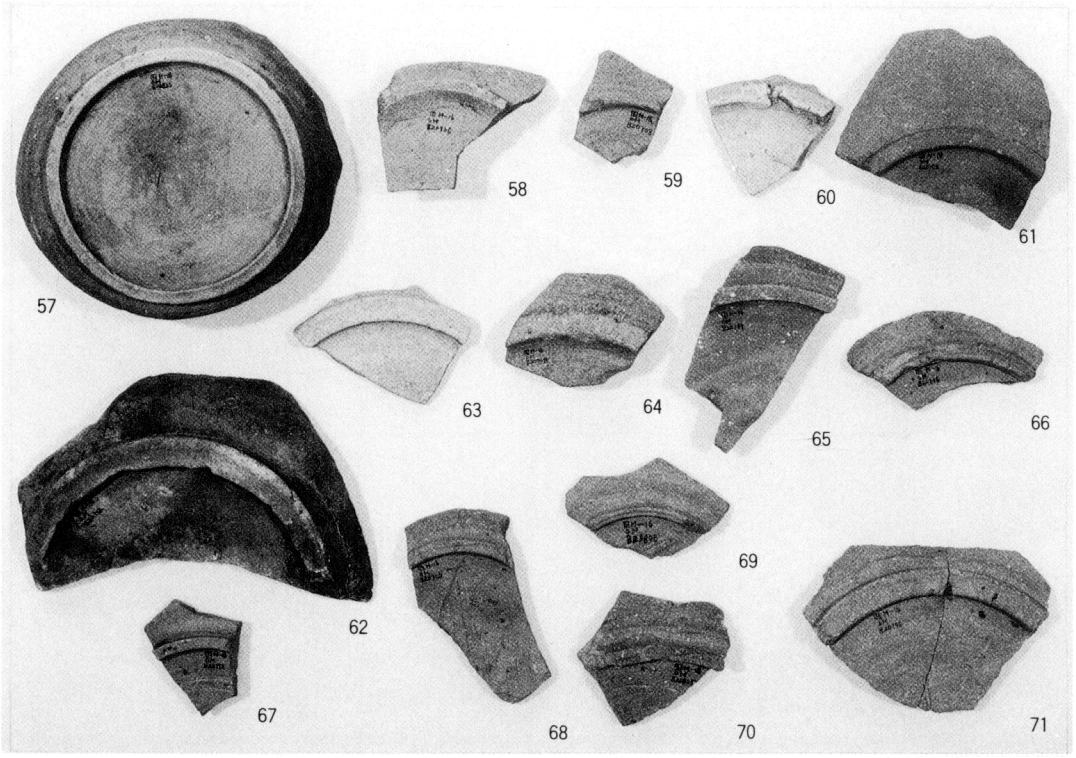




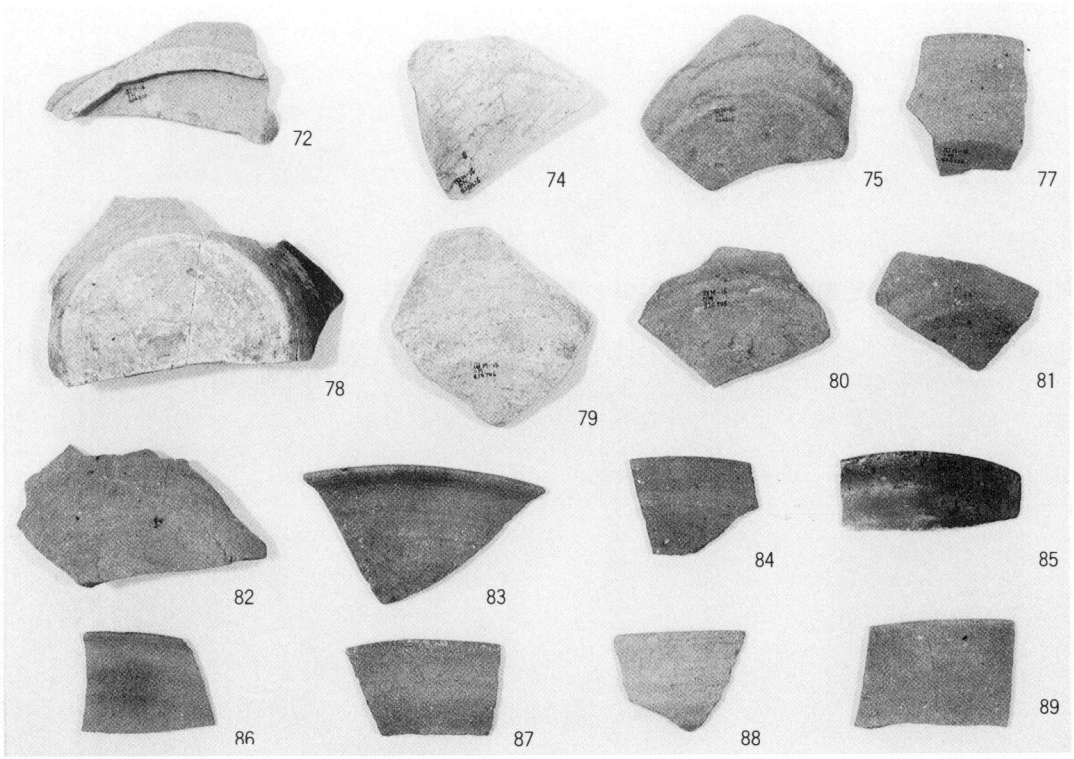
(2)　旧河川跡NR出土遺物（土師器・黒色土器42）



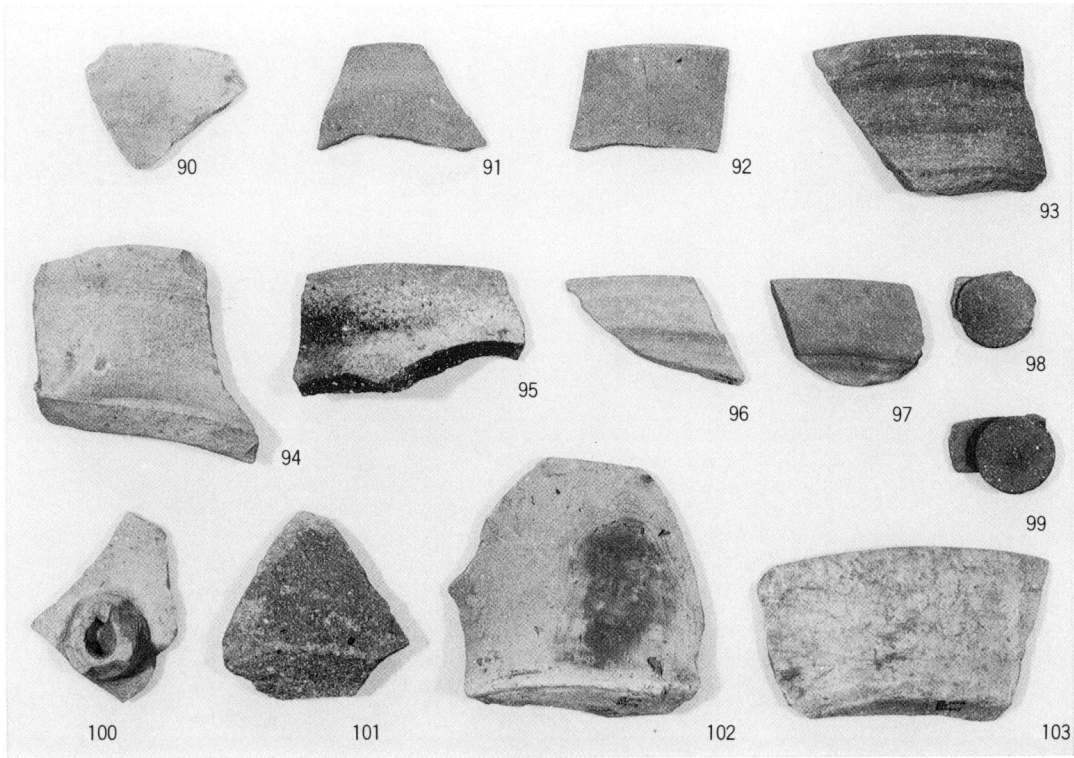
(1)　旧河川跡NR出土遺物（須恵器）



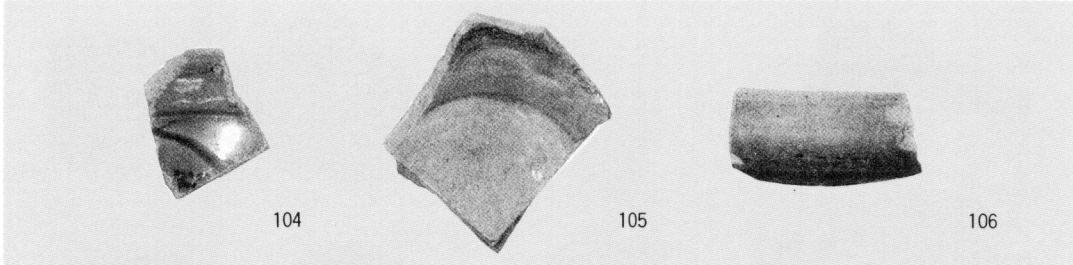
(2)　旧河川跡NR出土遺物（須恵器）



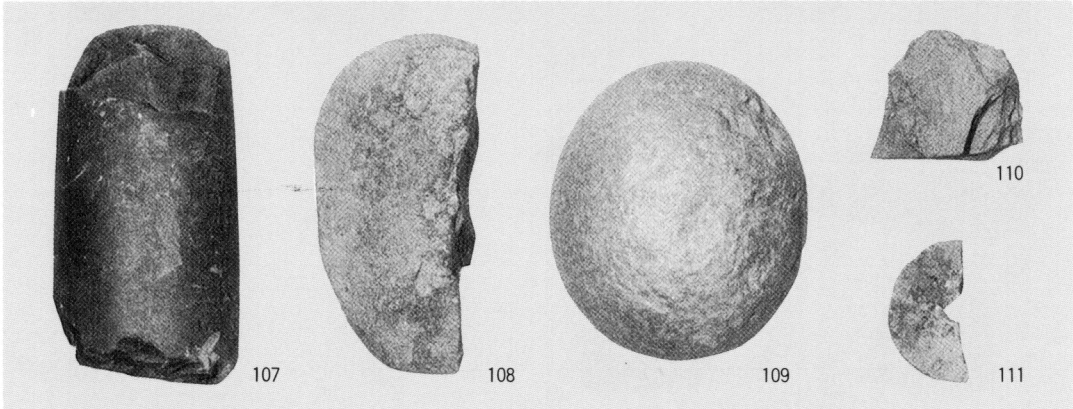
(1)　旧河川跡NR出土遺物（須恵器）



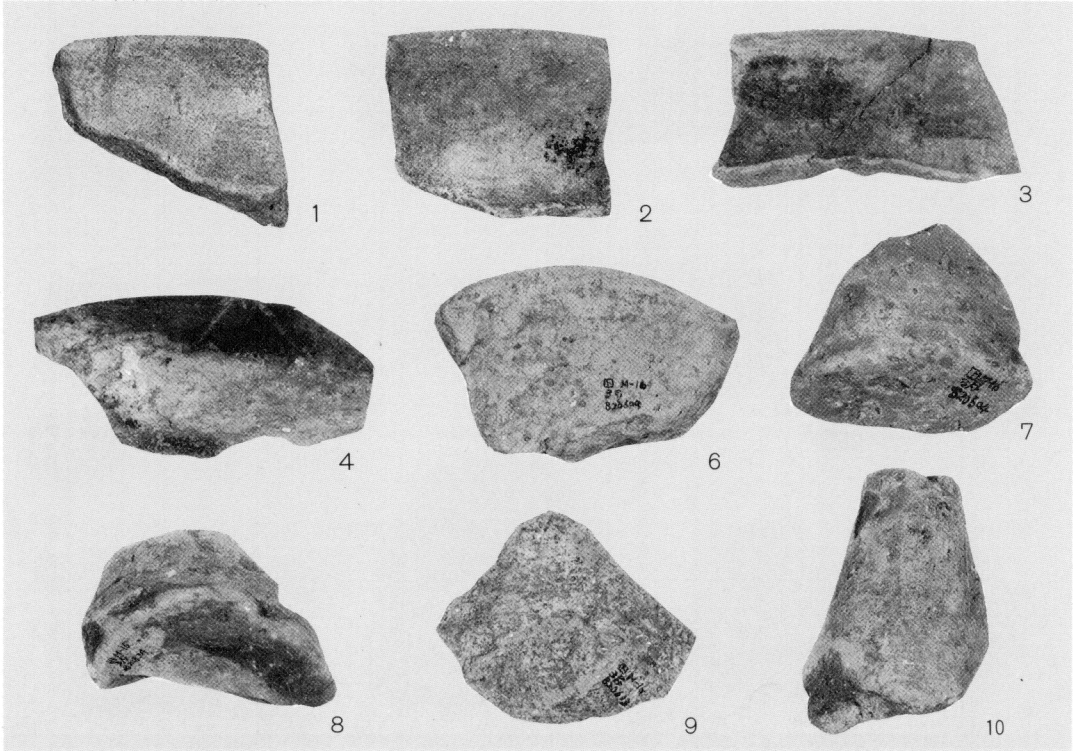
(2)　旧河川跡NR出土遺物（須恵器）



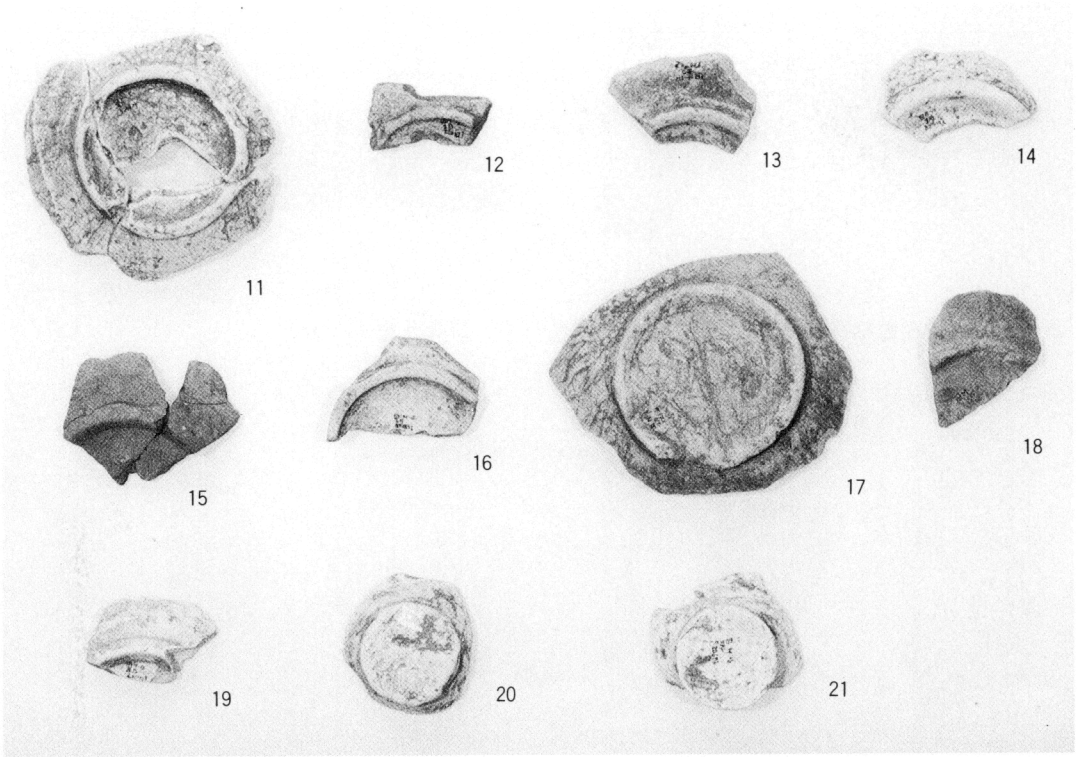
(1)　旧河川跡NR出土遺物（輸入陶磁器 104・105　瓦質土器 106）



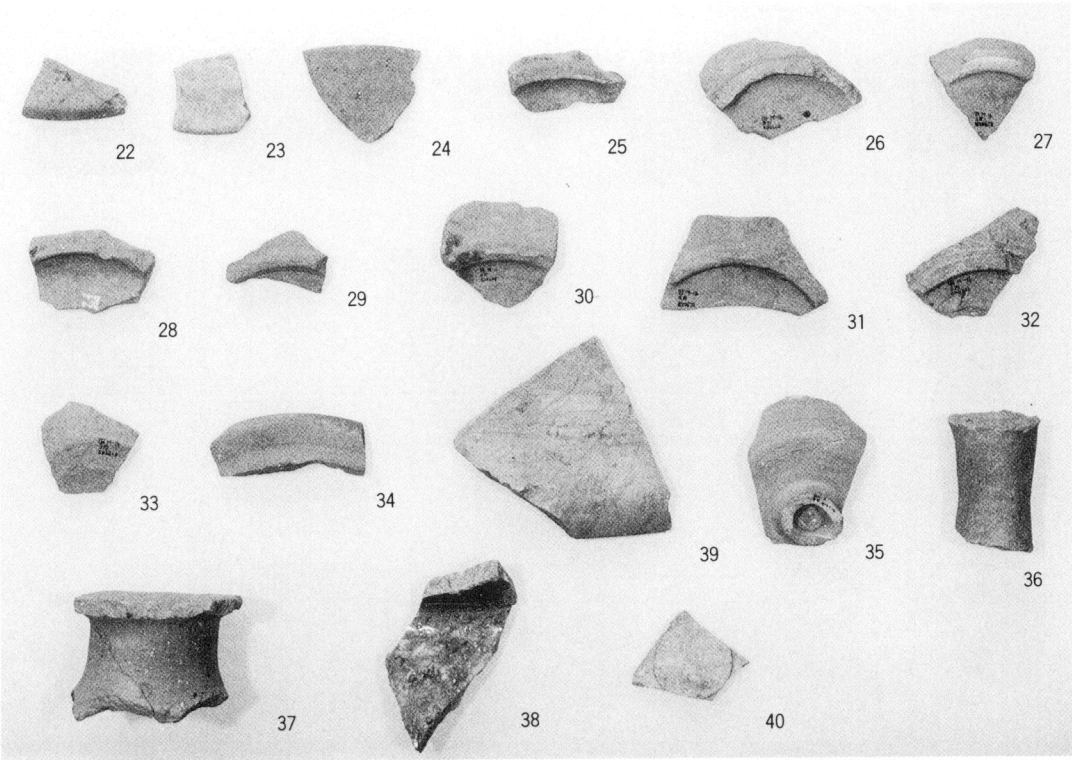
(2)　旧河川跡NR出土遺物（石器）



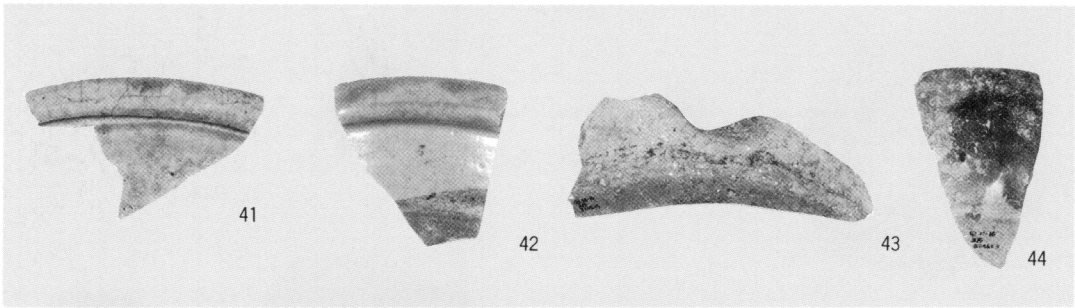
(3)　第 3 層灰褐色粘質土出土遺物（弥生土器）



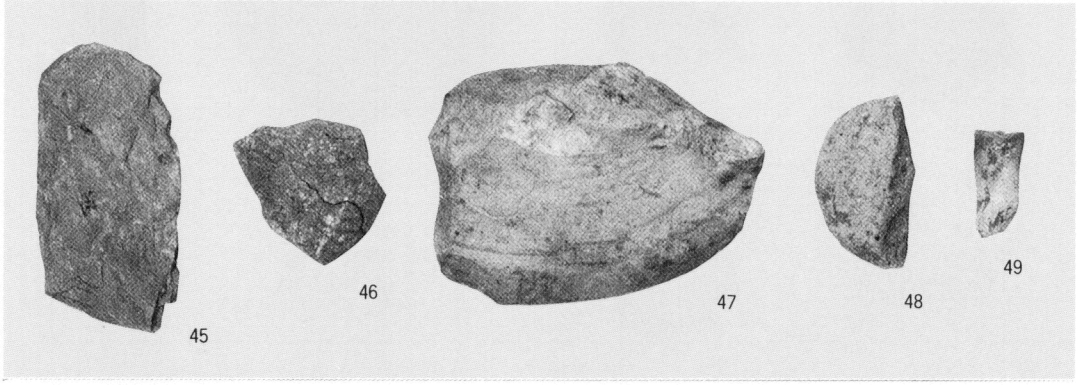
(1)　第３層灰褐色粘質土出土遺物（土師器）



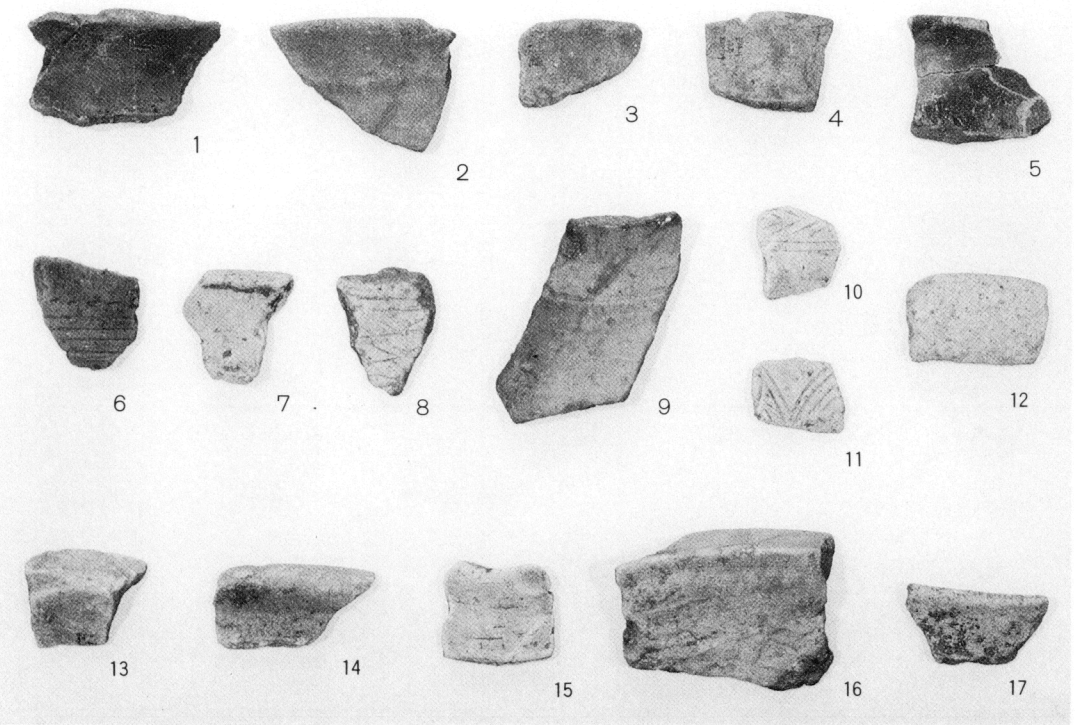
(2)　第３層灰褐色粘質土出土遺物（須恵器）



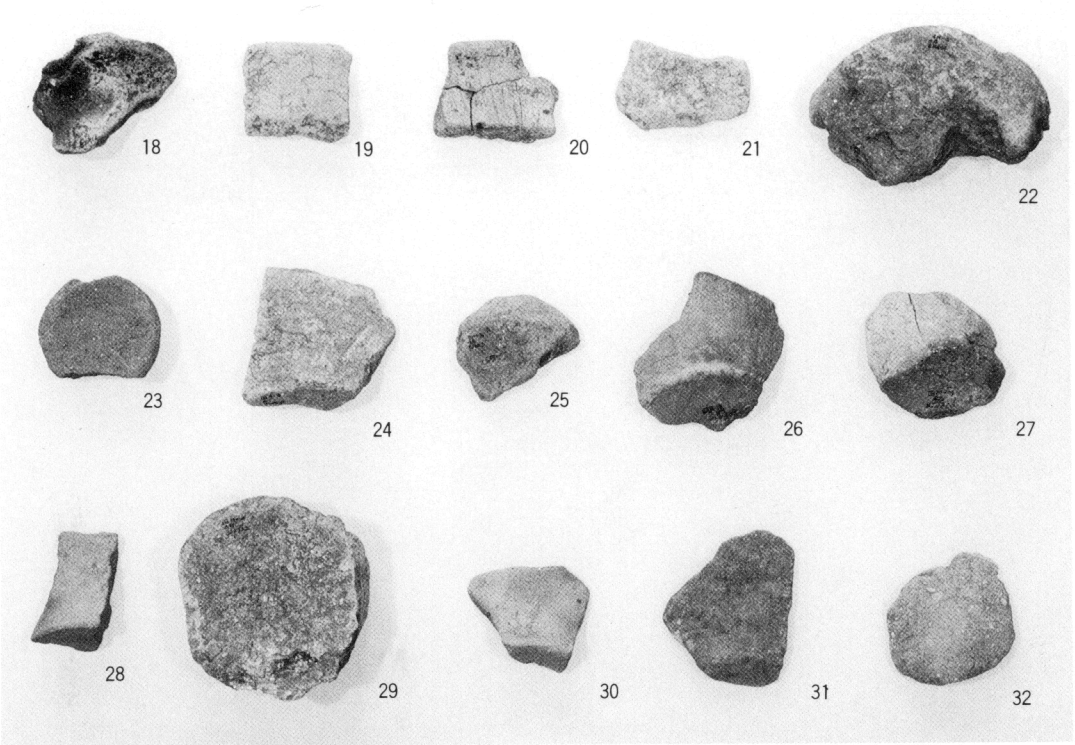
(1)　第 3 層灰褐色粘質土出土遺物（輸入陶磁器41・42　瓦質土器43・44）



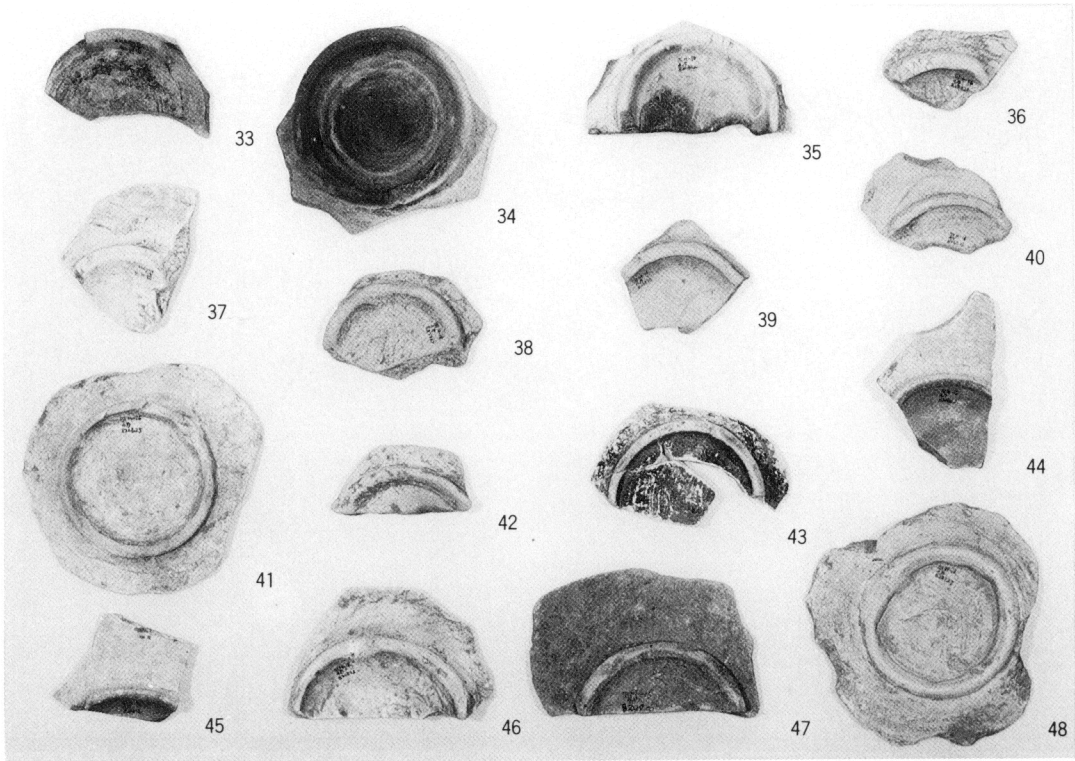
(2)　第 3 層灰褐色粘質土出土遺物（石器 45～47　土製品 48　製塩土器 49）



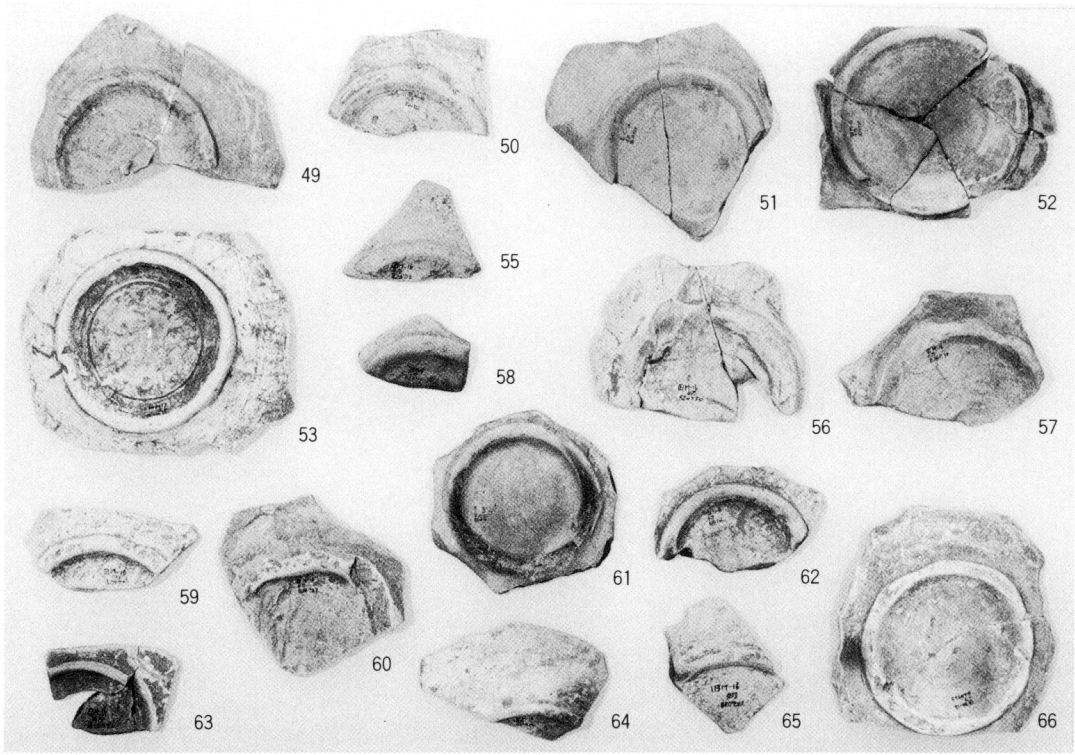
(3)　第 4 層黒褐色粘質土出土遺物（弥生土器）



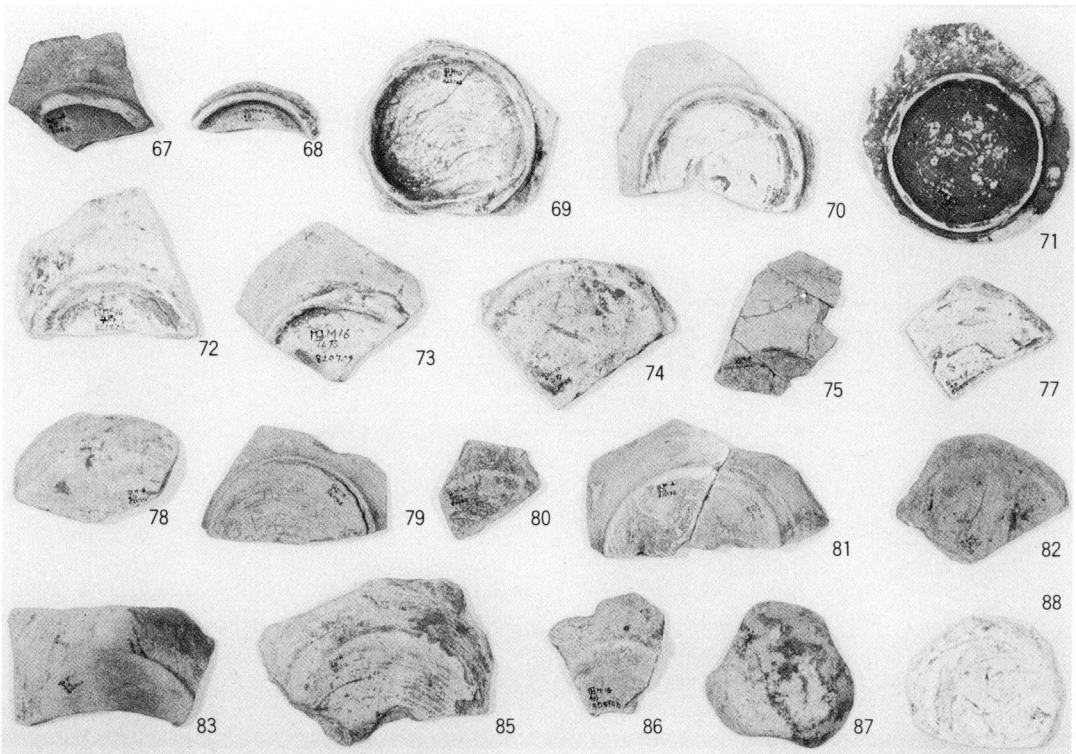
(1)　第４層黒褐色粘質土出土遺物（弥生土器）



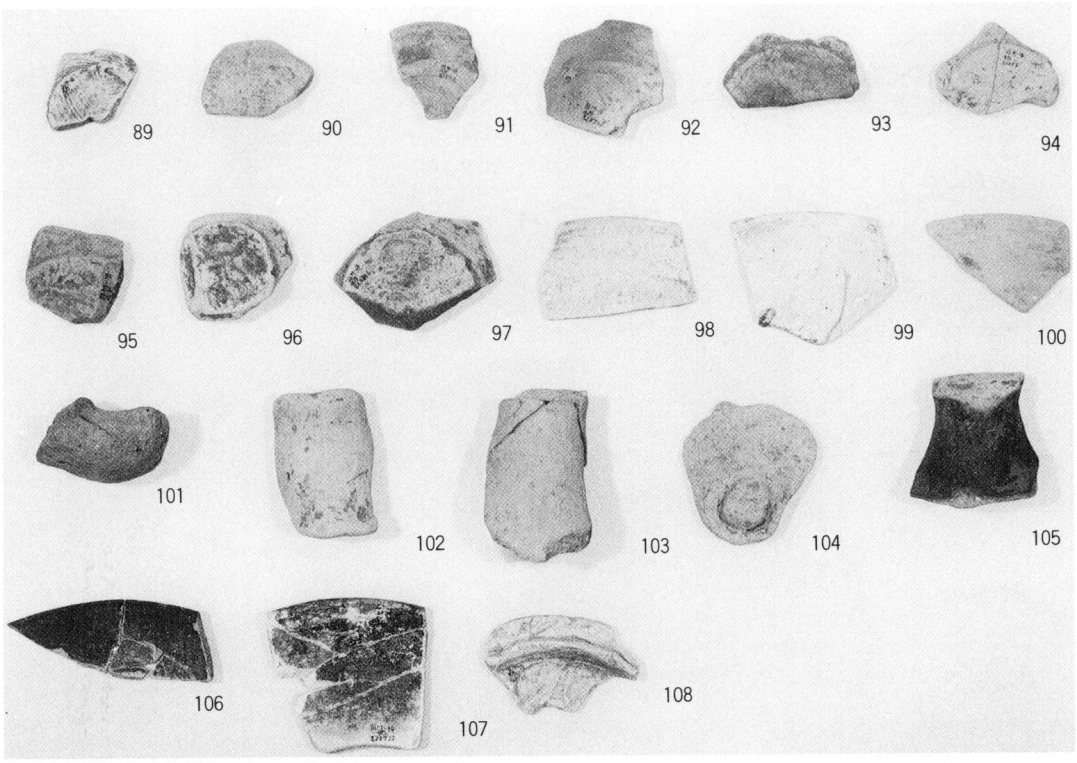
(2)　第４層黒褐色粘質土出土遺物（土師器）



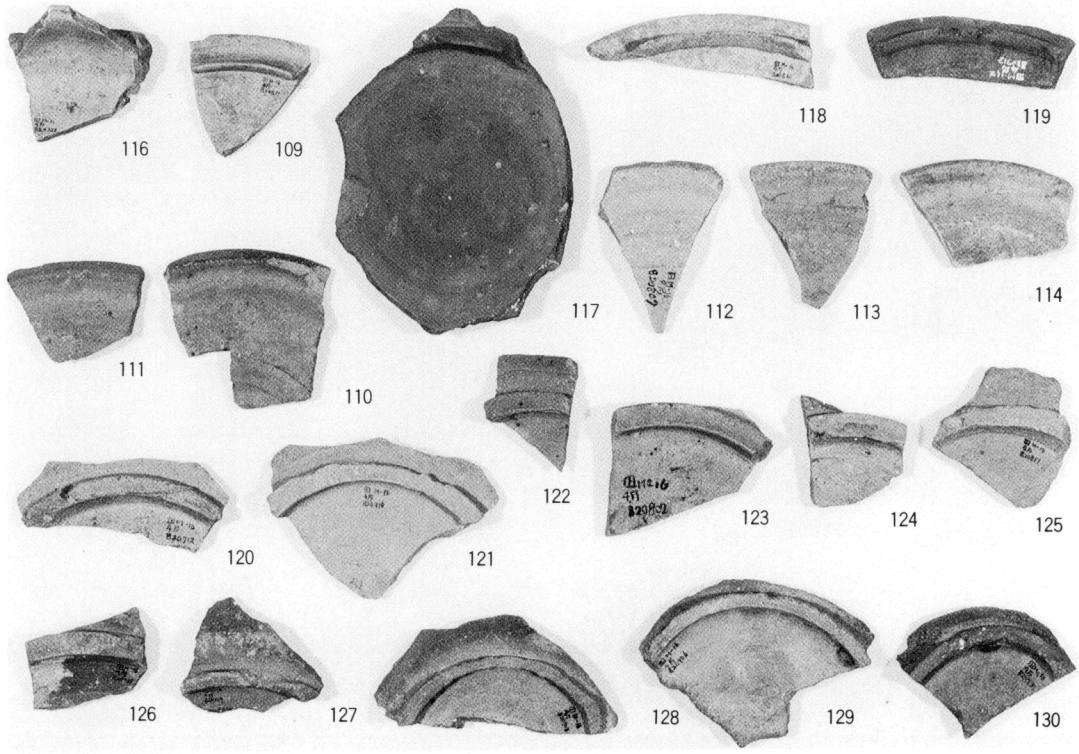
(1) 第4層黒褐色粘質土出土遺物（土師器）



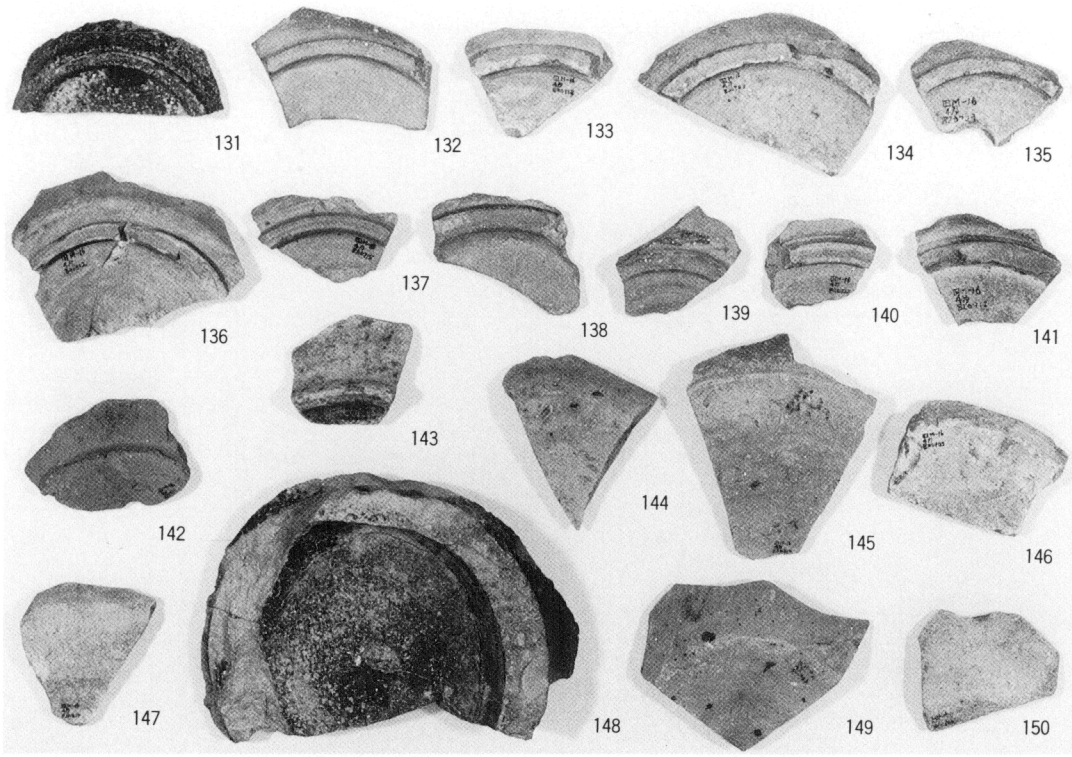
(2) 第4層黒褐色粘質土出土遺物（土師器）



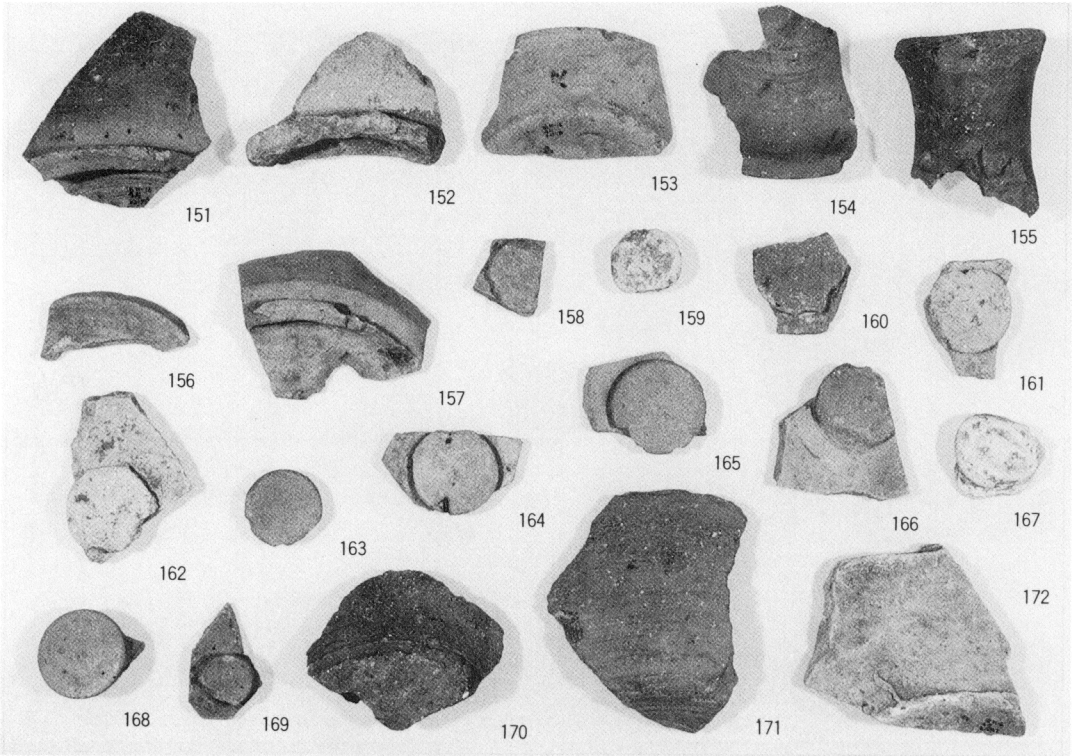
(1)　第４層黒褐色粘質土出土遺物（土師器・黒色土器・須恵器模倣土師器）



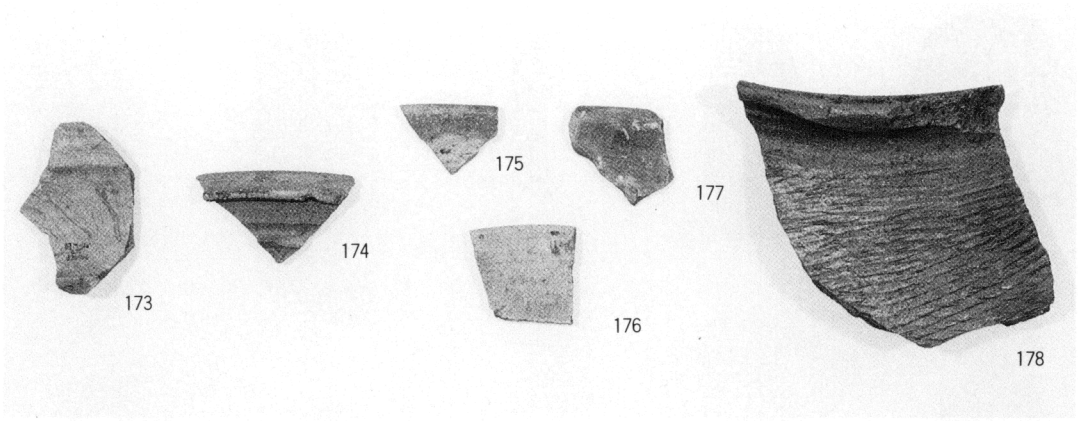
(2)　第４層黒褐色粘質土出土遺物（須恵器）



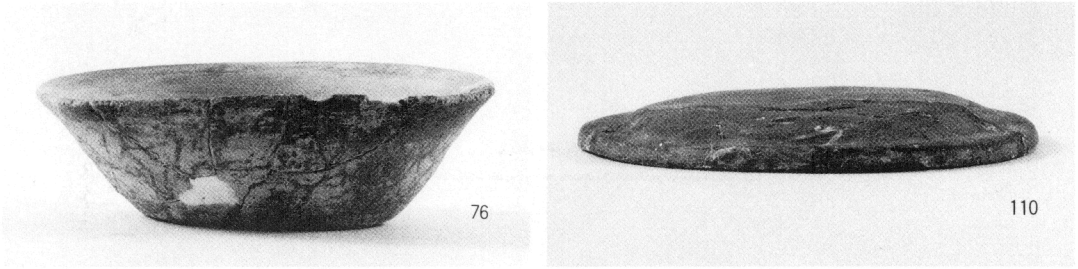
(1) 第4層黒褐色粘質土出土遺物（須恵器）



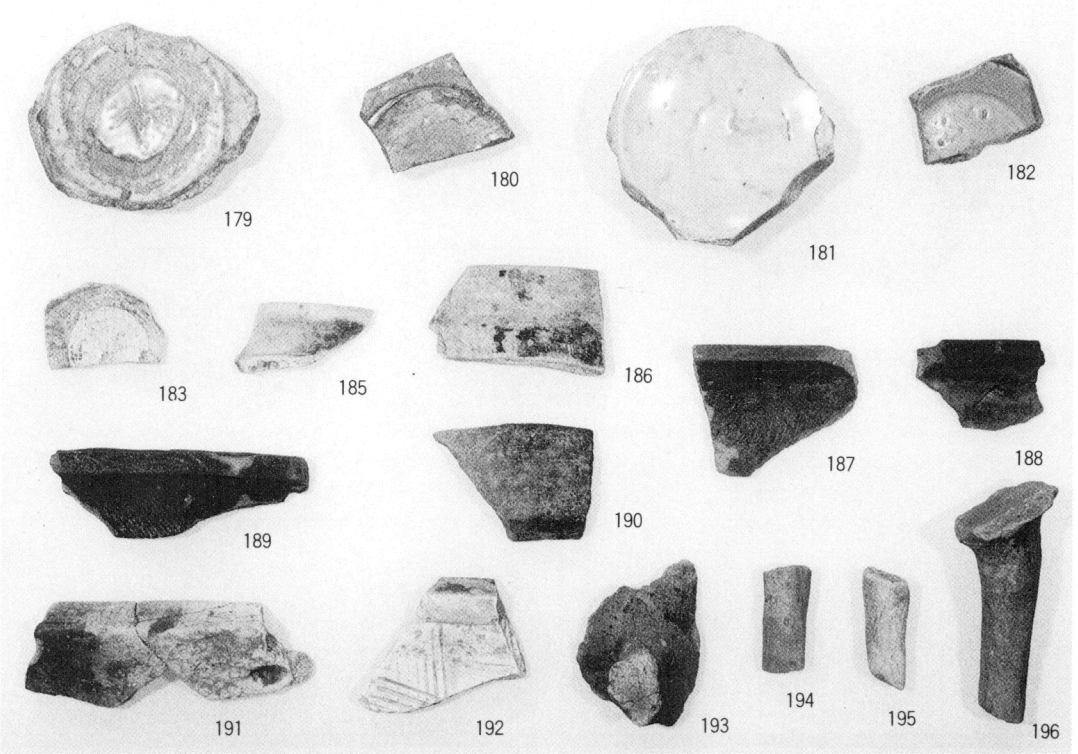
(2) 第4層黒褐色粘質土出土遺物（須恵器）



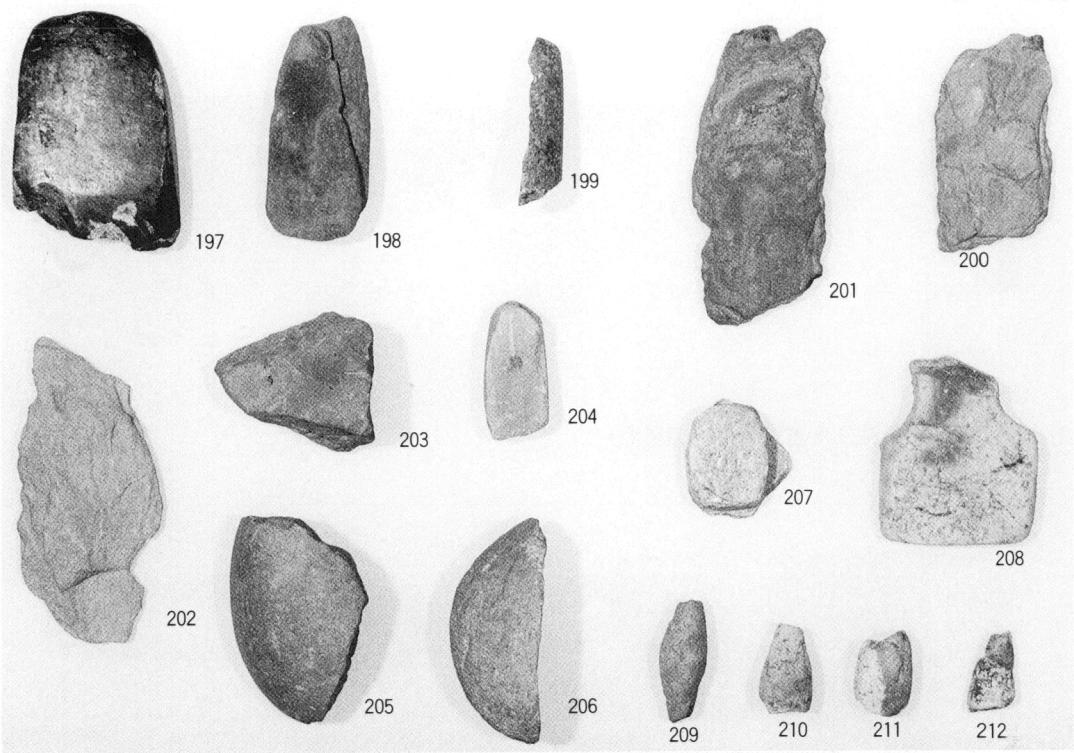
(1)　第４層黒褐色粘質土出土遺物（須恵器）



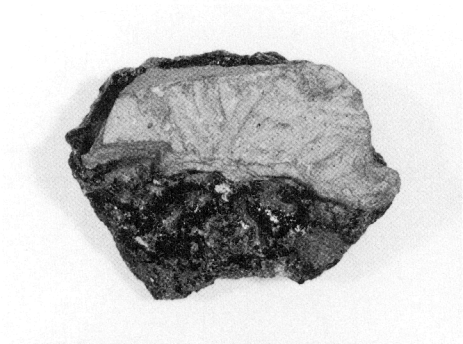
(2)　第４層黒褐色粘質土出土遺物（土師器76　須恵器110）



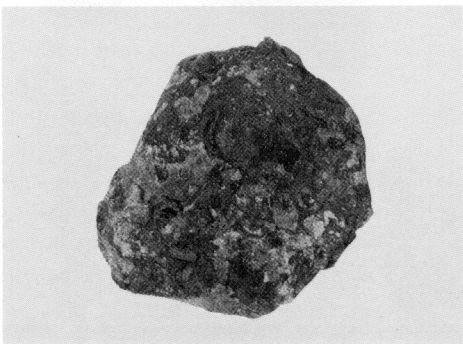
(3)　第４層黒褐色粘質土出土遺物（輸入陶磁器179～183　瓦質土器185～196）



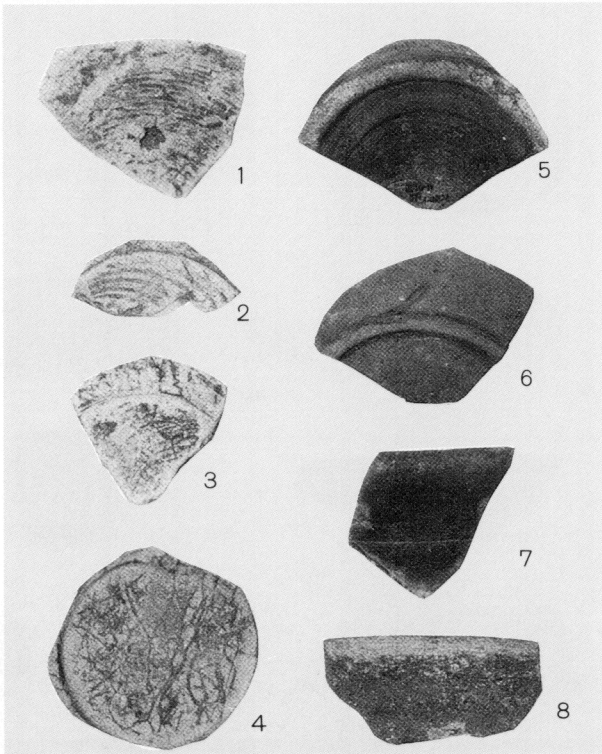
(1)　第４層黒褐色粘質土出土遺物（石器・石製品・土製品）



(2)　第４層黒褐色粘質土出土遺物
（須恵器　窯跡付着資料）



(3)　第４層黒褐色粘質土出土遺物
（スラグ）



(4)　第５層明灰色砂質土出土遺物（弥生土器７
土師器１～６　須恵器８）

山口大学構内遺跡調査研究年報　Ⅱ

昭和60年12月

編集　山口大学埋蔵文化財資料館

発行　山口大学

〒753 山口市大字吉田1677－1

印刷　児玉印刷株式会社

〒755 宇部市明神町３－４－３

ARCHAEOLOGICAL RESEARCHES AND STUDIES AT YAMAGUCHI UNIVERSITY Vol. II

CONTENTS

Chapter I General outline of the project on Yamaguchi University campus in 1982

II Excavation of a large area of the University Library grounds

(1) Progress of research work

(2) ~~Accumulative~~ Accumulative state of layers

(3) Site descriptions

(4) Artifact descriptions

(5) Conclusions

III Soundings in planned area of the University Hall

IV Examination under construction

(1) Lot built as a swimming pool at the Handicapped Children's School

(2) Lot laid for drain box around Radio–isotopes Laboratory

(3) Environmental adjustment area around ~~Facalty~~ faculty of ~~Liveral~~ Liberal Arts

V Appendix

(1) Plant Opal Analysis in extensive area of the University Library *by Hiroshi Fujiwara*

(2) Haji ware from 8th C. to 16th C. in the Bocho, Yamaguchi prefeture

VI The gist of researches and studies at Yamaguchi University

(1) Regulations of Yamaguchi University Archaeological Research

(2) Regulations of Yamaguchi University Archaeological Research Management Committee

(3) Lists of Researches in Yamaguchi University

English Summary

Published by

Yamaguchi University Archaeological Research

Yamaguchi, 1985